

---

# 半枯れトリオの旅日誌【中国・上海編】

一二三四

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

半枯れトリオの旅日誌【中国・上海編】

### 【Nコード】

N8858X

### 【作者名】

一二三四

### 【あらすじ】

恥も外聞もかなぐり捨てたオヤジ三人組、一家の恥、村の恥、延いては日本の恥と蔑まれても、今日も行きます地の果てまでも……。まだ枯れるには早過ぎると自らを鼓舞するも、精々が中途半端な生乾きの三人組どすえ。

一夜干しの干物はうまいよね。

人間も同じで、うまさのグツと凝縮された、生乾きの半枯れオヤジが一番おいしいどすえ。

もちろん、酸いも甘いも噛み分けたオヤジだからこそ出せるうまさ

どすえ。

ぜひ一度、味わってみてください。

それではご紹介いたしましょう。

まず始めに控えしは、一見冷静沈着な二枚目“エロ河童”こと峪口真一どえす。

次に控えしは、機関銃のごとき口撃が売りの“エロハゲ”こと施川克己じや。

最後に控えしは、日本の農業は俺あ（オラア）に任せろと意気込む“エロ熊”、或いは“エロ豚”こと邑中和年だ、ど。

三人三様、個性豊かな半枯れオヤジの珍道中第一弾、“半枯れトリオの旅日誌【中国・上海編】”だけんど、あんまし期待しねえでくんど。

ああ、ふんだ、言い忘れつとこだった。

この駄文はよお、他のサイト（無料のネット小説サイト）にも載ってっからよお。

邑中談

## 第一章 東風吹かば（前書き）

或る年の二月、たにぐちしんいち 峪口真一の四十年来の友、せがわかづみ 施川克己とむらなかかずとし 邑中和利が週末を利用して上海へ遊びにやって来た。

峪口は仕事の関係で上海に駐在し、すでに数年が経過していた。

施川と峪口は高校時代からの親友で、家が近いこともあり、学生時代はもとより就職してからも毎日のように顔を合わせていた。

年齢は当然のことながら同じだが、二人の性格はまるで正反対、それがまた長い付き合いの続いてきた理由かもしれない。

性格も正反対なら体型も対照的で、峪口は痩せ型で長身、施川はズんぐりむっくり型だが、最近では年齢相応の腹の出っ張りが互いに気になっていく。

峪口と邑中むらなかかずとし和利は保育園からの同窓ということになるが、本格的な付き合いは高校生になってからである。

邑中はそれこそヤンチャで、保育園を二ヶ月で退園させられた武勇伝の持ち主である。

峪口と施川は定年間の会社の社員だが、邑中は三十二歳で地方公務員を辞め、大農家の経営を引き継いだ。

邑中の体型は、施川をひと回り大きくしたアノコ型である。

邑中の性格は又、峪口と施川の違い以上に異なる。

三人の性格が異なるが故に、四十年という永きに亘って付き合いが続いているのかも知れない。

今回の旅日誌では、施川と邑中が初めて訪れたときの珍道中を紹介する。

## 第一章 東風吹かば

### 第一章 東風吹かば

#### 一、友の襲来

1

二〇××年二月の下旬、三泊四日の予定で施川と邑中が上海にやって来た。

その日、峪口は二人を虹橋空港まで出迎えた。

およそ二ヶ月ぶりのご対面である。

施川は顔を合わせるなり、まるで溜まっていたものを吐き出すかのように、一気に喋り出した。

飛行機の中で相当酒を飲んだ様子で、施川の口はいつにも増して滑らかである。

「オメエよくしゃべんなあ。女みてえだんべよお」

「おお、なんだ邑ちゃん。あんたも遠慮しないでしゃべれよ」

「オメエがしゃべくりまくってっから、俺あ（オラア）口を挟めねえべ。オメエは少し黙ってる」

「いや、悪い悪い。家の方は大丈夫だったのか？」

「オラアち（俺の家）かあ、この時期は野菜がねえから、でいじょうぶだあ」

三人は久しぶりの顔合わせに、それぞれの近況や家族について饒舌に語り合った。

もし、運転手が三人の会話を理解できたら笑い転げたことであろう。虹橋空港から峪口が住むマンションのある徐家匯までは、道路が混まなければタクシーで約二十分の道程である。

タクシーに乗って十分ほどすると、施川と邑中は急に黙り込んだ。

峪口が後ろの座席を振り返ると、二人は口をアングリと開けて眠り込んでいる。

さすがに旅の疲れが襲ってきたのであろう。

飛行機的时间から逆算すると、家を早朝の五時半には出ているはずである。

「着いたよ」

と言う峪口の声に反応して、施川がパツと目を覚まし、

「わし、寝てた？　ここどこ？」

と、とぼけた質問をしてから、首を二度、三度と廻し大きな欠伸をした。

「ほれ、邑、起きろ」

「あつ、ふうん……」

「あつ、ふうん、じゃねえよ。どうせスケベな夢でも見ていたんだろ。このまま日本へタクシーで送り返すぞ」

「タクシーじゃ日本へくれえめえよ。ほれ峪口、銭っ子」

「ったく、屁理屈ばかり言いやがって」

「はははは……、いいよいよ、金はあるよ」

「いいべよ、ほれ銭っ子」

「峪口い、もらっておけよ。なんならわしが……」

「アホッ、オメエも少しは氣い使え」

「あつははは……、わしはいいンじゃ。わしと峪口はそんな関係じゃねえ。なあ、峪口い」

「いつたい、どんな関係じゃ？」

「ほれ、見る」

「まあまあ、いいからいいから。後で飯代を出してくれ」

「わかったか、邑ちゃん」

「ふんじゃ、俺あと施川で夕飯代を出すべえ。な、あ、施川ちゃん

……」

「……、いい天気じゃ」

「ま、た、すつとぼけてよお」

「ほれほれ、いいから早く降りる。運ちゃんが困っているぞ。荷物、忘れるなよ」

タクシー料金は三十五元、峪口は四十元を運転手に渡した。

2

峪口は、マンションへの出入り方法について簡単に説明してから、二人を部屋に導いた。

「なかなか良い部屋じゃないか。これでも隠しているんだろう。奥さんに頼まれたからよ、どれどれ……」

などと勝手な事を言いながら、施川は遠慮もなしに各部屋を覗いて回った。

「おい施川あゝ、あんまし、他人の家の中をジロジロ見るモンじゃねえどお」

「いいんじゃない、いいんじゃない。わしと峪口はそんな関係じゃねえ」

「だから、どんな関係じゃ？」

「こゝんな関係じゃー!!」

と言いつつ、施川は峪口に抱きつき、腰を前後に卑猥に振るった。

「こらっ! 止めるッ! こらッ!」

「へへへっ……、いいじゃねえか。ウリウリウリ……」

「あれえゝ、オメエら、そうゆう関係だったのかあゝ」

邑中が疑りの表情を作った。

「バカッ! 止めるつて。邑中が誤解するじゃねえか」

「もう誤解しちゃったモンねえ」

「焼餅焼くなよ」

「バゝカ、俺あにそんな気はねえ」

ひと通り部屋を見終えた施川は、ソファーにゴロリと横になり、

「酒はある?」

と訊いた。

「あるにはあるけど……、あんた、まだ飲むの?」

「ふんとに、俺あ恥ずかしくってよ。飛行機ン中で、なんけえもな  
んけえも> “ビールだ、ワインだ” って頼むんだもんよあ」

「そうかそんなに派手に遣ったのか？」

「うんだ。俺あもう小ッ恥ずかしくって、帰<sup>けえ</sup>りの飛行機に乗れねえ  
よあ」

「そうかそうか、こつちへ残るかあ。いいこつちや。峪口い、熊を  
よろしくな」

「もう止めておけよ」

「なにをおっしゃいますやら。せつかくの休みだ、酒ぐらい飲ませ  
るよ。おつ、良い酒があるじゃん」

と、サイドボードのウイスキーを目ざとく見つけた。

「これッ！ これは君が飲むような酒じゃない」

「わしにはもつたいたい、か。へへへっ…、氷ある？」

「はいはい、ございますよ。水は？」

「水ッ！？ こんな良い酒にい、バカをゆっちゃいけません。それ  
こそもつたいたいねえ。そうそう、わしも土産持って来たからな」

「施川がなかなか出さねえから、持ってけえるつもりかって、俺あ  
しんぺえしてたんだあ」

「俺はまた、テメエの飲み分を持って来たのかと思つたよ」

「へへへっ…。それもあ。酒とタバコ、土産を奮発しといたから  
な。シーバスの十八年ものだぜ」

「俺あも半分出したんべえよあ」

「あれえ〜、そうだっけえ〜」

「はははは…、二人ともありがとう」

「この意地きたねえのに、礼はいんねえ。どうせ、自分で飲んじゃ  
うんだからよあ」

「かも知れねえな、はははっ…」

「ツマミ、なにかある？」

「買ってあるよ。ちよつと待ってナ」

「タバコの吸殻でよかんべえ」

施川はロツクで二杯、三杯と呷り、饒舌に喋っていたが、少し眠くなつたと言つて目を閉じた。

「まてまて、ベッドで寝ろよ。ちゃんと用意してあるから」

「いい、ここでいい。面倒くさい」

「峪口いゝ、その辺へおつ転がしとけばいいよあ」

峪口は鼻を鳴らし始めた施川に毛布をかけ、毘中に言った。

「俺は会社に顔を出してくるから、テレビでも視ていてくれよ。六時過ぎには戻れるから、後で飯を喰いに行こうよ。このうるせえのも頼んだよ」

「うん、わかつた。この喧しいのもでえじょうぶだ」

施川が寝ぼけた声で、うんうんと頷いる。

躰は廊下まで聞こえていた。

3

午後六時の終業を待ち兼ねた峪口は、従業員への挨拶もそこそこに会社を飛び出し、タクシーでマンションへと急いだ。部屋に戻ると、案の定と言うべきか、施川がいない。

机の上には数本のビールの空き缶と氷の溶けた水割りグラスが置かれていただけだった。

「毘中、あいつは？」

ソファアで躰を搔いている毘中の肩を揺すつた。

「あつ、うつぶん……。もう喰えねえ……」

「おい、起きろよ」

「うむむむ、あつ、峪口い……、けえつたのかあ」

「ああ、ところであいつは？」

「うん……？ ウンコでもしてンだべえ」

「いや、いない。どこにもいない。靴がないから外へ行つたンだろ  
う」

「あれえゝ、ぜゝんぜん気いつかねえかつた。あのバカ、どっかへ

行っただんだ」

「そうか……、まあ、そう遠くへは行かないだろう」

峪口は、下手に探し回るよりはと考え、部屋で施川の帰りを待つことにした。

三十分ほどすると、電話の呼び出し音が鳴った。

受話器を取ると、ガードマンからだった。

「わし、わしじゃ。中へ入れてもらえないんだけど、なんとかしてちょうだい」

と心細げな声。

峪口がガードマンに電話を代わらせ、“俺の友人だ”と言うと、“

オツケー、オツケー”と直ぐに納得してくれた。

部屋に戻った施川が、

「出たときとガードマンが交代していたんだよ」

「ここは管理がしっかりしているからな」

「それにオメエは人相が悪いかな」

「なんとということ、精錬潔白、人畜無害が売りのこのわしを捕まえて……」

「厚顔無恥の間違いだんべえ」

「おつ、邑ちゃん、うまいことゆうねえ」

「へへへっ……、違いねえ」

「ところでどうする？ 梨田総経理と一緒に食事しないかって言っているんだけど」

「梨田社長が……でも、わしらもいいの？」

「誰だあ、梨田社長ってナ？ 俺あ知ンねえけど。梨田総経理って人も知ンねえ」

「同じじゃ、アホ。まあ、わしは面識あるけど、こっちの野生熊もいいのか？」

「野生熊ってナ、俺あのことかあ……」

「あつ、悪い悪い。熊が気を悪くするわ」

「もちろんだ。二人のことは話してある。社長がぜひ二人も一緒に

って、言ってるんだから」

「そうか、断わるのもなんだしなあ。おい熊、というわけだ」

「よし。うんじゃ、着替えて行くべえ」

「このままじゃ、ダメエ〜？」

「バ〜カ、グズグズゆってねえで、オメエも着替える。峪口に恥かかせんじゃねえ」

「へいへい。わかりやした」

「急いでくれよ。七時の約束だからな」

三人はマンションの前の“華山路”に出てタクシーを捕まえた。

「ところで、どこで食事するの？」

「ガーデンホテル花園飯店の“白玉蘭”さ。高級中華料理店だぜ」

「へーえ……」

「高級なラーメン屋かあ。俺あ五目ソバが好きだな。あれもあつかな、あれ？」

「あれじゃわからんだろうが」

「あれだよあ〜、あれえ〜」

「だからなんだっていうの？」

「高級中華ソバ屋ならあんべえ。ほれ、あれだよ、マ、マーボ豆腐  
井」

「……………」

「峪口、放っておけよ」

「ははははっ…、あるよ。総経理は花園飯店に住んでいるんだよ」

「さすがに違うなあ、わしらとは」

「まあな。俺みたいにマンションへ住んでもらってもいいんだけど、世話が焼けるしね」

「ふふふふっ…。一時間ごとに電話がかかってきたりして」

「あのホテルは日本語でまったく心配ないから。それに社長はVIP待遇だからね」

「そつなの？」

「うん。あのホテルは、日本のオークラホテルが経営しているんだ」

よ。総経理は日本でも昔からよく使っていたようだし……。それに、ほら、自分の結婚式もやっただろう」

「なるほどねえ。我々庶民とはお金の使い方が違うわけだ」

「まあ、そうゆうことだよ」

二、高級中華レストラン “白玉蘭”

1

タクシーはホテルの正門から入り、正面入口前に停車した。直ぐにボーイが飛んできて、ドアを開けてくれる。

峪口も出張時には定宿にしており、今でも時々お客様の接待などに使用しているので、顔見知りの従業員も多い。

ロビーから電話で梨田に到着を告げ、エスカレーターで二階に上がり、踊り場に常設されているソファアで待った。

「そこがバイ、バイ……なんだっけ？」

バイユラン  
「白玉蘭」

「ハクギョクラン、か。わりと入口は小さいんだね。でもあの壺、タツかそう」

白玉蘭の入口には、高さが一メートルほどで赤い唐草模様の描かれた一対の壺が置かれている。

入口は小さいが、店内は驚くほど広い。

ソファアが暖まる前に、梨田がエレベーターから姿を現した。

背中にセーターを背負い両袖を前に垂らした、いつものお気に入りスタイルである。

「やあ、施川さん。お久しぶり。お元気ですか？」

と、施川の緊張をほぐすかのように、梨田は優しく声をかけた。

「お久しぶりです。今日はすいません、私まで……」

それでも施川は緊張気味に応えた。

「こちらが先ほどお話した、私の友人の邑中です」

「は、初めまして、峪口くんのお友達で、む、邑中と申しますう」

「おっ、ほぼ標準語だ」

「う、うるへえ」

「くくくっ…、峪口君とは保育園からの付き合いなんですか？」

「うんだあ。ふんでも俺あ、直ぐにやめちまったから……」

「邑ちゃん、言葉は正確にね。退学じゃねえや、退園になったんですよ」

「施川あ…、オメエはほんとにうるせえなあ」

「総経理ありがとうございます。お招きをいただきまして……」

「あっ、いいのいいの。峪口くんの顔は見飽きているから、偶には違う人たちと食事をしたかったの。ふふふっ…、さあさあ、中に入りますよう。予約してありますから」

入口を入るとチャイナドレス姿の小姐（女性従業員）が出迎えてくれる。マネージャーと思しき黒い制服に身を包んだ女性も出迎えに出て来て、

「梨田様、いつも当店をご利用いただきまして、ありがとうございます」

と丁寧な日本語で挨拶をした。

梨田もニコニコと照れたように応じる。

入口付近では二胡と中国琴を使った演奏が奏でられ、哀愁を帯びた少し悲しげな音色が流れている。

「いい雰囲気ですねえ。それにホテルも素晴らしい」

施川が梨田に感動を素直に告げると、

「うん。こここの中華料理は美味しいよ。日本や香港の味に近いんだ。どうも街中の料理って、僕には合わなくてね。うふふふっ…」

「そっ、そうですね。いつも一流のお店に行かれていますのですね。うから……」

「そうですね。……どうも衛生状態が気になってね。峪口くんたちは平気なんだよね。ねえ、峪口くん？」

「ええ、どうせ私なんか、元々がそういう下賤の育ちですからねえ」  
峪口がいじけた素振りで答えると、

「うふふふっ…、まあまあ、いじけないの」

「いじけるもなにも梨田社長と我々では、いや、とてもとても。特にこの野生熊などは、なにを喰らっても中ったことがあります。特  
なあ、毘ちゃん」

実に調子のいい男である。

「やせいくま？」

「へへへっ…、毘ちゃんの愛称です」

「俺あ…、俺あもときどきは中るど。こねえだも、冷蔵庫の中の残り物喰って豪い目にあつたもんだあ。母ちゃんがもったいねえから、喰え喰えってゆうもんだからよあ。後で、“いつのもんだあ？”って訊いたらよあ、“わかんねえ”ってゆうモンだから……」

「話が長い」

施川が焦れたに毘中の話を遮った。そして、  
「オマエさんとは愛がないんじゃないの」  
と付け加えた。

「ふんなこたあねえ。ここへ来る前の晩だつて……」

「はい、ストップストップ。危ない男じゃ」

「ふふふっ…、毘中さんて面白い人だね」

2

ひと口に中華料理と言っても、上海風、北京風、広東風、四川風、或は香港風や台湾風といろいろあつて、一般的には日本で食べる味とはかなり異なっている。

峪口は、香辛料、特に“八角”と香草に原因があると考えているが、慣れるにしたがい日本の味では、却って物足りなくなってくるから不思議である。

八角はダイウイキョウの実、香辛料の一種で形が八角の星形をして

いることから名付けられた。

「うふふふっ…、色っぽいでしょ」

「なっ、なんですか、急に」

「ほら、彼女たちのチャイナドレス……」

「ほらほら施川、卑猥な目で見るなよ」

「えっ、わしは人畜無害じゃ」

「ほれ邑ちゃん、涎、涎」

と、峪口が邑中を茶化すと、

「あ、うん……、出てねえべよお」

口角を慌てて手で拭ってから応えた。

「総経理も涎、涎」

「うふふふっ…」

小姐（女性従業員）の身に着けているチャイナドレスには深いスリットが入っていて、歩くたびに太ももがチラリ、チラリ、男性には真に目の毒である。

大きな丸テーブルではなく、奥まった四人掛けの四角いテーブル席に案内された。

四人では少し狭い。

白玉蘭の料理は大皿ではなく、フランス料理さながらに、一人前ずつ取り分けて別々の皿で供される。

使う箸とスプーンは錫製、テーブルクロスやナプキンも真っ白で糊の効いた清潔感溢れるものだった。

「ねっ、料理は雰囲気が大切なんだよ。確かに、街中にも美味しいお店はあると思うけど、なにか不潔っぽくてさあ」

峪口が昼食時に一度、無理に市中の食堂へ梨田を誘ったことがある。そのときは“美味しい、美味しい”と食べていたが、以後、峪口がいくら誘っても梨田がその店に足を運ぶことはなかった。

「さあて、今日はいいいものを食べちゃおうかなあ」

梨田は食道楽、美味しいものには目がない。

日本中の評判の店を食べ歩き、時にはヨーロッパまでも出かけて行

く。

人間が一生に食べられる食事の回数は限られている。だから、一度たりとも無駄にしたいくない、と言うのが梨田の口癖である。

昼食を駅の立ち食い蕎麦で済ませ、夜は“ビールさえあればなんにもいらない”、とゆっゆい加減な食生活を送ってきた峪口も、梨田と付き合い始めて考え方が少し変わった。

但し、お小遣いの関係で、全面的に変えることはできない。

「はい。ご馳走様です」

峪口と施川が満面に笑みをたたえて応じると、

「いいよ。なんでも頼んでください」

「フカヒレ 鱧鱈”……なんかも、よろしいですか？」

わざと遠慮深げに問う峪口に、

「メニコー 姿煮、いつちやおうか」

梨田は菜单から目をあげると、ニコリと微笑んでから、

「おつ、“燕の巣”もある。これはデザートにしよう。お姐さん、お姐さん」

と小姐を呼んだ。

「ねえ、鱧鱈の大きさはどのくらい？」

このくらいです、と小首を傾げ片手を広げて答える小姐に、

「じゃあ、四人分ね。ふふふふ……。あとねえ、そうマーボ豆腐、それから、これ美味しそうだなあ」

と、写真を指し示した。

「豚三枚肉の柔らかか煮でございます」

この料理は、そのまま食してもうまいが、蒸饅頭と一緒に食べると、醤油ダレの濃さがちょうどよい具合に緩和され、より一層うまさ引き立つ。

「それをもらうわ。スープはなにがあるの？ えっ、スツポンのコンソメ味。じゃあ、それも四つね」

そこまで注文して梨田は、

「なにか食べたいものがあれば頼んでいいですよ」

菜单に見入っている三人に声をかけた。

### 三、燕の巢

1

「なあ、ツバメのスつて、なんだあ？」

邑中が小声で囁く。

「燕の巢だよ」

施川が呟くように応える。

「その前に、総経理、ビールを頼みませんか」

「ビールか、どうしようかなあ。少し糖が出ているつて、お医者さんに言われているんだよねえ。……ええいッ！ 今日飲んじゃえッ！」

「それじゃ、総経理は一杯だけにしていただいて、我々がその分も飲みますから、どうぞご安心ください」

「なにがご安心くださいだよ。普通は上司が飲まなかつたら遠慮するものだよ。ねーえ、施川くん？」

「はっ、はい。ごもつともです」

「ふふふっ…、冗談、冗談。どんどんやってちょうだいよ」

「それではお言葉に甘えまして、私はこのマナガツオの燻製風つてやつをお願いします」

と峪口が言うと、

「施川くんもなにか頼んでください」

「はい。それでは、ええと、こ、この海老の水晶炒めをいただきます」

「いいよ、いいよ。どうせ割り勘だからどんどん頼んでください。

うふふふっ…」

と、悪戯っぽく笑った。

「えッ！」

「施川、冗談だよ、冗談。社長の得意技さ」

「うふふふっ…、邑中さんもどうぞ」

「はい、ありがとうございます。なあ、施川あ……ツバメって鳥の燕かあ？」

再び小声で囁いた。

「ああ、そうだよ。空を飛ぶ燕だよ」

「ふんで、スつてのは、巣つこのことかあ？」

「うん、そうだよ」

邑中と施川が小声でやり取りをしている。

「うんだってオメエ、燕は家にも毎年来っけど、巣は泥でできてんだぞ。ど、泥を食うのかあ！」

と、邑中が驚きの声をあげた。

「バカ、種類が違うんだよ」

「泥の種類が違うんかあ……」

と、二人のやり取りが耳に入った梨田が、

「邑中さん、燕の巣っていうのは、本当に燕の巣のことなんですよ。こうなんていうのかなあ……セラチン質でとても美味しいんですよ。峪口がそれを受けて、

「テレビで視たけど、フィリピンとかの小島に住んでいる燕の巣なんだよ。主に洞窟なんだけど、それがとんでもない断崖絶壁で、そこをよじ登って採るんだけど、落ちて毎年何人も死ぬらしい」と説明すると、

「あつ、わしも視たことある。竹で足場を組むんだよな。それで百メートルぐらい登っていくんだ。だから時々は落っこちて死ぬんだ。でも、誰でも採れるわけじゃなくて、ヤクザの親分みたいな権利を持った奴がいるんだよな」

と、施川が付け加えた。

「あつ、そうなの」

「上海でも薬局なんか売っていますね。めちゃくちゃ高いですけど」

「うんまかったら買って帰えんべえ」

「あつははは……、無理無理」

「ふんなことねえよあ。銭っ子はあんど」

「いや、そうじゃなくて、料理が難しいんだよ。俺は鱧鱈を買って帰って家で調理したことあるけど、時間ばかりかかって喰えたモンじゃなかった」

「ふ〜ん」

「峪口くんはなんでもやるんだねえ」

「ええ、そうなんですよ。結構、料理は得意ですよ」「人間、なんか取り得があるモンだな」

「じゃかまし」

「うふふふっ……、ところで、お姐さん、今までに何品頼みましたか？」

小姐の“六品でございます”との答えを聞くと、三人の方を見ながら、

「ここはボリユームが少な目だから、炒飯か焼きソバを頼もうか。

ねえ、みんなはどっちがいいの？ どちらか一皿取って分けようよ」

「はい、私はどちらでも結構です。社長のお好きな方を選びください」

と施川が答えると、

「俺あ、両方喰いてえ」

「ほらね、峪口君。施川さんはちゃんとしているよ、誰かさんと違って。えッ!？」

「へいへい、それは悪うございました。くくくっ……」

「うふふふっ……、じゃあ、“ネギ焼きソバ”と“揚州炒飯”の両方を頼みましょう。美味しいんだよねえ、これが……。うふふふっ……」

どちらかという和日本蕎麦風の食感で、ラーメンの麺のような腰はない。

その麺を茹でて、葱をじっくりと炒め、葱のエキスが染み込んだ油と醤油に絡めるだけである。

揚州炒飯は日本でもお馴染みの炒飯で、卵にハムの賽の目切り、刻み葱にグリーンピースといった簡単な具を使い、味は塩で調える。

ネギ焼きソバは街中の食堂で五元（七十五円）前後と安い上、葱の芳ばしい風味が気に入って、駐在当初、峪口たちは昼食としてずいぶんお世話になった。

「そうだ。お姐さんねえ、デザートに燕の巣ね。甘いやつ。そう、これね。うん、それも四つお願いします。いいよね、みんなも？」

「はい、ありがとうございます」  
ようやく注文が終わった。

四、デザートは“蛙の死亡”？

1

「施川あ…、これこれ、雪蛙の脂肪だってさ」

峪口が菜单の写真を示しながら語りかけると、

「なに、カエルの死亡…、まあ、生というわけにはいくめえな」と、かなりいい加減に応じた。

「死亡じゃないよ、脂肪だよ」

「あんだ、ゲエロがどうした？」

「蛙、雪蛙って蛙の脂肪が、デザートに使われているんだよ」  
梨田もどれどれと、もう一度菜单に目を落とす。

「そういえば以前、“名軒（高級中華レストラン）”でセットメニューになっていて、知らずに食べさせられたことがありますね」

「あった、あった。デザートに杏仁豆腐の具材として入っていたン

だよね。聞いてびっくり、玉手箱。うふふっ……」

知らなければ、ゼラチン質でデザートとして他の食材と違和感はない。

だが、蛙と聞いた途端、全員が“うえッ！”となってしまうた。

「赤ゲエロは焼いて食うと、寝シヨンベンの薬になるんだ。俺も餓鬼ンとき、ばあちゃんに喰わされた。峪口もそうだんべえ」

「うん、まあねえ」

「あつ、峪口、しらばっくれえーて」

「うるさい」

「他に蛙の卵というのもあったね」

「それこそゼラチン質そのものです。梨田社長は蛙の卵って見たことありますか？」

と施川が訊いた。

「そりゃ、あるよ。子供のころは、夏休み間中、野田のお祖父さんのところで過ごしたもの。周り中、田圃ばかりだろう。それにお祖父さんの家にも大きな堀があったしね」

そこへ小姐がビールを運んできたので、四人は話しを中断して喉を潤した。

「さっきの話ですけど、社長の御本家は私たちの家とあまり変わらない環境ですね」

「峪口君の家は運河だろう。そしたら四、五キロじゃないの」

「そんなものでしょうね。施川の家も私の家から一キロぐらいのもんです。邑中の家だと四、五キロはあるかな……」

「へーえ、そうなんだ。三人は幼馴染なの？」

「邑中とは保育園からですが、施川とは高校二年のときからです。

施川はもともと柏の方でしたから、それまでは接点がなかったんです」

「へーえ、柏だったの……」

「邑中さんは？」

「大群っていいいます。峪口とは同じ学校区なモンで、それで、保育

園から中学校までは一緒なんです」  
「あつははは……、保育園の付き合いは短かったけれどね」  
「しッ！ 止める」  
邑中が慌てて峪口を制した。

2

「へへへっ……、退園させられたんですよ」  
施川が口を挟んだ。

「あつ、バカ」

「ええッ！ 退園、退学つてことを……。なんでえ？」

「婦女暴行」

「ええッ！」

「バ、バカ。バカこくでねえ」

「うふふふっ……、いくらなんでもそれはないよねえ」

「ふんとにこの男はバカで、オメエ（施川）じゃあんめえし」

「ちよつと元気が良過ぎただけだよな」

「うんだ」

「うふふふっ……、滅多に聞けない経歴ですね」

「あつははは……、まあ、全国的にもそうはいないでしょう」

「わーかったつてばあ。もういいよあ」

邑中が顔を赤らめて遮った。

「施川君とは高校に入ってからからの付き合いなんだ？」

「ええ、そうです。こう見えても中学までは短距離の選手で、近隣ではけっこう有名で、ずいぶんもてたらしいですよ。まあ、今じゃ面影もないですけどね」

「こう見えても、はねえだろう。へへへっ……」

「うふふふっ……、そうなの？」

「はい。千葉県でベストテンに入っていました」

「ええッ！ それはすごい」

「自己申告だんべえ」

「じゃましいーッ！ 正真正銘のサラブレットじゃ」

「はっははは……、今はどう見ても道産子だけどね」

「ふんだあ。足はみじつけえし、デブだしよあ。走んの見たことねえもんなあ」

「へいへい、今更証明もできねえしな」

「うふふふっ……、僕は信じます」

「えッ！ ありがとうございます。どうだ、さすがに梨田社長は君たち下賤の者とはできが違う。人間性の問題だな」

「さちよう（社長）さん、あんましバカおだてねえでくんど。ただでせえ、お調子者モンですけえ……」

「ぶぶっ……、わかりました」

「あらあゝ」

ズツコケル施川の姿に、四人は声を揃えて笑った。

3

しばらくして小姐が、スツポンスープの入った大きな器を載せたワゴンを押して来た。

そしてスープを取り分け、各自の前に置いた。

それをひと口啜った梨田が、

「うーん。おいしい」

と言って、三人にも飲むようにと勧めた。

スツポンのうま味がスープに凝縮されている。

街のレストランでスツポンスープを注文すると、土鍋の中に一匹そのままの姿で入っている。

中国人は甲羅を外し、頭と手足を？ぎ取って齧り付くのだが、どんなにうまい料理であっても、やはり見た目が肝心だと思う。

中国人の審美眼は日本人と違うのか、鶏でも亀でも姿のまま調理するのが好みらしい。

それとも、肉の状態では、なにを食わされているのかわからない、信用できない、ということからそのようにするのも知れない。続いて豚三枚肉の柔らか煮、貝の形をした饅頭が添えられている。「これをこう開いて、中へ、この、ほら箸でも崩れる。このトロトロに煮込んだ豚肉を挟んで食べる。これが実にうまいんだよね。ほら、みんなも食べてごらん」

と言って、梨田は食べ方を三人に見せた。

「こうですね。……なるほど、おいしいですね」

施川はすでに二個目に取りかかっていた。

醤油味ベースで黒酢を加えた濃厚なタレには、片栗粉でトロミがつけられている。

「ほれ、みつともねえからガツガツすんなよ」

邑中はいつも、他の人たちが食べるのを確認してからゆっくりと箸をつける。

「オマエが遅いんだよ。早く食わねえと、わしが全部喰っちゃまうぞ」

「うふふふっ…、足りなければまた頼めばいいよ」

鷹揚としたものである。

## 五、フカヒレ鰻鱈

1

「僕はウーロン茶にするけど、みんなは好きなお酒を頼んでください」

梨田の話し方は、その育ちの良さからくるのか、実におっとりしている。

「ありがとうございます。せっかくですから、紹興酒も頼んでよろしいですか？ 十八年ものなんか、如何でしょう」

「だめだめ。ここは高いんだから。八年もので十分だよ」

「小姐ッ！」

呼ばれて近づいてくる小姐に、峪口は紹興酒を温めるように指示すると、

「お砂糖は必要ですか？」

と小姐が訊いてきた。

「いや、いらないよ」

と峪口が言つと施川は、

「もらおうよ、砂糖を……」

と食い下がった。

「施川くん。まあ、とにかく飲んみなさい。八年モンは砂糖なんか必要ないんだから……。本当は十八年ものがいいんだけど」

「ダメッ！ 八年もので十分。やっぱり僕も、少しもらおうかなあ」

と梨田が応じたのに対して、

「ダメッ！」

と、峪口が切り返すと、

「あらっ」

と梨田は、ズッコケル仕草をした。

小姐も思わず含み笑い、三人も声を揃えて笑った。

気心の知れた友と飲む酒は実に楽しい。

2

峪口は、日本では温めた紹興酒にザラメなどを入れて飲むが、これは熟成度が少なく、刺激の強さを誤魔化すためだと考えている。

「ほんとだ、うまい。日本で飲むのとは全然違うわ」

施川が喜びの表情を満面に浮かべた。

「だろう。十八年ならもつとうまいよ」

あくまでも十八年ものにこだわる峪口に、

「ほんとうに峪口君はしつこいね。ねえ、施川くん」

と同意を求める。

「ええ、そんなんですよ。しつこくて、しつこくて。参りますよ」  
「ははは……、それにしてもなんですね。一年ものがあつて三年、五年、八年とあるわけですけど、なぜ次は十八年なんでしょうねえ」  
「決まつてンベえよ。売り上げのためだんべえ」  
「ふふふつ……、邑中君は簡単明瞭ですね。十年もの、十二年ものもありませんよ。なんか、数字と関係があるンじゃないの」  
「そうかもしれないね。でも、一応、向学のために小姐に訊いてみよう、つと」

峪口は小姐を手招きした。

「わかつた。いいよ、いいよ。……わからないそうです。マネージヤーを呼びましょうか、だつて」

峪口は必要ない、必要ないと繰り返し手を振つた。

「あまり、困らせないでね。明日から僕が来られなくなつちゃうから。ふふふつ……」

紹興酒は瓶の封を切り、小さな徳利でひとり一人別々に出されるのだが、その徳利は更に大きなお湯の入つた器にすっぽりと収められ、お燗が冷めない仕組みになっている。

「これ、この器、日本酒にもいいね。買って帰ろうかなあ」

「止めた方がいいです。結局は物置の肥やしになるんですから。日本酒にはやはり日本の徳利が一番合つもんです。それが歴史というものです」

「いつもながら、峪口君の言葉には説得力があるねえ。いやあ、たいたしたもんだ。政治家にしたいくらいだ。うふふつ……」

「峪口いー、市議員へでも出るか」

「はははつ……、それは邑中に任せるよ」

「……………」

「あれつ、邑ちゃん、本気？」

施川が邑中の顔を覗き込んだ。

「うん、そんな話もある」

「あつ、そうなのあ……。出るときにはゆつてね。日当五万、三食昼

寝付きで手伝うから」

「いんね。オメエに頼むンなら、まだ猫の方がマシだんべえ」

「がっははは……、それは正しい」

「おおう、自分で言ってるよ」

「僕も手伝いたいけど、選挙区が違うからなあ」

「そんな勿体ねえ。梨田様にそんな、……お気持ちだけで結構ですらあ」

「あらあ、本気かよ。峪口い、ほんとに出るつもりらしいぞ」

「うん。頑張ってるね」

3

やがてメイン料理ともいえる鱈鱈の姿煮が三人の前に置かれた。

「すごいですね。こんなの写真でしか見たことがありません」

施川が驚きの声をあげ、峪口も唯々ウンウンと同調した。

「ほんとうに鱈の姿がそのままのものね。春雨みたいなのがスープの中で泳いでいるのは食べたことがありますけど、俺もこんなの始めてです。遠慮なくいただきます」

クルリと円を描いた、直径が二十センチはあるつかという鱈鱈を、繊維質に沿ってスプーンで大きめに切り取って口に含むと、トロミのついたコンソメ味のスープと口中で渾然一体となり、歯ざわりよりも喉をスルリと通り抜ける食感が楽しい。

まさに至福のとき、中国人ならさしずめ“口福”のときである。

しかし、贅沢な話だがいかにも一人前には多過ぎた。過ぎたるは及ばざるが如し。

「総経理、贅沢言って申しわけありませんが、少し多過ぎましたね」

「うん。そうだね。段々飽きてくるね」

「そんなことありません。おいしいです」

施川はもうほとんど平らげている、相変わらずの健啖ぶりである。

「そう、よかった。ほら、峪口君も食べなさい。なんなら、お土産

で持っていく」

「はははっ…、総経理、そんな恥ずかしいこと、言わないのッ！」

「うふふふっ…」

「持って帰えれんのかあ？」

「えっ、……できないこともないとは思っけど……」

邑中の問いに戸惑う梨田。

「邑ちゃん、梨田社長が困っているでしょう」

「ふんでも、もったいねえべ。明日の朝飯に、これで雑炊作ったら  
うめえどお」

「なるほど、これで雑炊か。邑中さん、なかなかアイデアマンだね」

「確かに、贅沢な雑炊ができますね。ちょっと小姐に訊いてみよう」

「あゝあ、峪口まで、みつともねえなあ」

「ところが施川さん、中国ではそれほどみつともないことでもない  
んですよ」

「ほーれ見る。オメエは全部喰っちゃったから、明日の雑炊はねえ  
どお」

「へへへっ…、わしはいらん。ビールがあればなんにもいらん」

などと言いながら、結局は二人とも全部平らげた。

「少し残ったけど、峪口君、持って帰る？」

と言う梨田の申し出に、

「いや、もう十分にいただきました。おい、施川あ、おまえもらえ  
ば？」

と峪口は施川に振った。

「あ、いや、わたくしも、もう十分いただきましたから……」

施川が、余計なことを言うなとばかりに、峪口に目配せをした。

「総経理、後は、なんでしたっけ？」

「焼きソバと炒飯、それとデザート、かな？」

「なにか野菜も欲しいですね」

「いいよ。なにか頼めば」

「はい。小姐ッ！……なにか、野菜のおいしいのある？ 味付

「けはあつさりとしたのがいいな」

小姐が菜单メニューを持って峪口のところへやって来た。

「これ、この写真の、クウシンサイだっけ？ そう、これもらうわ」  
頷いて立ち去る小姐に、“峪口は急いでねえ”と言葉を投げかけた。  
こうして二時間ほど楽しい時間を費やした四人は、梨田の招きに応じて三十三階のバーに席を移した。

窓側に席を取り、ホテルの庭園と果てしなく広がる美しい夜景を愛でながら、シーバスのロックを舐め舐め、夜更けまで四方山話に耽った。

白玉蘭の料金は二千数百元（約四万円）、シーバスのボトルキープが一本八百元、諸々のツマミをプラスして千三百元（約二万円）ほどであった。

この金額は日本人にとってもかなり高いものであるが、もしも中国人が聞いたなら卒倒すること間違いない。

なにしろ、上海での大卒の初任給は二、三千元なのだから……。

## 第二章 上海市内散策

### 一、徐家匯

1

峪口がカーテンを開けると天気は快晴、時刻も十時を少し回っていたので寒さも緩み、温かい日差しが部屋に射し込んでいた。

地理的にはかなり南に位置する上海だが、東京の気候とほとんど変わらず、時には雪が舞うこともある。

その日、遅い朝食を済ませ市内観光に向かった。

峪口は施川と邑中の訪問に合わせ、一日休暇を取っていた。

「今は暖かそうだけど、夕方は冷え込んでくるからな。防寒をしっかりとしておけよ」

「うん、わかった。東京とほとんど同じって聞いていたから、わたしは襟巻きと手袋を持ってきた」

「それは正解だ」

「俺あ聞いてねえどお。うんだから、コートも手袋もねえ」

「えッ！ 施川、邑中に伝えなかつたのかあ？」

「あれ、わし言わなかつたかあ……」

「オメエ、あれだんべよお。上海はかなり南だから、沖縄みてえに暖けえってゆつてたんべえよお」

「わしがあゝ……、そんなことゆつたかあゝ……」

「まーったく、いい加減なんだからよあゝ。オメエのを貸せ」

「へへへっ……、貸してやりてえとこだが、生憎わしはスマートだからな。邑ちゃんには着られねえよ」

「じゃあねえ、買うべえ。峪口い、どっか店へ連れてってくんどう」

「いいよ、俺のを貸してやるよ」

峪口は洋服ダンスからダウンジャケットとマフラー、それに手袋を

持つて来て、邑中の前に置いた。

「悪いいなあ。なくさねえようにすつからよお」

「気をつけるよ」

「あんだとお。オメエの所為だんべえ」

マンションを出ると、隣の“港匯広場”<sup>デパート</sup>はすでにオープンしており、三人を喧騒の渦に包み込んだ。

「“味千ラーメン”か。平日のこんな時間帯なのに、ずいぶん客が入っているねえ」

「ああ、ここはいつも混んでいるよ。ほら、店先にもたくさんの椅子とテーブルが並べてあるだろう。昼飯時になると満席になって、一時間以上は待たされる」

「熊本って書いてあるけど、日本のチェーン店ってことだよな。じやあ、味は豚骨ベースだな」

「うんめえのかあ？」

「熊本が本店ということだけど、実際には台湾に進出して、そっちから中国に入つて来たみたいだよ」

中国で成功している日系企業を見ると、元々は日本で生まれたが台湾で成功した後、台湾人によって中国に進出というパターンが多い。台湾と中国は一触即発状態にあるといいながら、事業の面では交流が盛んである。

台湾人は、言葉が同じということもあるが、実に商売上手が多い。

2

「まあ、こっちのレベルではうまい方かな」

「俺あ聞いたことねえ」

「わしは仕事で熊本へ出張したときに、喰ったよような気がする」

「へへへっ…、まーったく、調子いいんだかなあ、オメエはよお」

「バカもん、これは本当じゃ」

「ふん、じゃ、これ以外は全部ウソかあ」

「じゃあ〜かまし」

「上海では去年一号店が出て、ここは確か、二号店だったと思うよ。もう、十店舗ぐらいあるのかな。なにが受けたのか、大人気でね。いや、うらやましい」

「へーえ、後で食ってみんべえか」

「いいけど。……せつかくだから、もつとうまいもの食おうよ」

「もつとうめえもんかあ。ふんでも、これも食ってみてえなあ」

「わしも食いてえな。うまいものは昨日、梨田さんに食わせてもらったからなあ」

「いやいや、昨日の料理はお金さえ出せば、日本でもどこでも味わえる味だ。今日はこつちでしか味わえないものを食おう。辛いものはどう？」

「わしは大好きじゃ」

「俺あもでえ好きだあ」

「そうか。それじゃあ、今日は“洞泉楼”へ行こう。部下に連れてってもらったんだけど、いやいや、ビックリ金時だった」

「なんじゃ、そらあ」

「それゆうんならよあ……、ビックリ金玉だんべえ」

「けけけけ……、出しゃがったな、伝家の宝刀を」

「はっはははっ……、確かに負けた。君のはデツカイ、認める。この通りだ」

峪口と施川は邑中に頭をさげた。

「うんだあ……、わかればエエべえ」

男の勝負では、最後はなにのサイズが勝敗を分ける、こともある。「まあまあ、後のお楽しみ。それにね、明日はもつと楽しみが待っているかも知れないよ。……へーい！ タクシー！」

「峪口い、タクシーはいいから、少し歩こうぜ」

“華山路”でタクシーを止めようとした峪口を、施川が遮った。

「うん、そうか。それじゃあ、港匯広場の下が地下街になっていて、いろいろなお店が出ているから、そこを冷やかしながら向こう側に

渡ろう」

「うへえ、歩くのかあ。くたびれんなあ」

邑中が不満の声をあげた。

「そうだ。せつかく上海へ来たんだから、上海の空気を肌で感じないとな」

「あんれえ。オメエでも、偶には気の利いたことゆうんだあ」

「地元じゃ、歩く吟遊詩人とゆわれている」

「歩く赤っ恥じゃねえのかあ」

「じゃーまし」

「歩く顔面性器とも言われているな」

と、峪口が追い打ちをかける。

「だ、だだだ、誰が歩く顔面性器じゃ」

「なんだべえ、顔面性器つてのはよあ？」

「はっははは……、施川は、これからは顔にパンツを穿いて歩かないとな」

「お、お、むつつり助平の峪口にゆわれちゃった」

「エ口河童だんべえ」

3

“徐家匯”は上海市の中心部から南西に位置し、その中心部に向かつて、華山路、虹橋路、肇嘉浜路、漕溪路と五本の道路が集中している。

そんな一角に峪口のマンション“港匯花園”がある。

港匯花園は港匯広場と隣り合っている、経営は香港系財閥で同系列である。

港匯広場は地下で地下鉄一号線の徐家匯駅に繋がっていて、出口も五、六ヶ所あり壮大な地下街を形成していた。

二人は地下街をぐるりと一周してから、峪口のマンションとは華山路を挟んで反対側に位置する“太平洋百貨”の店頭に出た。

「このデパートは香港系でとても人気が高い。中国の主な都市にはほとんど出店しているんじゃないかな。変に気取ってはいないんだけど、地場のデパートとは明らかに一味違う。俺なんかでも買い易いし、雰囲気がいいんだよ」

「どうもデパートっていやだよな。気取り過ぎていてさあ」

「俺もデパートはでえ嫌<sup>き</sup>れえだ。ふんでも、かあちゃんはでえ好きなんだよなあ。なんで女<sup>め</sup>って、デパートがでえ好きなんだべえ。

俺あいつも駐車場へ車停めて、パチンコ屋で待ってんだあ」

「わしは絶対には行かん」

「俺も結婚したばかりは行っただけど、もう何十年も行ってないな。直ぐに頭が痛くなるんだよな。どうしてかなあ？」

「わしもどうしても行かなきゃなんねえときは、独りで行って、サツと買い物して帰って来るんだ。十分もあれば終わる」

「そうだろう、俺も同じさ。ほら、向こう側に“東方百貨”って書いてあるだろう。あれもデパートなんだけど、なにか買いにくいんだよね。もう二年も住んでいるけど、買い物に行ったのはたった一回だけだ」

峪口は太平洋百貨とは対角線上に位置するデパート、東方百貨を指差した。

「ふーん、それでよく潰れないなあ」

「客は峪口だけじゃあんめえよあ」

「おつ、邑ちゃん今日は冴えている。ところで、こっちの地球儀みたいな建物はなに？」

4

「あれか、あれは“美羅城”とゆってナ、携帯電話、眼鏡、アクセサリーショップなど、若者に受けるいろいろなテナントが入っているんだ。そう、レストランもいくつあったな。五階には映画館が三つだったかな？ まあ、ゆうなれば娯楽の殿堂だな。裏側の建物

とも通路で繋がっていて、そこにはコンピューターやゲーム機器、デジカメなどのテナントばかり、上海の秋葉原といったところだ。いつも若者たちで溢れているよ」

「そうゆう場所に、店をだせばいいじゃん」

「わかっているんだけど、大阪方面の人たちがゴチャゴチャとうるさいんだ。“我々は大阪の田舎から始めて成功した。だから、上海でも同じようにしなければいけない”とかなんとかを錦の御旗にして、まったく勝手な連中さ」

「困ったもんだなあ。上海に住んでいる峪口が一番わかっているのにねえ」

「二つ潰されたよ。決まりかけていた物件をね。董事会（株主会）の段階では賛成しておいて、実際に始めようとすると反対だもの。まったく、参るよ」

その後数年して担当者が代わると、今度はまったく逆のことを言いますのだから、峪口も匙を投げざるを得なかった。

“以前の会社とは違います。人も変わりました。その当時のことを私は知りません”というのが、新任者の言い分だが、峪口から見ればいずれも同じ穴の貉だ。

染み付いた体質がそう簡単に変わる筈もない。

中国進出を検討中の企業の方々には、もちろん中国側のパートナー選びが大切なことは言うまでもないが、日本企業同士の軋轢は、それ以上のものがあり、許されるならば単独で進出することをお勧めしたい。

特に、東京と大阪の企業が一緒にやることは避けた方がよい、否、避けるべきだと思う。

このことは、作者自身の経験を通して身に凍みて感じたことである。

二、自分の身は自分で守れ

さて、話を太平洋百貨の前に立った三人に戻そう。

「デパートの中も抜けられるけど、そこを右に行けば“衡山路”に出られる、俺のお気に入りコースさ」

「へーえ」

「おい、二人とも信号に気をつけるッ！」

と、峪口が言っているそばから、

「おおっと、危ねえ。気をつける、馬鹿野郎ッ！」

慌てて立ち止まって、施川が怒鳴った。

「こっちは車優先だから、青でもうっかり出ると跳ね飛ばされるぞ」

「ふ、ふんとだ。歩道に人がいても、停まらねえ」

「野生の熊に見えるンだろう。おまえ、前に出るな」

「ハゲが眩しいンだべえ」

「はあはははっ……」

実際、日本から着いたばかりの観光客が、タイミングの悪さと日本の感覚で安全を判断することから、横断歩道で事故に巻き込まれることが多々あると聴く。

この、日本ならば、さしずめ新宿に相当する繁華街のど真ん中の交差点に、信号ができたのは峪口が赴任する少し前、一九九七、八年のことである。

交差点のそれぞれの角にはデパートが鎮座しており、広い道路を横切ってデパートからデパートへと買い物客が移動、といった光景がよく見かけられたものだ。

地下道でそれぞれのデパートは結ばれているのだが、上海人には多少危険性を伴っても最短距離で移動する手段が好まれる。

車の混雑は東京並みで、事故の絶えることはない。

しかも車が優先の社会であるから、人身事故も多発することになる。嘘か真か、当時は青信号で歩道を渡っている歩行者を撥ねても、車には責任がなかったようだ。

確かに、峪口も、救急車を呼ぶどころか、倒れて苦しむ被害者を罵倒し、悠々と立ち去る車を目撃したことがある。

二〇〇三年ごろに法が改正され、歩行者が優先されるようになるが、それでも横断歩道を渡っている歩行者を早く渡れとばかりに煽る運転手が後を絶たない。

信号ができても相変わらず交差点での事故が多いので、交通警察の他に監視員が何人も配置されている。

もちろん車だけが悪いのではなく、歩行者、特に大人たちの交通ルール遵守の意識は極めて低い。

親に交通ルールを守る意識が希薄なのだから、子供が守るはずもない。

また、権利ばかりを主張する国民性もあり、人身事故も交通渋滞も一向に減らない。

自分の身は自分で守るといふ強い意識が、中国で生き残るための最良の方法である。

「ふんとだあ。青でも平気で横断歩道に車が突っ込んで来んだあ。

ああ、おっかねえ」

「右折はいつでもオツケーだからね」

「えッ！ そうだったの。どおりで……」

「な、なんだ、前にも言ったじゃないか。施川さん、あんた、上海じゃ長生きできないね」

「ふんとだあ。オメエは慌てんぼうだかなあ」

「わしか、わしはいつも東京で鍛えられているから大丈夫じゃ。それより、熊、おまえこそ気をつけるよ。普段狸や狐と一緒に暮らしている野生動物には、上海の雑踏はきつかるう」

「バカこくでねえ。トラクターや耕運機が引つ切りなしだあ。狐は見ねえけど、狸や雉は跳ね飛ばされて死おっちんでるべえ」

「それを拾ってきて狸汁か」

「うん、なかなかうめえもんだあ。って、なにゆわせるだあ」

三人は“天平路”との交差点を無事に渡り、衡山路を東に向かって歩き始めた。

すると直ぐに、今にも壊れそうな古い工場がある。

間もなく解体されて大きな公園になるそうだ。

サミットを控え上海市内に公園を造りまくっている。お陰で最近は少し環境が良くなってきた気がする。

工場はおもちゃ工場でもあったのか、入口にウルトラマンの等身大の人形が置かれている。

「ありや、これウルトラマンだよ。ニセモノかな？」

施川が首を捻った。

「ウルトラマンはこっちでも人気がある。会社の連中も、子供のころによく視たつて言ってたな」

「へーえ、日本の番組も放映されているんだ」

「ああ、随分昔っからやってイタみたいだな。アニメとかスポコン

……、ほら、アタックなんとかつてやつとか……」

「アタック・ナンバーワンか、わしも好きじゃった」

「ドスケベ」

「な、なんでやねん？」

「だってあれだんべえ。女っ子がブルーマで股おっぴろげて、飛んだり跳ねたりするやつだんべえ……」

「そらまあ、学園ものだからな。しかもバレーボールが主題だぜ」

「しかし邑ちゃん、ブルーマにはおでれえたな」

「あんでえ、あれブルーマじゃねえのかあ？」

「確かにそうだけど、俺、久しぶりに聞いたなあ」

「わしも……。でもよ、あれでスケベだなんてゆっているようじゃ、

熊さん家<sup>ち</sup>じゃ、女子の水泳とか体操なんかは見ないの？」

「ありやスポーツだんべよお」

「バレーはスポーツじゃねえのか？」

「スポーツのバレーはいいだ。んでも、テレビ番組はエロが目的だんべえ」

「そりゃまあ、多少の色気はサービスだからな」

「視聴率のためだんべえ。それが不純だ」

「けっ、なにが不純じゃ。不純異性交遊みてえな面あ下げてよお…」

「どんな面だあ。オメエは頭にパンツ穿け」

「くくくく…、あの主役をやつてた娘、こつちじゃすげえ人気だよ。なんて言つたかなあ、あの娘？」

「わしも大好きだった。確か、歌手の湯川なんとかと結婚したんじゃないかった？」

「あつ、そうそう、そんな名前」

「湯川秀樹だんべえ…」

「アホ」

路の両側にはプラタナス、この路は歴史のある通りで太い老木が覇を競っている。

工場の対面には鄙びた映画館、これも相当古そうだ。

そして住宅が並び、“宛平路”と交差する十字路の角に幼稚園がある。

「あれは？」

施川が高い鉄柵に囲まれた建物を指差した。

「ああ、幼稚園。上海でも有名な名門らしいよ。月謝ももちろん高い。確か、一ヶ月、二千元とか三千元とか聞いたなあ。大卒の初任給並さ」

「三千元（約四万五千元）で聞くと、それほど高いとは思わないけど、大卒の初任給と同じ、ってゆわれるともものすごく高く感じるね」

「だいたいねえ…、そう、八十倍にすれば、中国人の金銭感覚に近いと思うよ」

「ほーう、三千かける八十と、三、八、二十四、二、二十四万円。

そりゃあ、高いわ」

「うんだあ」

交差点を過ぎると、歩道に沿って洒落たカフェバーやレストラン、美容院などが建ち並んでいる。

「お洒落な店が多いなあ」

「この辺は外国人がたくさん住んでいるからね。その所為だろうな」

「俺あ、ゲエ人は苦手だあ」

「外人さんも邑ちゃんも苦手だと思っよ」

「あんでえ？」

「家族総出で考えてみなさい」

衡山路の辺りは、昔はドイツ租界、その後は政府高官などの別荘が集まっていた場所で、現在は上海市民の誰もが憧れる高級住宅街である。

更に数百メートル進むと“？興路”と交差し、右手に地下鉄一号線の衡山路駅へ下りる階段口が姿を現す。

そこから少し進むと、二階建ての瀟洒なバーがどっしりと構えている。た。

このバーには何度か入ったことはあるが、夜になると白人系の外国人が押し寄せるので、峪口もなんとなく肩身が狭く、落ち着かなかった経験がある。

そのことを施川に話すと、

「うんうん、わかるよ。わしもそうだから、日本人はどうも白人に弱いな。中国人はどうなんだい？」

と言つて、邑中の反応を見るように顔を覗きこむ。

「日本人ほどではないが、まあ苦手にはしているね。黄色人種の劣等感かな……」

「虐げられてきた長い歴史が、そうさせるのかも知れませんが」

「げげッ！ 誰かと思つたら、邑中ちゃん。アンタ、今のは標準語だよ」

「ふんとかあ？」

「ふんとだあ。いつ、人間の言葉、覚えた。ところで峪口いく、あれはカラオケかい？」

施川が向かいの建物を見上げて訊いた。

その大厦ビルにはディスコとカラオケが入っていて、夜になると若者たちが集い、明け方まで賑わう。

「上海の若者も日本と変わらないんだ。峪口い、夜になったら来てみようか？」

「場違い、場違い。おじさん連中の来るところでは、ごじやりません」

「そうかあ…。わしは、若いおねえちゃんにけっこうもてるんだけどなあ」

「銭つ子払えば誰だつてもてるべえよ」

「自慢じゃねえが、銭はねえ」

「俺あがよく行くスナック“カマトト”のねえちゃん、紹介してやるべえか？」

「スナック“動物園”の間違いじゃねえのか。熊や狸にいくらもててもなあ」

「あれれ、人畜無害を売りにしてるんじゃない。ほんとは、羊の皮を被った狼のくせによお」

「ふんとだあ。このエロハゲは放し飼いにできねえ」

「エロハゲ、そりゃひでえな。こんな善良で純情な男を捕まえてよお。へえへへへっ…」

三、ラピズ・ラズリ（群青色）

1

間もなく三人は、衡山路のメインストリートともいえる辺りにやっ

て来た。

「この柵の中は国際礼拝堂。教会さ。土日はすごい人出になるんだ」  
「へーえ、中国でもキリスト教は大丈夫なんだ」

「うん。宗教に関しては大らかだな、“法輪講”以外はね。宗教を弾圧すると、国が治まらなくなる。それは歴史が証明しているだろ」  
「う」

「天草四郎の乱とか、か」

「うんだなあ……、碌なことねえ」

「ところで、法輪講ってなんなのよ？ 以前ニュースでやっていたけど、わしにはよくわからなかった」

「あまり詳しく報道されないものな。どうも中国政府に批判的な宗教で、本部は台湾にあるらしい」

「台湾か、それならなんとなくわかる気がするな」

この教会のところで、衡山路は“ウルムチ路”と交差している。

ウルムチ路を渡ると右側に高層の超高級マンション、家賃は最上階のスペシャルルームが月に一万ドル以上と聞いているが、庶民には高嶺の花、敷居が高く確認する術もない。

「確かに高そうだな造りだ。出入する車を見ていると、高級外車ばかりなものなあ」

施川が建物を見上げながら呟くように言った。

「俺もこんなところに住んでみたいよ。できれば税金とか会社の経費でね」

峪口が溜息をつく。

「自腹で住めるのは、よっぽど悪いことをして儲けている奴等だろうな」

施川が吐き捨てるように言った。

「儲けている連中に限って税金を払わないモンさ」

「グサツ……」

邑中が俯いた。

「くくくっ……、アンタのことじゃないよ」

左に目を転じると、これまた超高級ホテルリーガル・インターナショナルが姿を現す。

「まあ、ここも俺たちにはあまり、ではなくまったく縁のないホテルかな」

「俺あ家のガキツチヨ（息子）は、今度“帝国ホテル”で結婚式だあ」

「長男坊のか？」

「うんだ。嫁つ娘の家が派手だからよお。俺あ地味だから、そのの嫌なんだけどおよお」

「へっ、さいですか。そら、まあ、とにかく、おめ、で、とあー」

「そうゆうわけだよお、オメエらは呼ばねえかな」

「そうゆうわけってナ、どうゆうわけじゃ？ それにしても、呼ばれないのは嬉しい。なあ、峪口い」

「うんだ。もう結婚式なんて行きたくねえモンなあ。それに、手ぶらってわけにもいかねえしな」

「まっただだあ。まあ、一応訊いてやるけど、費用は一人いくらぐらいかかるんだ？」

「たいしたことねえよお。五万ぐれえのモンだあ」

「ほ、ほんとか？」

「じゃあ、一万てわけにはいかねえな」

「んだべえ、だから呼ばねえんだよお」

「あっ、こいつ、わしらを呼ぶと赤字になるってか」

「ふんなことねえ。仕事忙しそうだから、悪りいから呼ばねえんだよお」

「おっ、舐められたものだねえ、峪口さん」

「ふんじゃ呼ぶかあ？」

「あいや、わしはその日、ちいと都合が悪い」

「まだ、いつってゆってねえべえよ」

「いつでもいい、わしはその日都合が悪い」

「俺はその日、具合が悪くなる予定だ。まあ、みんなで楽しくやつ

て頂戴」

三人は勝手なことを言い合いながら、のんびりと歩を進めた。

2

「なにになに、ニチレイ。日本の？」

「そうだよ、施川くん。古い別荘を一戸買いつてリホームしたみたいだ。買ったのは六、七年前らしいから、いい買い物だったと思う。今じゃ、高くても買えないもの」

九十年代の前半なら、信じられない値段で高級別荘が手に入った。上海の不動産価格は二十一世紀に入ると鰻のぼりで、租界時代の別荘などの希少物件や高級マンションは、十年ほどの間に十倍以上になった。

異常な投機熱は、普通のマンションも及び、庶民には高嶺の花になつてしまった。

「先見の明があつたんだね、……それにお金もね」

施川がおどけて言つて、

「はっははは……。そのとおりだ。なにごとも、お金がなければ始まりません」

峪口が自嘲気味に言つと、

「んだあ、銭つ子が一番でえじ（大事）だあ。なんだかんだゆつても、銭つ子がねえければ、どうしようもあんめえ。最後は銭だあーッ！」

と、邑中は本気で言い放つた。

「邑ちゃん、アンタが言つと迫力があるねえ。“最後は銭だあーッ”

！”か、わしに少し貸してくれ」

「働けッ！」

「あらら、働けときたか。この隣の洋風の赤い建物、お洒落だねえ。これもバー……、ベロベロ、バアー、なんちつて」

「ははははっ……、うん、そうだよ。一階がバーで二階はレストラン

だ。いつだったか、梨田総経理に連れて来られて、ばかデツカイ肉を食わされた。レストランはともかく、バーはなかなかの人気でね。客は白人が多いけど、俺たち黄色人種にも対応がいい。経営者は気さくなイギリス人だ」

「黄色人種か、久しぶりに聞く言葉だな」

「シャツ、・・サツ、サツシャー、シャツ、ズ？」

「邑ちゃん、アンタには無理よ」

「はっははは……、”SaSha’s”。ここを右折するとお洒落なお店が続くよ」

衡山路を右に折れ、交差する東平路を十メートルほど進むと、サツシャーズと軒を並べて、これもお洒落なレストラン“Lapis・Lazuli（瑠璃色）”がある。

「ラピ、ラブ、ラプズ、ラララ……」

「邑ちゃん、君には無理だよ。舌を噛むぞ。ラピズ・ラズリ、はい、ゆったんさい」

昨年日本の雑誌で紹介されて話題になったのは、同じ経営の“青龍工房”。

二階がレストランで、同じ建物の一階で焼き物や調度品を販売している。

ラピズ・ラズリは青金石から採る顔料のことで、紫色を帯びた紺色（瑠璃色）、群青のような鮮麗な藍青色をいう。

「去年、娘に焼き物を買ってきてくれて頼まれて、探し回ったよ。ちよつとわかりにくい立地だろう」

「娘か、親父としては娘に頼まれると弱いものなあ。俺もそうだけど……」

「俺あもだ」

「だろう。あの時は必死に探し回った」

その隣もまた、お洒落な生活用品のお店で、値段も手ごろ、この辺りは旅行者にとって、知る人ぞ知る穴場となっている。

「峪口い、上海音楽学院付属小中学校、と、あ、俺あにも読めた。小学校と中学が一緒って意味かあ？」

「うんだ。もう少し行くと、系列の音楽大学もある」

「俺あ、別に興味はねえ」

「熊、なら、黙っとれ。へーえ、ワイシャツの仕立屋さんだ、一枚作るか。なになに、次はタイ料理店かい、うまいのかいな。わしはタイへ行ったことあるけど、トムヤンクンだっけ、スープ。どうもあの酸っぱさが苦手なんだよな」

施川はブツブツと独りごちながら、次々と現れる店舗に興味を示し一言加えていく。

「俺あもダメだ。なんで、酸っぱいんだんべえ？」

と言つ毘中に、

「勝手だろ」

と冷たく応じて、施川はドンドン歩いて行く。

東平路には歴史を感じさせる古い建造物が軒を連ねているが、道路に面した立地の良い建物はほとんど改装されて、店舗やレストランに変わっている。

中華料理の“湘菜館”、アイリッシュパブ“The・B・c a r n e g S t o n e”などもそういった建物を改装して使っている。

続いて地元で評判の中華料理店、“席家花園酒店”である。

峪口も一年ほど前に食事をしたことがあり、サービスも良く、確かにうまかった記憶がある。

少し進むと分岐点、東平路を右折すると“岳陽路”、左折すると“桃江路”で、それぞれの路が“汾陽路”と交わっている。

三本の道路に囲まれた小空間がロータリー状になっていて、そこには公園が設けられていた。

公園では老人たちが肩を寄せ合って語り合っている。

峪口たちが桃江路へ入ると、右手にフジ・ゼロックスの建物が路に

面してデンと軒を構えている。

「おお、さすがはフジさん。一戸建てだ」  
そこから真つ直ぐ百メートルほど進むと、再び衡山路に出るはずだが、三人は左に折れた。

「あれーえ、さっきのところに戻っちゃった」  
東平路である。

眼前にはサツシャーズの赤い建物がある。

「峪口い。……戻って来ちゃったじゃないの。しっかりしてちょうだいよ」

「ふんどだあ。オメエだけが頼りだかな。施川じゃ屁のつつかえ棒にもなんめえ」

「熊、ぜくったい、オマエさんが迷子になっても探してやんねえかな」

「あ、ダメ、ふんなことゆっちゃいやよ」

上海の道路は網の目のように入り組んでいて、幹線道路以外真つ直ぐな路がほとんどないので、ほんとうにわかりにくい。

ちよつと脇道に逸れて探索をなどと考え、気がつくともんでもない場所に出て、一時間以上も遠回りさせられる羽目になる。

そんなときは、迷わずタクシーを拾うことだ。

三人は慌てて、別に慌てる必要はないのだが、先ほどの公園のところまで戻った。

「そうそう。こっちへ行けばよかったんだ。汾陽路を東に進めばいいんだ」

「今度は大丈夫だろうねえ」

「ふんだ」

「思い出した。今度は間違いない」

#### 四、不公平な不労所得

“太原路”との交差点では、上海芸術研究所の看板を掲げた古い建物が目にとまる。

左側に目を転じると、“復旦大学付属（急診）眼耳鼻咽喉科医院”がある。

年中無休、二十四時間営業だ。

そして真新しい“軽科<sup>ビル</sup>大厦”、最近できたらしいが、一階には定番の“スターバックス・コーヒー”が店を構えている。まるでゴキブリだ、どこにでも姿を現す。

上海の家賃を高騰させている犯人のひとつで、同業者にとっては、まことに厄介な存在となっている。

隣は駐在者に有名なドイツバー“PAULANER・MÜNCHEN”、各種ドイツビールとショードダンスが売りである。

「おっ、このパン屋さん。中々のレベルだと思うよ」

さすがに施川はパンの専門家だけあって、目の付けどころが違う。入ってみたいという施川の要望に、峪口も同意した。

「喰いてえただけだんべえ」

「邑中は外で待つてなさい。衛生上良くないからね、野生動物は…」。ふーん、上海のパンのレベルもずいぶん上がったな」

「そうだよ。外資系がどんどん入ってきてるからね。今、一番人気は“ブレッド・トーク”だな。店で焼くのを売り物にしているそれが受けてるみたいだよ」

「ああ、それ知ってる。峪口の会社の地下スーパーにあっただじやない。まあまあだけど、あれは全部焼いているわけじゃないよ」

「そうなの？」

「ムリよ、ムリ。あの設備じゃ無理だよ」

「人間なんか取柄があんな」

「熊、一度死んでみるか」

「そうか。さすがはプロだ」

「でも、この店は確かに焼いているよ。厨房を見せてもらいたいけど、無理だろうなあ」

「訊いてみるよ。……うん、やっぱりダメだつて」

「まあ、当然だろうな。野生の熊が一緒じゃな」

「熊？ どこどこ？」

施川は二、三種類のパンを買い求め、外に出ると早速かぶりついた。やはりプロ魂が騒ぐのだろう。

「うんめえかあ？」

「ほれ、餌」

施川は一口齧って邑中に渡した。

「あつ、きつたねえ。手でおっかけよお」

「嫌なら喰うな」

2

復興路を横切ると間もなく右側に、高い鉄柵に囲まれた広大な敷地がある。

そこはレストラン“仙炙軒”と白亜の結婚式場で占めている。

「すごいねえ、ここ。まるでヨーロッパのお屋敷だ」

「ふんとだあ。でもオメエ、ヨーロッパへ行ったことあんのかあ？」

「わしは二度行ったことがある」

「あんれえ、嘘だんべえ。ふんとかあ、峪口い？」

「うん……、そういえばお土産貰ったなあ、一度」

「おう、イタリアで買った鞆じゃ」

「俺あは貰ってねえ」

「あれえ、そうだったけえ」

「峪口い、オメエは行ったことあつか？」

「俺は残念ながら、まだない」

「うふつ、うふふふつ……俺あ一回行った。ぐっふふふ……」

「勝ち誇ってやがる。この辺りは昔のドイツ租界だ。まだまだその当時の建物が残っているんだよ」

「なるほど、それを改築して使っているわけか」

「数年前までは中国人が住んでいたんだ……。ほら、例えばあの建物」

「うん。あの建物が？」

「どれだよ、どれえ？」

「ほら、あれだよ、あの二階建ての建物……。そうだ。あれで十家族は住んでいるんじゃないかな」

「嘘だんべえ。あんじゃ、何百人も入れねえべえ」

「そうだよ、トイレや台所だって、精々二つか三つだろう」と、施川も同調する。

「ああ、もちろん、共同だよ。以前、うちの従業員の家を見たことがある。大概は一部屋に一家族だ。まあ、何百人は居ないと思うけど。だからみんな、借り手があればここみたい貸したいと思っているわけよ」

「貸したら住むとこなくなっちゃうべえ」

「場所が良ければ高く貸せるだろう。家賃を貰って、自分たちは郊外の安い家賃のところへ引っ越すのさ。それで差額を稼ぐんだ」

峪口は何度か従業員の家に招かれたことがあり、その狭さに驚かされた。

欧米諸国からウサギ小屋と揶揄された日本の住宅も、ここでなら超豪邸と胸を張れる。

部屋の広さは十五平米ほどで両親との三人住い、台所とトイレは隣家との共同使用であった。

更に驚いたのは隣家の家族構成だった。

従業員の家と同じ間取りながら、家族と親類を合わせた八人住いだつたのだ。

“お陰で朝のトイレ待ちが大変”、と従業員の母親は笑った。

住環境に不満はあるものの、屈託もなく、また隣り同士で喧嘩する

こともなく、素直に受け入れているのが印象的であった。

3

「でも、これって国のものだろう」

「あんだあ、国から借りてんのかあ？」

「うんだ。まあ、土地は当然だ、中国では私有が認められていないからね。建物も基本的には国のものだ。僅かな家賃は払っているはずだけど……、月に五十元（七百五十円）とか」

「ご、五十元、たった。ええと……、十家族として、五百元か。まさか、この建物を五百元で貸してるわけじゃないよな。それならわしでも借りられる」

「当然さ。今なら、そうさなあ……、この建物を借りるなら、月に五十万元以上は取られるだろう」

「ということは、五、五、二十五……、七百五十万円！」

施川が驚きの声をあげると、邑中も嬌声をあげた。

「な、ななな、七百、五十万円。誰が貰うんだあ？」

「当然、居住権のある人たちさ」

「あんだあ！？ 国じゃねえのかあ？」

「そうだよ。貸したくなるだろう。一ヶ月五十元で、五万元入ってくるんだからね」

「嘘だんべえ。そんなうめえ話がとおるわけねえべ」

邑中の顔がマジになっている。大通りを一步脇道に入ると、道路に沿って小さな店舗がたくさん軒を連ねている。

しかし、それは本来のテナント用物件ではなく、住宅の横壁をぶち抜いたものがほとんどである。

国から借りている住居を又貸しすることで、大きな収入を得ているのだ。

淮海中路の近辺は、路地裏でも賃貸料が平米当り年間一万元（約十

五万円)を超えているので、二十平米足らずの家を貸せば、年間二十万円(約三百万円)を超える収入が入ることになる。運良く住居が道路に面しているだけで、およそ四百倍の収入をもたらしてくれるのだ。住人は当然の如くこれを又貸しして、自らは家賃の安い郊外に引っ越す。

こんなことが、今でも野放し状態で行なわれている。

### 第三章 淮海中路（ワイ・ハイ・ジョン・ルー）

#### 一、公園は憩いの場所

1

そのまま“汾陽路”を真っ直ぐに進むと、左側には楽器店が軒を連ねていた。

「へーえ、楽器屋さんが多いんだね、この辺りは」

「ああ、ちよい先に行くと、ほら、さっきの音楽院系列の大学があるのさ」

「なんだ、そこで楽器屋が多いのかあ」

「それにしても工事の音がうるさいな。これじゃあ、勉強ができないだろう」

「隣が工事中だからね」

音楽院の隣は再開発現場で、動き回るクレーンとともに掘削機のコンクリートを砕く音がけたたましく鳴り響いていた。

道路の右側には“東華師範大学”がある。

「こっちにも大学か、さぞや学業に影響するだろうな」

「さて、お二人さん、その道路が淮海中路だ。上海の銀座通りだ」

「へーえ、この道路が。あれ、あそこは公園だな」

「そう、公園、“襄陽公園”だ」

「寒いのに、いっぺえ人がいんな。爺さんと婆さんばっかだけんど」  
「朝方はもつとすこいよ」

公園は一年を通して、早朝から人で埋め尽くされる。

老人ばかりでなく、会社をリタイヤしたばかりの中年層もたくさんいる。

中国の国营企業は定年年齢も早く、女性は大概の場合五十歳で退く。また男性も企業の民営化により、四、五十歳代の人たちが僅かな退

職金で職を失っている。

次の職場が見つかる人はほんの一握りで、大半は無職となる。まだ日本ほどではないにしても、中国も急速に長寿化が進んでおり、その後の長い人生を如何に過ごすかが大きな課題となっている。

住宅事情もあるが、結婚をすると子供たちは家を離れ独立するので、おのずと老夫婦の二人暮らしということになる。

その結果、当然の如く暇を持て余すことになり、朝の早い老人たちは仲間を求めて公園を目指す。

庶民の住居は狭い上に、ほとんどが長屋方式で台所とトイレは共用なので、快適な住環境とは言い難い。

それで雨の日はともかく、天気の良い日は公園に集うことになる。公園でなにをするかというと、ただボーッとベンチに座っている者は僅かで、それぞれが思い思いに運動や麻雀やトランプ、将棋などのゲームをして過ごす。

襄陽公園でまず目に入るのが太極拳に興じる大集団、毎朝百名以上がリーダーの指揮のもと、音楽に合わせて一糸乱れず踊っている。

この集団が公園広場の中央を占め、その周りに大きな扇を手に舞う集団や剣を持って踊る集団、他にも様々な集団がいる。

土日ともなると、ここに家族や友人とバトミントンや麻雀、トランプや将棋などに興ずる人々が加わる。

中には曲芸紛いの技を披露する者、石畳に水を使って筆で漢詩を書く者などが現れ、昼間の公園は立錐の余地もなくなる。

「公園の隣に日本の有名なドーナツ屋さんがあるよ」

「なになに、ドーナツ。俺あでえ好きだあ。食うべえ食うべえ」

「へーえ。出てるんだ。人気はあるのかい？」

「朝晩と土日はけっこう入ってるみたいだけど。どうなのかなあ……」  
「峪口は責任者をよく知っており、“商売の難しさよりも、合作相手の日本企業が問題ばかり起こしており、むしろ邪魔な存在となっている”と、嘆いていたのを思い出した。」

「コーヒーでも飲む？」

「うん、行くべえ、行くべえ」  
「いらねえよ。わし甘いものは好きじゃねえし……。それに、もう直ぐ昼飯だろ。なんか、美味しいものを食おうよ」  
「昼飯は昼飯だんべえ。少しドーナツを食うべよあ」  
「あんなモンは男の食いものじゃねえ。邑ちゃんデブになるぞ。今でも十分デブだけどあ」  
「そうするか、昼飯になにか美味しいものを食おう」  
と峪口が施川に同意したので、邑中はブツブツ言いながらも不承不承同意した。

2

三人は淮海中路を東に向かって歩き出した。  
すると、交差する“襄陽北路”の交差点で、怪しげな男女数名が近づいて来た。

「しゃちよう、しゃちよう。とけいほしいか、バックいらんないか、ローレックスあるよ。ヴィトンもあるよ。やすいよ、やすい。だいたいしようぶ、だいたいしようぶ」

「不要、不要」

「しゃちよう、しゃちよう……」

「うっせえーッ！ 俺は社長じゃねえッ！」

と強く拒絶しながら、峪口が施川と邑中に注意を促がした。

「えへへへっ…、俺あは社長じゃねえどあ」

「こらこら邑ちゃん。社長と呼ばれて脂下がってるんじゃないよ。ここじゃ誰でも社長なんじゃ。喻え相手が熊でも、金持っていれば社長じゃ」

「ハゲでもかあ？」

「あんだと、わしに喧嘩を売ってるのかあ」

「ううん。オラア、バカは相手にしねえ」

「はっはははっ…、そこが“襄陽市場”だ。全部偽物ばかりの店だ

よ。その門から向こうの通りまでの一角がすべてそうさ。四、五百店舗あるんじゃないかな。お陰でこんな具合に、この辺りは客引きが多くて困っているんだ」

「そんなのが、こんな街の中心にあっているのかよ。それにしてもほんとにしつこい連中だ。シツシツ！」

施川が手で追い払った。

それでも、“しゃちょうさん、しゃちょうさん”と食い下がってくる。

「俺あ、社長じゃねえつてばあ」

「馬鹿、構うな」

「旅行雑誌にも紹介されているし、半ば政府公認だ。区に税金が落ちるからな」

「この連中が税金なんて払うかね？」

税金は店舗単位で決められていて、売上には関係なく徴収される仕組みになっている。

「権利を持っているのはこの連中じゃないよ。利に敏感な連中がしっかり握っているんだ。あんがい役人連中も絡んでいるんじゃないのかなあ」

偽物市場は、二〇〇一年に“華山路”からこの場所に移転してきたのだが、最初の権利金は月額三万元（四十五万円）だったと聞いている。

それが又貸し、又貸しの又貸しによって、十平米ほどの面積が今では十万元を超えているとのことだ。

「どうせ領収書なんてないだろう。どうやって売り上げを確認するんだよ」

「ないない。レジなんかあっても意味ないしね。打たなきゃいいんだから。デパートにはレジ専任の人がいるんだけど、売場の連中と組んで適当に売上金を誤魔化しているもの」

「どうしようもないな。見張りにまた見張りをつけて、そのまた見張り。制限なしだな」

呆れたとばかりに施川が言った。

「ははははっ…、そうゆうこと。この国では誤魔化さない人を探す方が難しい。デパートもその分を見込んで価格に転化しているってことだよ」

そんな話をしてしていると、絶えず客引きが群がり、しゃべらなくとも日本人とわかるらしく、日本語で話しかけてくる。

## 二、堂々たる偽物市場

1

上海のど真ん中に襄陽市場があり、襄陽公園とは淮海中路を挟んで真向かいに立地しており、五、六千平米の敷地に四百軒以上の店舗が軒を連ねている。

ここの商品は全て偽物で、世界中のブランド品のしかも最新デザインのもものが売られている。

観光名所になっていて、毎日数万人の買い物客でこった返していた。欧米人や日本人などの観光客もたくさん訪れ、どう使うのか山のように商品を買って込んでいく。

上海に旅をしてこの近辺にさしかかると、

「ともだち、ともだち、とけいはどう？ ローレックスあるよ。かばんもあるよ。みるだけ、だいじょうぶ」

と日本語で声を掛けられて、パッチワークされたパンフレットを突きつけられる。

でも、いかがわしい、信用できないと思わないでいただきたい。

なぜなら、彼らは必ずこう付け加える、“にせもの、にせもの、ぜんぶにせもの”と……。

彼らは堂々と偽物を偽物として売っているのだ。

驚くのは客引きたちのプロ根性、日本人には日本語、韓国人には韓

国語、白人には英語となるが、これらの言葉を見事に使い分ける。この偽物の品質について、こんな話が実しやかに囁かれている。上海にある米国系有名ホテルのブティックで売られていたブランド品の三割が偽物であった。

この話には落ちがあり、ヨーロッパの本店から調査員が来た際に、“これでは仕方がない。本当に良くできています”と、言ったと言わなかったとか……。

もしも欲しい商品があったなら、次の点に注意するとよい。

外国人と中国人では価格の提示が最初から違うので、半額になったという喜んではいけません。

外国人は最初から二、三倍は吹っかけられているからである。

しかし、価格は本物と比べれば数十分の一といったところ、騙されたと目くじら立てずに、決して日本で味わうことのできない駆け引きの妙を楽しみたい。

商品は雑把にいうと、品質によってABCの三ランクに分けられている。

店頭に並べられているのは、運悪く没収されてもあまり痛手を蒙らないBかCランクの商品ばかりだ。

品質の良い？ Aランクの商品は、普通は店舗に置いてなくて、もっと質の良いものをと客が要求すると、店主はサッと携帯電話を取り出す。

五分も待つと大きな荷物を抱えた男、或は女が現れて店の奥に入るように促され、あなたの前に煌びやかなブランド品がご開帳される仕組みである。

そこまでさせたら買わないと悪いかな、と思う必要はまったくない。また彼らも、あなたが買わないからといって腹を立てることもない。

2

これらの商品の品質が本当に良いのかどうかは、自身の目と勘が頼

りとなることは言うまでもない。

また、帰国の折に税関で没収されたとしても、これは自己責任の範疇と諦めていただくほかはない。

仮に無事税関を通り抜けたとしても、家に帰ると大きな難関が待ち構えている。

それは、女性たちの嫉妬に絡んだ疑惑の目である。

「まあ、お高かったんでしよう？」

「ええ、まあ、おほほほ……」

「でもおかしいですわねえ。そのタイプは、まだ日本には入っていないはずですけどお…。どちらでお買い求めになられたのかしら？ 私も欲しいわあ」

さあて、困った。

上海でとは言えず、フランスへ旅行に行った友達に、或は個人貿易でなどと、なんとかその場を取り繕っても、翌日には“奥様奥様。

ほら、さんのヴィトンのバック、どうやら偽物みたいですよ”といった噂話が、ご近所中に広がっているはずである。

こういった追及に、あなたが一体どこまで耐えられるか、度胸のある方はお試しあれ。

恐らく、普通の神経の持ち主であるあなたによって、そのバックは数日でダンスの奥く深く仕舞い込まれ、二度と日の目を見ることはないであろう。

なお、この偽物市場は二〇〇六年六月末をもって閉鎖されたことになっっているが、実は国際的な批判をかわすために数ヶ所に分けて移転されただけである。

今でも淮海中路を襄陽公園に向かって歩くと、以前にも増して、客引きに行くわすこと請け合いである。

偽物の販売で甘い汁を吸っていた残党が、近くに部屋を借り商売を続けているからです。

そのしつこさは以前の比ではなく、いきなり腕や肩を掴んでくる輩もいる。

それだけ必死ということなのであるが、このときは遠慮なくその腕を振り解き、怒りを露わにしなければならぬ。そうしないと、どこまでも付き纏われることになる。中国では何事においてもあやふやにせず、意思表示をはっきりすることが肝要である。

### 三、怖い体験

1

「ほらほら、不要、不要。……触るなッ！ なにが友だちだ、ふざけんじゃねえッ！」

峪口の剣幕に恐れをなしたのか、客引きは二人のもとを離れて行った。

「あんまり怒んなよあ、峪口い。喧嘩なんべえよあ」

「ほんとに珍しいなあ、峪口がそんなに怒るなんて。わしならともかく」

「いやいや、あやふやに対応していると、いつまでもくつついてくるしね。それに、身体に触られたら本気で怒らないと、下手すると財布を抜かれるからな」

「なにッ！ ほんとうかよ。そりゃあ、ヤバイ」

と同時に発して、施川と邑中はバツクを抑えた。

「肩に掛けないで、首から前に提げた方がいいぞ」

峪口は赴任当初、肩から後ろに下げた鞆を何度か狙われたことがある。

一度目の時は、鞆に違和感を感じ振り向くと誰もいない、少し離れて女の子がついてくるだけ……。

不審に思いながらも、そのまま歩いていると、前から来た女性がアッと言うような驚きの表情をした。

峪口がとつさに振り向くと、後をついて来ていた女の子が、まさに鞆から物をつかみ出したところだ。

「なにするんだッ！」

反射的に峪口は怒声をあげていた。

するとその少女は、つかみ出した物をサツと植え込みに投げ捨て、アツという間に道路を横切って反対側に逃げ去った。

植え込みに目をやると、見覚えのあるキーホルダーが目に入った。紛れもなく、それは峪口のものであった。

拾い上げ、注意を促してくれた女性に礼を言っ て振り返ると、すでにその少女の姿は消えていた。

「へーえ、そんなことがあったんだ。そんな小さな子がねえ」

「でもね、会社で従業員に言われたけど、追いかけてちゃダメだって」「諦めろってこと……。なんでやねん？」

「近くに必ず仲間がいて、よくて袋叩き、場合によっちゃ刺されるってさ。それは公安（警察）が言ってることらしいよ」

「恐っかねえ国だな」

邑中が首を竦める。

「二度目はもつと恐かった……」

「なぬっ……」

2

「ふんにゃッ！ まだあんのかぁ。ど、どんなんだ？」

「鞆を切られた」

「あんだとお…、トバ（ナイフ）でかぁ？」

「うんだ。こつちも油断してね。鞆をこつ後ろに回して、肩から下げていたんだ」

峪口は二人に、バックの紐を持ち、背中に背負う格好をして見せた。

「恐っかねえ……」

邑中が恐怖に顔を引き攣らせ、辺りをキョロキョロと窺った。

「それで？」

施川が先を促す。

「あれは“新疆ウイグル系”だな。顔つきが漢民族とは明らかに違ったからね。トルコ系っていうのかな、彫りの深い、目鼻立ちのはつきりとした。……こっちは若い男だった」

「確かにトルコ系は、目鼻立ちのはつきりした可愛い顔をしているよな」

「エ、エゾキチックだんべえ」

「偉い偉い、よく言えた。はい、角砂糖。でも、エキゾチックだろ  
う」

「うんだ。俺あでえ好きだ」

「なにが、男がか？」

「馬鹿か、オメエは。女に決まってンべえよ」

「君の場合は“雌”だろう。それでどうした？」

「うん、背中に殺気を感じたわけよ。で、俺がパツと振り返ると、ここ、この辺りに、そいつの無表情な面があつて。いやあー、びっくりしたよ」

そのとき峪口は、咄嗟に鞆を胸元に抱え込み、その男を睨みつけた。するとその男は、なにやら言葉を発してクルリと踵を返すと、悠然と立ち去った。

“その連中こそ本当に恐い連中です。夜でなくてよかったですねえ”と、後で従業員から聞かされ、背筋を冷たい汗が伝った。

彼らは子供でもナイフを持っていて、中には口の中に小さな刃物を潜ませている、まるで奇術師のような輩もいるとか……。

施川の顔から笑いが、邑中の口から言葉が消えた。

「避ける方法はただひとつ。油断や隙を見せないこと、これしかないそうだ」

邑中がしっかりとバックを抱え込んだ。

#### 四、大都市の戸籍と地方の戸籍

1

「ふーう。やっと客引きがいなくなった」

三人は“陝西南路”を渡つて、ようやく一息ついた。

陝西南路で区が分けられていて、偽物市場があるのは“徐匯区”、陝西南路を跨ぐと“慮湾区”になる。

慮湾区は、上海市政府のお膝元ということもあってか、物売りや客引きなどに対する取り締りがとても厳しいのだ。

それで慮湾区に入ると急に静かになる。

偽物市場の外にも、道端で敷物の上や自転車、リヤカーの荷台などに品物を広げた物売りがたくさんいる。

大概是、偽ブランド品や偽のDVDなどであるが、近年のペットブームを反映してか、中には子犬や子猫を売っている者もいる。

DVDは、米国製映画なら米国での封切りとほぼ同時に店頭に並ぶ。当然品質は劣るが、十元（百五十円）前後と安いのと、とにかく早

く見られるのが魅力で、店頭はいつも賑わっている。

この国では、レンタルショップはまず成り立たない。

この物売り連中が、公安や鼠（鼠色の制服）と呼ばれる風紀を取り締まる見回りが来ると、蜘蛛の子を散らすように、アツという間に消えてしまう。

しかし彼らは強かだ。

区の境を越えれば取り締まりの権限が及ばないことを知っているの  
で、道を隔てた別の区に移動して商品を広げる。

陝西南路と“長樂路”も徐匯区と慮湾区を分ける境で、毎日そんな  
イタチゴッコが繰り返されている。

では、両方の区で一斉に取り締まりをすれば、とお考えになる方も  
いらっしやるでしょう。

しかしそこは中国人、窮鼠猫を噛むに至らぬように、徹底的に追い

詰めることをしない。

なぜならば、彼らのほとんどが農村からの出稼ぎで、上海の戸籍は持っておらず、定職につくことができない連中だからである。もし取り締まりを徹底して、完全に収入源を奪ってしまつと、彼らが悪の道に走ることを上海市政府はよく知っている。

2

中国人にとって、戸籍がどこにあるのかは極めて大切なことである。上海の戸籍がないと、能力があつても上海でまともな職業につくことはできない。

それはどこの都市も同じで、その都市の戸籍を持たないと、中々良い仕事にありつくことができない仕組みになっている。

しかも、地方の人間が大都市の戸籍を取ることはかなり難しいことである。

但し、例外的に戸籍を取得する三つの方法が認められている。

一つ目は、重点大学といわれる一流大学を優秀な成績で卒業することである。

二つ目は、企業に与えられた枠（資本金の額により異なる）を使って戸籍を取得してもらう方法である。

国営企業では、この枠が悪用されることが間々にあるらしい。

三つ目は、紅衛兵の嵐が吹き荒れた当時の改革開放政策によって、地方に追いやられた人たちの子供だけに与えられた特権である。

その人たちの出身地の戸籍が子供に与えられるというものだが、この方法は、逆に社会に大きな歪みをもたらしている。

なぜならば、子供だけに与えられる権利であるから、親はその地に留まることになり、祖父母や親戚を頼って幼い子供を都市に送り出すことになる。

まあ、そのくらい都市生活に魅力を感じているということだが……。その結果、幼いときに親元を離れ、両親の愛情を知らない子供たち

が大都市にたくさん誕生してしまった。  
こんな境遇の子供たちが、大都市にはたくさんいる。

## 五、刺激的なポスター

1

「さあ、ここからが慮湾区、物売りはいなくなるよ」

「ふんどだあ、なんでえ？」

「こちら側は上海市政府のある区ということで、取り締まりがとても厳しいんだよ」

「へーえ、そうなんだ。面白いね、道路一本でね」

「結構区側に権限が与えられているからな。まあ、出来合いだろうけど」

「ふーん……」

「これ、この建物が巴黎春天<sup>デパート</sup>、お洒落だろう。あっち側が百盛広場<sup>デパート</sup>で、その隣の建物の二十階にうちの会社のオフィスがあるんだけど。どお、寄ってみる？」

「マツクの上かあ」

「おっ、邑ちゃん、生意気にマツクときたか」

「いいよお、行かなくていいよお。今日はみんな仕事だんべえ。

なあ、施川あ……」

「うん、わしも同じ」

「そうだな。止めておこう。ほら、向こう側を見てみな。その広場の後ろの方、森みたいにこんもりしているだろう」

「うん。わしみたいにモツコリしている。邑ちゃんには負けるけど」

「なんじゃそりゃ。バカ、スケベ」

「そこが花園飯店の庭で、市民の憩いの場にもなっているんだ。昨日の晩、梨田総経理に御馳走してもらったのがこのホテルさ」

「なあんだ。そうだったのか」

「日本の野村證券と隣の錦江飯店（地元資本の五つ星ホテル）との合併で、運営は日本のホテルオオクラ」

「へーえ、どおりで……」

「俺あ家の結婚式は帝国ホテル……」

「わかったわかった」

「そう、だからサービスは最高だし、チップを渡しても受け取らないよ。それは、中国ではとても珍しいことなんだ」

「わしの泊まるホテルとはだいぶ違うなあ。チップを渡すまで部屋を出て行かねえ……」

「とは言っても、時々受け取る者もいるけどね。そこが難しいところなんだよな」

「わし、チップ制は別にいいと思うなあ。日本人には抵抗があるけど、世界では当たり前だろう」

「俺もそう思う。ただ、習慣や社会の仕組みの違いとわかっていても、米国みたいに料金の何パーセントを必ずっていわれると、抵抗がある。気持ちなんだよ」

「俺あ宿屋へ行くと、ていげえ三千円渡す」

「へいへい、おまえだろう、モーターで心付を渡したのは」

「あんれ、施川、オメエはなんで知ってるんだ？」

「好きにしてくれ」

「最近、女中がコロコロ代わつからしようがねえな。こねえだは三人に渡したる。ふんなとき、オメエらはどうすんだあ？」

「わしか、わしは最初から渡さねえな。サービス料に含まれているんだから、渡す必要はねえだろう」

「米国みたいに、額が少ないって、露骨に嫌な顔されるのも頭にくるな」

「そうよ、気持ちよ、気持ち。それで世の中、丸く収まる。熊みてえに、やたらと銭を渡したがる奴がいるから困るんだ」

「勝手だんべえ」

「邪魔なら、わしにくれ」  
「そんなくねえなら、ドブへうっちゃる」  
「そうか、じゃあそのドブへうっちゃれ。わしが拾ってやる。ほれ、早くしろ」

2

「聞いたところによると、この花園飯店の合弁期間は二十年間、その後一ドルだか二ドルだかで、中国側へ譲り渡す契約なんだそうだ」  
「この三十三階建てのホテルが二ドルッ！ ああッ、おろろいた。おろろいた。十倍出すから、わしに売ってくれないかな。なんなら百倍出してもいい」

「俺あなら、ひゃ、百万倍でも出す」

「おっ、思い切ったな。日本円でいくらだかわかっているのか？」

「二、三百万円だんべえ……」

「二億じゃ、ボケッ！」

「ちっくら土地動かせば、問題ねえ」

「ちっくらか……」

などと馬鹿な話をしながら歩いているうちに、三人は“茂名南路”の交差点に到達した。

「おっ、おおおお、おっ……。あれ？」

施川の目が一点に集中、目はまさに点になっている。

人差し指が反対側の『古今』という看板の掲げられた店を指し示した。

「な、なななな、なんだあ？」

女性下着の老舗で、中国中に支店を持っている。

「大胆だなあ、あのディスプレイ。人形とはわかっけていても赤面する。ああ、純情なぼくにはとてもまともに見られない。だから向こう側に行ってもう少しよく見ようか」

と施川がおどけて言った。

「ほれ、邑ちゃん行くぞ」

「いんねえよお…、俺あ、恥ずかしいべよお」と言いつつも、足は既にそっちへ向いている。

上海の女性下着の店舗は、規制が緩いのか、どこも際どいディスプレイがショーウィンドーを飾っている。

マネキンも如何にも人形然としたものではなく、より人間に近いリアルなものを使っているの、突然目に飛び込んで来ると思わずドキッとさせられる。

ポスターもそう、中には男性誌のグラビアに載せた方が、と思われるものもある。

「すつ、すつごいなあ。場末のストリップを見るより興奮するよ」

施川は声を潜めて言った。

「うんだあ。ストリップよりもすんげえ…」

「なんだ、邑ちゃんも行くのかストリップ？」

「あつ、ふん」

「どすけべ」

ショーケースにジッと見入る施川、チラチラと視線を送る邑中、峪口も思わず際どい部分に目がいく。

男には少々目の毒である。

「なんだか、下半身がムズムズしてくるな。あれッ！ 熊、アンタ起つてない」

施川が邑中の下腹部に視線を投げる。

「ね、ねえよ。俺あこの程度じゃでつかくなんねえ。それより施川、オメエだんべえ、チンポおっ起つてんのは」

峪口は半立ち状態の下腹部に、落ち着けと命じた。

そつえば単身赴任の所為で、暫くすることをしていないと思った。下世話で恐縮だが、上海では、薬局の店頭で若い女性がコンドームを堂々と品定めしている、そんな姿をよく見かける。

まあ、必要なものだから、当然といえば当然のことだが、男にはなかなかできない。

茂名路を横切ると淮海路は一気に華やぎ、高級ブティックや高級ブランド店が建ち並んでいる。

「一気に高級になるな、この辺りは。日本の銀座といった感じかな」  
「銀座とゆうより銅座ぐれえのもんだべえ」

「はははっ…、銅座ときたか。上海の六本木と言われていて、この辺りは家賃も高くて、並の飲食業じゃ借りられないんだ。粗利の高い商売ばかりだろう、貴金属店とか」

「六本木ねえ……。そんなに高いんだ家賃は？」

「精々四本木だんべえ」

「おっ、邑ちゃん今日は冴えているねえ。高い、高い。うちなんか手も足もでない」

この辺りの家賃は、一平米、一日当たり八ドルとか十ドル（例えば、百平米で月の家賃は四百万円ぐらい）が相場だが、なかなか空きが出ないのが現状である。

「“全聚德”……、どこかで聞いたことがある名前だな、はて？」  
と、施川が呟いて首を捻った。

「“北京ダック”で有名な店だ。本店は北京の天安門近くにあるんだ。機会があったら北京へも行こうよ」

「ああ、ぜひ行ってみたいね」

「俺あも誘ってくんど。んでも農閑期な、農閑期」

「よし、三人で行こう。上海は見所が少ないモンなあ。周りには“杭州”とか“蘇州”とか、いろいろな観光地があるんだけど……」  
「行こう、明日行こう」

「うんだあ、行くべえ。峪口、オメエ手配しろ」

「明日！？ まあ、今回は上海観光で我慢してくれよ。次に来るときはセットするよ。それに明日は、こっちの友だちと一緒に食事をする事になっっているから」

「友だち？ お、女か？」

「ああ、女性だよ」

「お・ん・な……」

邑中が眉根を寄せた。

「熊にカツラを被せたようなんじゃねえの？」

「おえーッ！」

「おっ、自分でも気持ち悪りいか。うん、わかる」

「ははははっ…、邑ちゃんは面白いねえ。れっきとした女性だよ」

「ほんとか。嘘じゃねえだろうな」

「嘘じゃないよ、施川。周麗さんといって、以前世話になった人なんだ」

「なっ、なんの世話になったんだよ。ははーん、現地妻だな」

「チンポ触ってもらったのかあ。なんだよお、峪口も施川と同じスケベかあ」

「アホ。仕舞いにや怒るぞ。彼女は復旦大学という、上海一の名門大学出身の才媛だ。その上日本語もペラペラ。本当は会わせたくなかったんだけどね」

「よし、今回は上海で許してやる」

「なにが、許してやるじゃ」

女性と聞くとコロリと変わる、実に現金な男である。

「めんどくせえなあ…、女はいんねえよお」

「なんとゆうことを、もったいない。なあ、助平口」

「すけべぐちだと、施川、おまえにだけには言われたくねえな。ところで、そろそろ昼飯にしない」

「そうすべえ」

## 六、焼肉の“神田”

「どう、直ぐそこに焼肉屋があるんだけど」  
「ふんとだあ。助平川」  
「なんだとお、デカチンのムツツリど助平えがあ」  
「小ぢちゃいよりはよかんべえ」  
「悪うござんした。どうせ、わしのは小さい。早い、小さい、不味  
いって、女房にいつもゆわれてる。ゆわれてねえよッ！」  
「へえへへ……」  
「おつ、また勝ち誇りやがった。焼いて食うぞ、その無駄にデツカ  
イチんぽ」  
「峪口、止めてくれ。考えただけで食欲がなくなる」「その焼肉屋  
つてのは、うんめえのかよあ？」  
「邑ちゃん、結構うんめえよ。ほら、その路地を入ったところだ」  
「俺あ、うんめくねえと駄目だあ」  
「峪口い、邑ちゃん用に豚の頭でも用意してくれ」  
「生でいいか？」  
「十分、十分。なんなら、客の食い残しでもいいぞ。なになに、焼  
肉、“神田”、か？」  
「そう、そこ。駐在員の間で人気の店だよ。友だちの張さんに教え  
てもらったんだ。元気のいいママさんがオーナーでね」  
「ママさん、美人？」  
「うーん……美人、とは言わないけど……」  
「なんだ、つまんねえな」  
「オメエはそんだけだなあ。だから“エロハゲ”ってゆわれるんだ」  
「じゃかまし、誰がゆうんじゃ」  
「俺あ……」  
「ははははっ……、とても気風のいい女性で、なんでも神田に住んで  
いたことがあるらしいよ」  
「そうなの、それで神田か。じゃあ、うちの会社とはお隣さんだ」  
施川の会社は、東京の神田に本社を構えている。

「そんなら入ってやるか、峪口の顔を立てて。でも、奢りなっ」

「はいはい、わかりましたよ。御馳走致しましょう。その代わり明日は頼むぞ」

「うん？ ……失敗だったかな」

「いいよお。俺あが銭つ子出すからよお」

「おつ、そいつはありがてえ」

「峪口の分だけだけんどよお」

「あららあ……」

焼肉神田は、日本帰りの中国人姉妹が経営している。

峪口が友人の張威に紹介を受けたころは、あまり知られていないこともあつて閑散としていた

だが、近ごろは味とママの気風が評判となり、日本人だけでなく中国人の常連客も多い。

夜ともなると、予約なしでは入れなかった。

メニューを見ながら施川は、

「写真を見る限りはうまそうだ。それに値段も安い」

「けっこう良い肉を使っているよ。なによりも従業員がよく教育されていて、実に気持ちがいいんだ。会社の連中にも見習って欲しいものだ」

「うん。確かにみんなニコニコと対応がいいね。わしがウダウダ言っても、嫌な顔をしないもんな」

「なんだ、わかってンじゃねえか。まんざら馬鹿つてわけでもねえな。うん」

「熊、オメエのその無駄ッ腹、焼いて食うぞ」

「はっははは……、それも人気の秘密だな。それに、ここはオープンから従業員がまったく変わらない」

2

「へーえ、よっぽど待遇がいいってことかな？」

「待遇は特別いいとゆうわけじゃないみたいだけど、ママさんだろ  
うな。彼女の力だと思っよ」

峪口の会社では、設立以来、僅か二年の間といった何人の者が去  
って行ったことか、両手の指を折ってもまだ足りない。

基本的に労働契約の期間が一年ということもあるが、大きな理由と  
して、上海には外資系企業の参入が相次いでおり、外国語（英語、  
日本語）ができて、外資系企業での就労経験を持つ者は引つ張りだ  
こという状況があげられる。

会社を移ることで収入が五割増、或は二倍などといったことも珍し  
いことではない。

従業員から退職したいと意思表示があつたときには、すでに次の行  
き先を決めているのが普通で、引き留めようとするなら、転職先の  
給与を凌ぐ条件を出さなければならぬ。

しかし企業には、給与規定がありできるはずもない。

また、本人が考えているほど能力的に優れているわけでもなく、規  
定を崩してまで無理に引き留める必要もない。

結局、引き抜いた側も一、二年後には同じ悩みに直面することにな  
る。

日系企業同士がお互いに首を絞め合っている。

上海人の職業に対する考え方は極めて欧米的で、個人主義が如何な  
く発揮される。

それは徹底されていて、会社のため、同僚のためなどといった意識  
や愛社精神を培うのはとても難しいことである。

「いやあ、食った、食った。満足、満足。値段を聞いてもつと満足」  
焼肉をたっぷり食って、酒をしこたま飲んで、料金が五百元（75  
00円）と聞いて、施川は悦にいつている。

「オメエが払ったンじゃあんめえよお」

「邑ちゃん、ご馳走様でした」

腰を九十度に折って礼を言った。

「こんなときだけ愛想がいいなあ、オメエはよお」

三人が神田を出て淮海中路に戻ると、時刻は午後二時を指していた。

「飲んだら歩くのが億劫になったな」

と、酒で顔を真っ赤にした施川が愚痴った。

「“豫園”にでも行ってみるか」

峪口の頭に、突然“豫園”の文字が浮かんだ。

「よえん、……わしは十分酔った」

施川は駄洒落で応じた。

アルコールが入ると、軽口がポンポン飛び出す。

#### 第四章 “豫園商城” は土産物屋さん

一、漢方薬の“片仔廣”

1

「すんげえ人だなあ」

豫園はいつ来ても観光客で賑わっている。

圧倒的に多いのは地方からのオノボリさんだが、外国から観光客もたくさん訪れる。

上海で唯一といえる観光地である。

「へーえ、ここが豫園ていうのか」

「浅草みてえなとこだなあ」

邑中の的確な指摘があった。

「そう、それ。オノボリさんのメツカだ」

「熊にびつたりだな」

「オメエだつて同じようなモンだべえ」

「へいへい……。峪口い、ずいぶん古そうな建物だな」

「ああ、一見ね。でも、ほんとは三、四年前に土産物屋として建てられたものなんだ」

「ふーん、なるほど。よく見ると漆喰なんか新しい。それに造作もかなりいい加減だな」

「ふんじゃ、豫園てのも新しいのかあ？」

「否、豫園は明代に造られた庭園だ」

「明？ 清のめえか。中へ（へ）れんのかあ？」

「ああ、でも金を取られるよ。後で入ってみる？」

「うんだあ。へえつてみんべえ」

「おい、スリに気をつけるよ。鞆はこうやって、前に掛ける。後ろのポケットに財布は入れるな」

「はい、了解しました」

「俺も了解、しやした」

三人は観光客の人波に揉まれながら、奥へ奥へと進んで行った。

「ふんとだあ、峪口のゆうとおりだ。土産物屋だあ」

「だろつ、だから正式には“豫園商城”ってゆうんだ。“商城”ってのは、デパートの意味だよ」

「なるほど、漢方薬屋に茶ツ葉屋、貴金属に洋服屋、電気製品まであるじゃないの」

「土産に、なんか買うべえ」

「漢方薬でも買って帰れ。あのトカゲの乾したやつなんかいいんじゃないの。家族みんなで齧れば」

「おつ、“肯徳其”もある。おや、あれ、モス・バーガー？……へへえ、出てるんだ。それにしても客が入ってねえな」

「あれトカゲか……、あんなの俺あ家の近所にいつぺえいらあ。施川あ、今度持つてつてやんべえ」

「いんねえ、いんねえ」

「モスの隣に、“八重洲”って暖簾が掛かっているだろう」

「うん？ ああ」

「鰻屋だ。梨田総経理も言っていたけど、日本の下手な鰻屋よりもよっぽどうまいって。何回か一緒に来たことがあるよ。確か、彼がなにかの本で調べたんじゃないかな。ママだからねえ、仕事以外は……」

「あつ、そんなことゆって、梨田さんに言い付けてやるつと」

「どうぞどうぞ。 “あらあ、わかっちゃったあ” って言うはずだよ」

「へえへへへっ…、中国人も鰻を食うんだ？」

「中華料理じゃ、ぶつ切りにして炒めて食べるけど、日本のようにポピュラーな食べ物じゃないな」

「ぶつ切りかよお、へびを連想するなあ。熊なら頭から齧り付きそうだけど」

「俺あ、長げえのはダメだあ」

「なにがあ、 “ 長げえのはダメだあ ” だ。化け物みてえな、ぶつと  
いのぶら提げているくせによお」  
「へへへっ…」  
「糞ッ！ 勝ち誇るな、エロ豚」

2

「この店は、夜は居酒屋になる。日本人の溜まり場だそうだ」  
「嫌だねえ、日本人は。どこへ行っても群れたがる。わしや嫌いじ  
や」

「俺も嫌いだ。こつちでは必要以外に、日常生活では日本人と付き  
合わないんだ」

「うん、峪口らしいな」

その後、一年ほどして八重洲は閉店した。

峪口が聞いたところでは、家賃が高過ぎて、賃貸契約交渉が決裂し  
たとのことだ。

「ひよえー、まるでお祭りだね。祭りの夜店みたいのがたくさん出  
ている」

バタバタと羽ばたいて飛ぶ鳥、似顔絵描き、水飴細工など、実際に  
その場でやって見せる。

鳥の玩具に見入っていた邑中が、

“ あの鳥の玩具、孫に買ってけえったら喜ぶべえ ” と呟いて、

「なあ、峪口い、買ってくんど」

と切り出した。

「十元渡せば売ってくれるよ」

「ふ、ふんなこと、ゆうなよお。なあ、峪口い」

「わかった、わかった。気持ち悪いから擦り寄るな。何個買えば  
いいんだ？」

「店ごと買っちゃまえ。わしは漢方薬が見たい」

「漢方薬？」

「勃起グスリだんべえ…、スケベ」

「エロ熊、肝を抜いて売っちまうぞ」

“熊の胆嚢”は肝臓や胆嚢機能の回復に効果的な名薬で、質の良いものは一グラムで一万円以上する。

「なにか欲しいの？」

「片仔廣」

「片仔廣…、本物は高いぞ」

「そんなに高いの？ 会社の人に頼まれたんだけど、お金足りるかな……。お母さんが末期癌なんだって。本物は日本じゃ買えないんだそうだ」

片仔廣の材料の一つの麝香がワシントン条約に触れるとかで、日本へ輸入できない。

「銭ならある。貸してやんべえ」

「そうか……。邑ちゃん、ありがとう」

施川が邑中の手を右手で包み込むように握った。

「あんね、オメエの手、やっこいなあ」

と言って、左手を添えた。

邑中の目に星が煌いた。

「よっ、よセツ！ わしにその趣味はない」

と、施川が慌てて手を振りほどく。

「君たち、今日は同じベッドで寝なさい」

「うん」

「だ、誰があー」

ひと箱、一か月分で一万元（約15万円）というのを、三人で値切り倒して八千元に負けてもらった。

「ほんとうに安くしてくれたのかどうかはわからないけど、まあ、好意的に解釈して、善しとしましょう」

「うんだなあ」

「邑ちゃん、金、借りておくよ。ずうーっと……」

## 二、南翔饅頭の“小籠包”

1

「その狭い路を曲がってくれ」

「ここね。おつ、なにこの行列？」

二百人ほどの行列が、狭い路地を二列縦隊でクネクネと続いている。  
「小籠包」

「シヨウ・ロンポー……、つてあの食う小籠包か？」

「食えねえ小籠包てな、なんだ？」

「じゃーまし」

「くくくく……、 “南翔饅頭” 。ここは有名な店で、いつ来てもこんな状態だ。うちのスタツフも雨の日に買いに来るそうだ、雨が降ると行列が短いから」

「へーえ、そんなに人気があるのか。どれどれ……」  
店頭では小籠包を作る実演を見せている。

熟練した小姐（女性従業員）たちが、団子状の練り物を延ばした餃子よりも小振りの皮に、実に手際よく具を詰めていく。

それを丸い木製の輪っぱに十六個並べ、輪っぱを十段重ねて蒸す。

ここはテイクアウト専門の売場で、値段は一パックに十六個入って八元（120円）だ。

好みで備え付けの酢を付けて食べる。

皮は若干モチモチしていて、齧ると中から熱い肉汁が泉の如く湧き出してくる。

この肉汁がうまいのだが、量が多く味に変化がないので飽きてしまう。

十八個は一人で食べるには多過ぎる。

出来上がるそばから客に手渡されていくのだが、行列は常に二百名以上で途切れることがない。

「これじゃあ、待つてられないな。一時間は待たされるだろう」  
「ふんじゃいんねえ」  
「食おうと思えば二階でも食えるけど、どうする？」  
二階に上がると左右に部屋がある。  
左奥の“船舫庁”では、一階と同じ小籠包が十六個で十五元になるが座って食べることが出来る。  
右奥“長興楼”で供される小籠包は“特製蟹肉小籠”と呼ばれるもので、六個二十元と一階の七倍近い値段である。  
ここでは最低消費ラインとして、一人二十五元が設定されている。それで終わりではない。  
更に奥の“鼎興楼”には鱻フカヒレの小籠包がある。  
値段は一階の実に三十倍、六個で八十八元である。  
因みに、最低消費ラインはお一人様六十元である。  
「焼肉食ったばっかしかんだかな、へえらめえ……」  
「わしはうまいモンは別腹だ。でも、今はいいわ」  
三人は行列を横目に見ながら歩を進めた。

2

「賑やかだねえ、この辺りは。まさに邑中洗いだな」  
「あんだ？」  
「イモ洗い」  
「あんで？」  
「へいへい」  
「邑ちゃん、キョロキョロして迷子になるなよ」  
「うん……」  
返事はすれど気は漫ろ。  
「峪口い、首輪しておいた方がいいんじゃないかねえか」  
「そうだな、放し飼いは拙いかもな」  
「熊、離れるなよ。捕獲員が飛んで来るぞ」

「うん……」

三人は池の側の広場に出た。

しかしそこは、今まで以上に人で溢れかえっている。

「ひえーッ！ な、なんちゅう人出だ」

施川が驚嘆の声をあげた。

ジャンジャン、ドンドン、ジャンジャン、ドンドンと喧しいことこの上ない。

古の従者の衣装に身を包んだ先導者たちが、銅鑼や太鼓を打ち鳴らし、舞い、踊り、輿に皇帝の衣服を羽織った観光客を乗せ、狭い広場を一周する。

「いくらだ？ 俺も乗りてえ……」

「邑、あんたは乗せる方だ。はい、お客さん。この熊と相撲を取って、買ったら千元もらえるよ。さあ、いらはい」

「俺あは金太郎か」

「謙遜するな、熊の方だ」

二十元を払って邑中が輿に乗った。

担ぐ男たちが“重いよ”とよろける格好をしたので、観光客からドツと笑いが起こった。

邑中はのん気にピースサインなどを出し、写真を撮れと促している。

「あれ、スターバックスじゃねえか」

「ふんとだあ。“すたーばつくす”って書<sup>け</sup>えてある。外<sup>げ</sup>え人がコーシー飲んでいるどお」

「平仮名でゆうな」

「あんだ？」

「おお、ここはラーメン屋か？ 緑、波、廊……？」

「はははっ…、リュ・バ・ロウと言って、“点心”で有名な店だ。クリントンも寄ったそうだ」

「点心ちゃんね、ふーん……」

「クリちゃんが、ふーん……」

「熊、おまえがゆうといやらしいな」

ここも観光客の定番の店で、忙しく食事をしては次々に送り出されていく。

### 三、湖心亭

1

「その橋が有名な“九曲橋”。ほら、真つ直ぐじゃなくて、折れ曲がっていだろう。九つに曲がっているから、九曲がり橋だそうだ」

「わかり易いな」

「ふんどだ。どれ、一、二、三……、なるほど九つだ。で、九曲がり橋か。あの建物はなんだ？」

「“湖心亭”といって、昔の楼閣だな。中でお茶が飲めるよ」

「タダで？」

「とんでもねえ。一杯、四、五十元。とても高いよ。まあ、おまけでお菓子が付いたりするけどね」

「へえつてみんべえ」

湖心亭は木造で、二階に上がる階段はギシギシと軋む音を立てる。

「おい、峪口い。大丈夫かよ、この建物？ 熊、おまえは下にいろよ、餌は投げてやるから」

二階は狭い空間に、立錐の余地もないほどテーブルと椅子が並べられている。

席はほぼ満席で、白人の観光客が景色を愛でながら、思い思いにお茶を味わっていた。

「こうなっているのか。なるほど、なるへそ、雰囲気があるねえ」

「せつかくだからお茶を飲んでみようか。これが菜单メニューだよ」

施川は菜单に目を落とし、

「ひゃあーッ！ たっけえーッ！ それにしても種類が多いなあ」  
など言いながら、

「わし、これにするわ」  
と、“茉莉花茶”を指差した。

2

「ジャスミン茶だけどいいの？」

「そうなの。これでジャスミンか。いいよ、それで」

「そうか。じゃあ、俺は緑茶、龍井茶にしようつと。邑中はなんにする？」

「なんだよお、銭つ子出してお茶なんか飲むことあんめえよお。バカらしい……」

「邑ちゃんはいらない、と」

「あ、駄目。俺あにもなんか頼んでくれえ」

「ほれ、グダグダゆってねえで、なんか頼め。なんなら池の水でも飲むか」

「ふんじゃ、俺あ峪口と同じやつ」

「それじゃあおもしろくない。こっちにしよう」

「ん？ どれだあ……」

「これ、“菊花茶”」

「菊、って……、あんなモン飲めんのかあ？」

「野生動物の胃袋なら、なにを飲んでも大丈夫じゃ。その点、わしは繊細だからな」

「なあにが繊細だあ。くへへへっ……、オメエは落っこちてるモン拾って食つても、でえじょうぶだあ」

「わしは犬か」

「犬が怒んべえ」

「はいはい、小姐が怒ってるぞ。これでいいだろっつ？」  
「……………」

「よしわかった。邑ちゃんは池の水、と」

「うんにあ、駄目だよお。いいよお、そんで」

「おしおし、五十元」  
「ご、五十、元……、こんな菊の花があ……」  
「ブツブツとうるせえ男だなあ。ほれ、早く百五十元だせよ」  
「なんでえ、五十元だんべえ」  
「わしと峪口の分じや」  
「ほうか、うんじゃ百元だ。施川の分は払う筋合いがねえ」  
「いいよ、一人五十元だ。ほれ、施川、おまえも」  
「生意気に筋合いときたか。へーえ、おもしろいな、あれ」  
施川が隣の客席を顎でしゃくつた。  
「わしのもああやって出てくるのかな？」  
「いや、君のは違うと思う。ガラスのコップに茶ツ葉をぶち込んでお湯を注ぐだけ」  
「なんだよ、それ。あらあゝ、ほんとだ。いいなあ、峪口のは……。あれ、熊のもだ。なんだかわし、損をした気がする」  
出てきたお茶を目の前に、施川は不満気に呟いた。  
「くへへへっ……、悪は滅びる。くへへへっ……」  
「あつ、また勝ち誇りやがって。しかも標準語で」  
「ほら、茶碗がいくつもあるから、これも飲めよ」  
「あんがと。わしのは、色気もへったくれもねえな。そこいくと峪口のは、如何にもお茶、って感じだな。それにしてもかわいい茶碗だな。まるでお猪口だ」  
「ほれ、俺あのも、ほれ。ほれ……」  
と、邑中が誇らしげに指し示したが、施川はそれを無視している。  
「写真撮ろつか？」  
「おお、峪口はいつも気が利くねえ。それに比べてこっちの熊は、つたくもっ……」  
「施川あゝ、なんかゆったかあ」

## 第五章 明代の庭園“豫園”

### 一、仰仙堂

1

三十分ほど湖心亭で過ごした三人は、九曲橋を渡って豫園の入口に立った。

「初めて来たところは二重価格で、外国人は二倍くらい取られたけど、今は同じになった」

「昔はどこでもそうだったんだらう?」

「あんだあ、二重なんとかってなあ?」

「無視無視、二重顎だよ。オマエさんみたいな」

「はははは……、二重価格。そうなんだ。まあ、確かに当時の収入差を考えれば、仕方のないことかも知れないけどね」

三人はそれぞれ三十元ずつ支払って、庭園に足を踏み入れた。

豫園は明の時代に造営された庭園で、大小さまざまな楼閣、石山、池、橋などがある。

“太湖石”を用いた石山は、あまりにゴテゴテしていて、日本の庭園を見慣れた者には違和感がある。

太湖石とは“無錫”の“太湖”から産出される、独特の姿をした奇岩である。

楼閣の中には、歴史の重みを感じさせる芸術的な屏風や机・椅子などが所狭しと並べられていた。

「へーえ、あれって、日本に持ち帰ったら高く売れるだらうな」

「はははっ…、鑑定団の連中が見たら垂涎ものだらうな」

「にせものだんべえ」

「かもな」

以前、峪口が現地のツアーで桂林に旅した時、中国人の添乗員から、

“日本人と上海人は、なんでも価値を金額ではかるうとする”と皮肉を言われ、恥じ入った覚えがある。確かに、国内ツアーで同行した上海人たちは、建築中のマンションを見ると、必ずいくらだと訊いていた。

門を潜って正面の建物が“三穂堂”、農作物の豊作を祈念して名付けられたものだ。

一七六〇年に再建された、豫園で最も古い建物の一つである。

屋根には三国志で有名な関羽と張飛の像がある。

「ふーん、どっちが張飛だ？」

「忘れた」

2

「なになに、“仰仙堂”、か」  
裏側には池と築山、回廊状になっていて、夏なら涼しい風が心地よい。

「みんな、なにを見ているんだ」

「池の鯉だろう」

「おお、ウジャウジャ鯉がいるね。観光客がいろいろな物を投げ込んでいるけど、いいのかよ。鯉が腹痛起すんじゃないのお」

と、施川がおどけて言った。

「ところで、この建物は相当古そうだけど、どのくらい経っているのかなあ？」

「説明書によると、百五十年くらいだそうだ。さっきの建物の方が百年は古いよ」

「なあ〜んだ、てえしたことねえなあ。俺あ家はもつとふれえ」

「家だけじゃねえだろう」

「俺あは妖怪かあ」

「妖怪の方がまだかわいいわ」

「はははは……、上海にそんなに古いものはないよ。昔は鄙びた漁

村だったそうだから。過って都になったこともないしね」

「それにしても管理がいい加減というか、柱にもたれたり、壁にベタベタ触ったり、欄干に腰を掛けたり、いいねえ、中国は自由で。

なあ、峪口い」

「そうなんだよ。どこでもそうだけど、文化財に手で触れるのもオツケーとか、大らかというか、いい加減というか」

「日本だったら大変だ。触ってはいけませんは勿論だけど、写真を撮ってはいけませんとか、うるせえ、うるせえ…。峪口い、わりいけど写真撮って」

「どつちがいいのかねえ…。あいよ、ほら邑ちゃんもそこへ座れ」

「まあ、ものにもよるだろうな。金銀財宝じゃ、直ぐになくなっちゃうだろうし……」

「ははっ…、金銀財宝はよかったな。はい、チーズ」

「バ、ター」

「ふんじゃ、俺あ“まよねーず”、と。へへへっ…」

「なんで、マヨネーズなんじゃ？ 流れからゆえば、マーガリンだろうが…、しかも平仮名だ」

「よかんべえ、俺あでえ好きだあ」

「へいへい、おおっ寒い、寒い。どつち？」

「そこ、ほれ、獅子が二匹いるだろう。そこを入れて行くんだ」

3

「獅子か、これ…、日本の狛犬とほとんど同じだ。やっぱり、狛犬は中国から伝わったんだろうなあ」

「こつちが雌だ」

「あんで？」

「こらこら邑ちゃん、どこ覗いている」

「あんでって、ちったあ、その植木鉢を使えよ」

「あんだ？」

「その馬鹿デツカイ植木鉢の中に、小ぢんまりと鎮座している脳ミソを偶には使え、ってゆうの」

「あはははっ…、オメエもおもしれえことゆえるようになったな。うん、えらい、えらい」

「けっ、ナマ言いやがって。ほれ、子供が乳を飲んでるだろう。それに対して、あつちは毬だ」

「あんだあゝ、ふんなことか……」

「餓鬼でもわかるだろう」

「ふんじゃ、なんで雄は鞠なんだ。サッカーでもやってんのかあ？」

「ん、まあ、それはだな……、男に玉は付き物じゃ。毬ちゃんもデツカイのをぶら提げてるだろう」

「確かに、俺あのはデツケエ。うん」

「玉だけだろう」

「うんにゃ、棒もぶつとい」

「うん、確かに。わしは北海道へ行ったとき、見た。見たくはなかつたが、見てしまった。思い出すと今でもうなされる」

「そうか、じゃあ、奥さんがかわいそうだな」

「そうかあ、そんでいつも死ぬ死ぬってゆうんだな。そうかあゝ、可哀想なことをしたなあ。そけいくと、オメエらはいいなあ……、ちっちゃくつてよあ」

「すみません。お見逸れしやした」

「峪口と施川は揃って頭をさげた」

「馬鹿なことを言い合いながら、三人は池を横目に回廊を進んでいく」

「施川あ、正面の石に穴が開いているだろう。そこへ手を入れてみるよ。邪まな心を持っていると、抜けなくなるそうだから」

「どっかで聞いたような話だな」

「言いながら、手を無造作に穴に突っ込んだ施川が、

「痛てててえー、手が抜けねえッ！」

と大声をあげた。

「ふ、ふんとかあ？」

邑中が心配げに訊く。

「バカ、そんなわけねえだろう。ほら、熊、オマエも入れてみる」  
「いいいい、俺あは要んねえ」

「あれ、熊ちゃん、もしかして、ほんとに怖いんじゃないのぉ？」  
と、施川が邑中の顔を覗き込んだ。

「おっかなくなえけんぞ、気持ち悪いいべよお」

「けえけけけ……」

三人の脇を女子学生らしき一団が、クスクスと笑いながら通り抜けて行った。

「ほれ、女の子にまで笑われて……。ねーえ、面白いでしょうこのおじさん。熊みたいな顔してこの穴が怖いんだった」

「止めてけるお。おっぱずかしいべえ」

「へへへへっ…、大丈夫だよ、日本語はわからねえよ」

「私たちは日本人です」

女学生が施川に言い返した。

「あらあー、そうなのお。そりゃ失礼いたしやした」

## 二、玉華堂

1

順路に沿ってしばらく進むと、日本の観光団が添乗員の説明を聴きながら記念撮影に明け暮れていた。

その中の、ほろ酔い気分の男性が言った。

「この木、樹齢百五十年って書いてあるだろう。俺は十年前にもここに来たことあるけど、そんなときも樹齢百五十年だった」

それを聞いた他のメンバーたちが、けたたましい笑い声を立てた。

「はっはははっ…、あの親爺、面白いこと言うなあ」

「あんだあ、なんがおもしれえんだあ？」

「……峪口い、あの池の中の楼閣に行ってみようか」  
「オツケー、あそこで写真を撮ろう」  
「なあ……、なんがおもしろえんだあ？」  
「あの親爺に訊いてこいよ」  
「“会景楼”とゆうんだそつだ。上ると庭内が一望できるけど、ど  
う？」  
「寒いから、ええわ」  
「ふんだあ」  
「そつか。施川、池に落ちるなよ」  
「またまた、わしは邑中ではありません。おつ、と」  
と、よろめいた施川の腕を、邑中の逞しい腕がガシツと掴んだ。  
「おいおい、大丈夫かよ。お茶で酔ったのかあ」  
「おおつ、危ねえ危ねえ。あんがと、邑ちゃん」  
「氣いつけるよ」  
「こつこ、景色がいいから写真撮つてやるよ」  
「いいよあ、俺もいいよあ。こつぱずかしい」  
「いいから、ほら峪口も並べ」  
「はい、はい」  
「返事は一回でいいのつて、誰かに言われたなあ」  
「誰によ？」  
「女房に、なんて冗談。へへへつ……、小学校の先生にだよ」  
「三人で撮るか」  
「駄目ツ！ 三人は絶対駄目だあ。真ん中がおつちぬ（死ぬ）べえ  
よあ」  
「へへつ……、キンタマのちつちやい奴だ」  
「肝つ玉だんべえ。嘘じゃねえよあ。それやつちまって、俺あの御  
学友がおつちんだ」  
「くくくつ……、御学友だよ。偶然だよ、偶然」  
「ふんなことねえ。俺あも写つてんだあ、その写真によあ」  
「そんなの……、偶然だよ、偶然」

と、強く否定してみても、施川にも同じような経験があった。

2

「玉華堂”かあ」

少し湿っぽくなった雰囲気を打ち壊すように、峪口が明るい声をあげた。

「玉華堂は、豫園の持ち主の書齋だったそうだ。二人ともあの石を見てみな。正面に立っているやつ」

「えっ？ ……あの、穴ぼこだらけのやつ？」

「そう、あれは“玉玲瓏”と名づけられている石だ」

「なぬツ！ 石の分際で、名めえがついてンのかあ。なめえき（生意気）な」

「ははははっ…、面白い男だのお、御主は。確かに日本人から見ると、あまり価値を感じないけど、蘇州の“太湖”で採れる非常に貴重なものらしいよ」

「あんなげえ骨（骸骨）の出来損ねえがかあ……」

「ははははっ…、骸骨の出来損ないはいい。でもあれだけ大きくて、しかも細かく穴の開いた石は、とても珍しいそうさ。それに上から水を流すと、穴を伝った水が鈴を転がしたような、美しい音色を奏でると言われている」

「へえ、うんで？」

「うんで、つて。ただ、それだけの話だけ」

「なあんだ。わしなら、ただでもいらねえな」

「俺も要んねえ」

「誰が、あんたらしくれるか」

「おつ、またまた新発見……」

「今度はなにを発見したんだね、施川さん？」

「ほら、白壁の塀の上」

「うん？ ああ、龍だよ」

「あれえ、知っているのかあ。つまんねえなあ」

「あんだ？ どこが龍だあ？」

「ほれ、屋根だよ屋根。やあーね、なんちって」

「ヴアゝカ」

「有名だ。龍が空に駆けあがる姿を現しているのさ。潜りの上で二匹の龍が顔を見合わせているだろう」

「なあーるへソ」

「やっとわかったか。鈍い奴じゃ」

「ところで施川、あの顔から手の部分を見て、他になにが気がつかないかい？」

「手、龍に手あるか。足じゃねえのか」

屁理屈も言う。

「はい、はい」

「返事は一回でいいって言ったでしょう。わかんない人だねえ」

「へいへい。どう、わかったかい？」

「へへえーっ…、お代官さま、どうか教えてくださいませ」

「おしおし。それでは、手じゃなくて、足の指を数えてみなさい」

「あれは手だんべえ」

「どつちでもええ。指ねえ…、一、二、三、四、と」

「四本あるだろう。普通の龍は三本指なんだ。四本は特別な龍で皇帝を意味するそうだ」

「なんでもかんでも、昔の偉い人は欲が深けえなあ」

「ははははっ…、違えねえ」

などと冗談を言い合っていると、小姐（女性従業員）が駆け寄って来て、

「こちらへどうぞ、お茶が唯で飲めますよ」

と、日本語で勧める。

三、唯ほど高いものはない

「うん、お茶が、唯。行こう、峪口い」

「うんだあ、行くべえ。姐ちゃん綺麗だし」

「おつ、エ口豚が、色気づきゃがったな」

「要らない、要らない。お土産を売りつけられるぞ。唯より高いものはない、って言うだろう」

「なんだ、そういうことか。わしはまた、わしがカツコイイから特別サービスかと思った」

「おめでてえ男だ。どこがかつこええだあ。禿げ茶瓶のくせによあ」

「あつ、あああつ…、言っちゃったよ。とうとうわしを怒らせちゃったよ」

「ヤバイツ！ 邑ッ！ 早くにげるーッ！」

「うひゃーッ！」

と叫び声を上げて、邑中がその場から逃げた。

「ところで施川、そこから外に出られるけど、どうする出る？」

「もう終わり？」

「いや、そつちへ行くと“内園”があるけど」

「内園？ せつかくだから入ってみようよ。別料金取られるの？」

「いや、大丈夫」

「おーい！ 邑あーッ！ おいてくぞあーッ！」

邑中は離れたところから、恐る恐る二人の様子を窺い見ている。

「怒ってねえかあ？」

「命だけは助けてやるぞあ？」

三人は内園に足を踏み入れたが、ここまで入って来る客は少ない。

「ほーう、梅の盆栽か。紅梅、白梅、なかなか見事なものだ」

施川は父親の影響か草木に興味を示す。

「日本の盆栽の仕立て方とは違うな」

峪口も同じ趣味を持つ。

「安モンだあ。てえしたことねえよ。オメエら“大宮の盆栽村”へ行つたことあつか？」

「聞いたことはあるが、行つたことはないな」

「わしは一度行つたことがある。確か、“大宮公園”の辺りじゃないか？」

「うんだ。俺あ家の親父が、特別でえじな盆栽は預けてあんだ」

邑中は父親の運転手としてよく行くらしい。

「へーえ、高いの持つているんだ」

「うんだ。五葉松なんか何百万てすんべえ。鉢だつて百万はすんどお」

「脱税して買つたな」

「あつ、ふ、ふんなことねえよお」

「なに、焦っているんだ。怪しいなあ」

「ふ、ふんなことあ、ね、ねえよお……」

内園は周りを二階建ての建物で囲まれている。

2

「ここは中庭なんだ？」

「そう、正面が舞台になっている」

「なるほど。あそこでなにかを演じて、二階の席から観劇をするんだな」

「ストリップでもやつたんだンべえ。でへへへ……」

「おつ、本性を現しやがつたな。おい、涎を拭けよ」

「あつ、うっふん」

「なあーにが、うっふんじゃ。助平豚が」

「くくく……、助平豚か、猪八戒だな。ほれ二人とも、この舞台の天井裏を見てみなよ。渦巻き状の見事な細工が施されているだろ  
う」

「どれどれ……、うん、確かに」

「この舞台が豫園で一番古い建物って、なにかの本で読んだことがある」

「へーえ……、おッ！ 新発見、新発見」

しばらく天井裏を眺めていた施川が、突然大きな声を出した。

「今度は、なにを発見した？」

「ほら、渦巻き状の真ん中、穴が開いているだろう。雨が降ったらどうするのかな？」

「ほんとうだ、どうするんだろう」

「ありやツムジだんべえ」

「なるほど……、で、雨降ったらどうするんだ？」

「傘差せばいいべえ」

「はい、はい。訊いたわしが悪うござんした」

「わかれば、ええ」

「へいへい、怒る気にもなンねえ」

「ははは……、さあて、お二人さん。少し早いけど、八重洲で鰻でも食って帰ろうか？」

「おっしゃーッ！」

「ウナギかあ……」

「あれ、邑中、鰻は駄目だっけ？」

「俺あ、魚系はあんまし好きじゃねえ」

「鮭は好物だろう。それも生のやつ」

「焼いたンならいいけれど、生は駄目だあ」

「そうかあ……、わしテレビで、オマエさんが鮭に頭から齧りついている姿、視たことあるけどなあ」

「俺あ、テレビに出たことねえどあ」

「はっはは……、大丈夫だよ。カツ丼でも天井でもあるから、ラーメンもあつたな」

「ふんなら、でえじょうぶだあ」

「なんでもあるじゃねえか、ほんとにうまいかあ？」

と、施川が怪訝を示した。

豫園の楼閣は確かにすばらしいと思うが、中国人とは審美眼が異なるのか、峪口はこの築山には感動を覚えない。  
同じ石をモチーフにした庭なら、侘び寂びを感じさせる京都の石庭には感動を覚えるが……。  
その点は施川も同じらしい。

## 第六章 上海の朝市

### 一、上海交通大学

1

朝市を見たいという施川の要望を受けて、峪口は七時に起き出した。

「おーい、施川あゝ。起きているかあ？」

という峪口の呼びかけに、

「あゝあ、起きているよおー」

と、元気のよい返事が返ってきた。

「昨日は早く寝たから、五時ごろ目が覚めちゃって頭を掻き掻き、施川が部屋から出て来た。」

「朝市に行きたいンだろう。じゃ、早くしないと」

「そうなの、終わっちゃうの」

「なにしろ、道路に店を出しているんだからね」

「道路に？」

「そうだよ。それも歩道じゃなくて、車道にさ」

「近いの？」

「ああ、直ぐだよ。歩いて三十分」

「へへっ…、そらあ、近いは……」

「まあまあ。せつかくだから、庶民の生活を見ながらブラブラ行こうよ」

「そうだな。で、朝飯はどうする？」

「朝市に行けばいろいろあるし、途中でも買えるよ。こちらの一般庶民の朝飯を喰わしてやるから。ほら、早く着替えるよ」

「わかった、わかった。その前にわしは便所じゃ」

「俺も」

「こつゆうときは二つあると便利だなあ」

「そつちには、トイレットペーパー、置いてねえぞ。施川には必要ないか。ほらよっ」

「あんがと」

「……あれ、邑中は？」

「おつとお、忘れていた。まだ冬眠中だ。まあ、置いてつてもいいけどな。わしが起こしてくる」

「そつしてくれ」

『「こらあー、熊ッ！　いつまで寝てるんじゃーッ！」  
『ひゃーッ！』」

奥の部屋から施川の怒鳴り声と共に、邑中の悲鳴が轟いた。

峪口たちは、早朝の七時半にマンションを出た。

「うづうーっ、今日は一段と冷え込んでいるなあ」

「うんだあ、寒びいー」

と、鼻水を啜る邑中。

「ヒエックション！　なあ、タクシーで行かない」

「うんだあ。銭っ子出すからタクシーで行くべえ」

「駄目、駄目、歩くの。君たちに庶民の生活の一端を見てもらいた  
いんだ」

「うづうーっ、寒びいーよお。タクシーからでも見られるうううう

……」

「うんだあ」

「ウダウダ言つてねえで、おい、ほら、こつちだ」

峪口が華山路を東に向かって歩き出すと、施川と邑中は首をすぼめ、仕方なし気にトボトボと付いて来る。

「ヒエーツク、ション！　と……。峪口はあれだな、元気でいいな  
あ」

「うんだなあ。燃えてンなあ」

などと、二人はブツブツ言っている。

マンションから五分ほど歩くと、“上海交通大学”の正門に行き着く。

「おつ、邑がいた」

入口の門の前に雌雄の獅子像が鎮座している。

「おつ、奥さんも一緒だ」

「こら、施川、怒られるぞ。邑はともかく」

「けけけっ…、失礼しました」

「俺あ、そんなに凜々しいかあ」

「おつ、雄獅子がしゃべった」

“おい、行くぞ”と、施川が獅子像を叩く。

「俺あ、こつちだ」

江沢民前国家主席の出身大学で、理科系では中国でも一、二を争う超難関大学である。

「俺はこの中をよく散歩するんだ」

「へーえ、へえって（入って）もいいのかあ？」

「今まで怒られたことないから、いいんだろう」

「ほうかあ…、なんだかおつかねえな」

「遠回りになんねえか？」

歩きたくないのか、なんだかんだと二人はうるさい。

「ああ、たいして遠回りにならないから、大学の中を通り抜けてみようよ」

正門を入ると右側に赤いレンガ造りの図書館、直ぐに視界へ広い芝生の広場が飛び込んでくる。

校舎の配置は日本の都会の大学と似たり寄ったりで、違うのは全寮制のため、構内に寮の建物が軒を連ねていることである。

「なんだ、日本の大学と変わらねえな」

入る前は緊張気味だった施川が、拍子抜けしたような声をあげた。

「ふんだあ。俺あ、軍隊みてえにおつかねえところかと思ってたあ」

「まったくくないな、それは。学生も自由な感じだし、それに、ほら、

手を組んで歩いているアベックもいるだろう」

「あらあゝ、あの二人、ベンチで抱き合っている。朝からお熱いことまで……。うらやましい限りだねえ」

「うんだなあ」

「焼かない、焼かない。もう、そのあたりは日本と同じだよ。駅や大衆の面前で、堂々とキスしている若者もいるよ」

「服装を見ても、みんなお洒落だよな。わしは、まだ人民服を着ているのかと思つてた」

「ふんだあ、カーキ色したやつだンベえ。昔、テレビでよく見たベえ」

「はははっ…、人民服ねえ。五、六年前に来たとき、お爺さんが着ているのを公園で見たことがあるけど、最近ハマったく見ないな。なにしろ衣類は安いから」

峪口が駐在を始めたころ（一九九九年）には、確かに人民服もときどきは見かけた。

「そんなに安いなの？」

「ああ、安い安い。ほら、昨日の偽物市場、ブランドの付いたものが五、六十円で売られている。値切れば二、三十元でもオツケーさ。中国に住んでみて、峪口は物の価値観が変わった。」

最近では日本でも、衣類の安売り店は増えたが、それが当たり前の値段であることに気がついた。

日本がなにもかも異常だったのだ。

バブルが弾けて、それがようやく普通になりただけの話である。

二、上海の“ユニクロ”は高級店

1

「品質が悪りいんだンベえ」

「それがねえ、そうでもないのよお、邑ちゃん。内緒だけど、梨田総経理もこっちへ来るとよく買って帰るんだよ」

「へーえ、あの梨田さんが……」

「スキー用の上着だったけど、一度買って帰ったら、みんなから“いい、いい”って言われたんだってさ」

「梨田さんなら爪楊枝でもデパートで買うと思っていただけ、それでもねえんだ」

「当たり前えだんべえ。俺あ家だって楊枝はデパートで買う」

「おまえさん家のは爪楊枝じゃなくて、“熊楊枝”だろう。店は近くの駅だろう」

「うんだあ」

「ああゆう店はなあ、エロ豚。普通はなあ、スーパーって言うんだぞ。正確にはスーパー・マーケットだ。恥をかくから覚えておけよ」

「あんでえ？ 東部 デパートって、教えてあんど（書いてあるぞ）」

「はははっ…、買って帰ったのは日本の一流メーカーのブランドだったな。ときどき本物の盗品や不良品が混ざっていると、実しやかにゆう連中もいる」

誰が流しているのか、そんな噂が“もしかしたら自分の買った物は本物”、と思わせるから不思議だ。

これも立派なマーケティングの一種か……。

「輸出用の不良品か。うまいことゆうねえ。確かに、日本の品質管理は厳しいからな」

施川は得心がいったとばかりに頷いた。

「そうそう、見てもよくわからない“解れ”があるからとか。なあ、なんとなく信憑性があるだろう」

「なんだよお、嘘かあ……」

邑中が残念そうに呟いた。

「ここは中国。なにがほんとうなのか、正直よくわかりません」  
陝西南路や長樂路を歩いていると、衣料品店が異常に多いことに気

がつく。

素人でも簡単に手を染められる商売として衣料品店があるのだ。観光客や地元客が大量に購入していくのを見かける。

日系の洋服の青山やユニクロが、こちらでは高級店の部類に入っていることを見ても、その安さがわかるうかというものだ。

2

構内を抜けて裏門を出ると“番禺路”、左に向かうと“虹橋路”、右に進めば“淮海西路”と交差する。

その交差点を右に折れて、十分も歩けば華山路に帰ることができる。

「ここは華山路だよ。少し遠回りしたけど、元の道に戻った」

「マンションの前の道だな」

「そうそう。あと三十分も歩けば、朝市の場所に着くはずだ」

「えっ、あと三十分。……さっきさあ、マンションから三十分って言わなかった？」

「ゆったべえ、さっき確かにゆったべえ」

「邑中が血相を変えて食い下がる。」

「まあまあ、硬いことはゆわかないの。ここは中国よ、時間には大雑把でいいの」

「やれやれ、最初からそうゆってくれよ。心構え、ってモンがあるだろう」

ボヤキの施川、本領発揮である。

「その脇道に入ったところに、マグロのうまい寿司屋がある」

「マグロ？ 最近は中国人も鮪を食うんだ」

「寿司はすっかり上海に定着したね。ほら、俺のマンションの隣のデパート、あそこにも回転寿司がある。最近はいつも行列だ」

「回転寿司か……。わしとしては、寿司はやっぱりカウンターに座って、ネタを見ながら、“親爺さん、今日はいいネタへえっているかい？ へい、コハダのいいのがへえってやす。そうかい。じゃ

あ、そいつを握ってもらおうか”なんてね」

「あんだ、どこの生まれ」

「江戸っ子でえ」

「ブアゝカ」

「ははははっ…。回転寿司といつても、こつちじゃ、グルグル廻っているやつを取る客はほとんどいない。それを見て注文するんだ。廻っているのは、要するにディスプレイのようなものだ」

「なあーるほどねえ」

「なにしろ、ラーメンもうどんも焼き魚も、なあゝんでもあつて、メニューを見る限りじゃ、何屋さんか、さっぱりわからない」

「ふ、ふんとかあ。そうゆう店はうんまくねえんだ」

「おっ、さすがは食通の熊ちゃん」

「えへへへっ…」

「ほら、マンションの入り口のところにあつた“味千ラーメン”、あそこのメニューも同じようなものだ。さすがに寿司はないけどね」

三、えっ、朝市は車道で？

1

上海では食の専門店は成り立たない、と峪口は考えている。

家族或は友人と出掛けて、さて食事となった場面で、好みが同じな問題は無いが、一人がこれは嫌いだと言い出したとき、さてどうするか。

中国人は家族連れなら子供の嗜好に合わせ、友人同士なら友の嗜好に合わせる。

そこで店側は客を逃さないために、誰もが選べるようにと、料理の種類を増やすことになる。

マクドナルド ケンタッキ  
麦当劳や肯德基に入ってみると、商品構成がほとんど同じことに、

直ぐ気づくはずだ。

華山路は“江蘇路”と交差する辺りで、大きく右に湾曲している。そこから十分ほど歩くと、長樂路にぶつかる。

三人は長樂路を東に進んだ。

「この路を真っ直ぐ行くと、ガーデンホテル（花園飯店）の裏側に出るんだ」

「ふうん。峪口の地図は、ガーデンホテルが中心になっているんだなあ」

「あはっ…、確かにそうだ。上海に来た当時の名残かもな。出張のとき、常宿にしていたこともあるけど、歩き廻って迷子になったら、とにかくガーデンホテルだったからね」

「まあーだあ？」

邑中が不満気に呟いた。

「もう直ぐ、もう直ぐ。ほら、あそこに信号が見えるだろう。あれが“常熟路”だから」

「え、ええっ、一キロはあるだろう」

施川が大袈裟に呟く。

「いや、九百五十メートルぐらいだ」

「ふにゃふにゃ、ふにゃ…、俺あ死んだ。ガクッ」

「熊、背中へ乗せろ」

二人はブツブツと文句を言いながら、ようやく朝市の場所に辿り着いた。

「ほら、見てみなよ。ずーっと続いているだろう」

「ひょえーっ、完全に車道だよ。車の方がスピードを落として遠慮しているじゃねえか」

「ふんどだ。ああ、びっくらこいた」

住宅街のところどころに朝市は立つが、長樂路の朝市は特に大規模で、“富民路”との交差点から襄陽北路の交差点まで、およそ三百メートルにわたって延々と続いている。

遠慮気味に歩道でといった代物ではなく、堂々と道路の半分を使っていた。

狭められた道路を、バスはクラクションを鳴らすこともなく、スピードを緩めて通り過ぎて行く。

その数およそ百五十軒。

店といっても自転車やリヤカーの荷台、或はムシロといった“移动式簡易店舗”である。

「しかし、なんでも揃ってるなあ」

「ふんとだあ、闇市みてえだ」

施川と邑中が驚きの声をあげた。

「闇市を知っているのか？ 歳はいくつだ？」

「あつ、いつけねえ」

売られているのは、肉、野菜、魚、乾物、衣類、雑貨などといったもので、すべてを合わせれば、ちよつとしたスーパーの品揃えに匹敵する。

中には大蒜や生姜だけを単品で商っている者もいる。

中国の市場の特徴は、季節や旬に関係なく野菜や果物が並べられることだ。

また、庶民の間に旬という意識はないようだ。

二月にもかかわらず、スイカ、トウモロコシ、トマト、キュウリ、ナス、筍、サトウキビなどといったものが並んでいる。

「峪口い、今は二月だんべえ、上海も……？」

「俺も最初は驚いた。夏野菜が一年中あるんだもの。しかも、価格は一年を通じてほとんど一緒だ」

「国土が広いから、四季がいつでも混在している所為だろうな」

「うんだ。北と南じゃ、ずいぶん温度が違っべえ」

日本なら、季節外れの商品に高い値段がつく。

だが不思議なことにこちらでは、一年中ほとんど同じ価格が保たれ

ている。

確かに、綺麗にパック詰めされたスーパーの商品とは異なるが、採り立ての殻つき空豆を大き目のポリ袋に目一杯押し込んでも、十元足らずなのだから嬉しい。

「大き目のポリ袋に目一杯詰め込んだ空豆が、たった十元だったと会社で話したら、従業員に言われたよ。“それは高いです。峪口さんは日本人だから吹っかけられた”って」

「ポリ袋に目一杯で百五十円ねえ。日本じゃ考えられねえなあ」

「だろう。俺は農家の出身だから、この値段で採算が取れるのかって、他人ことながら要らざる心配をしてしまう」

「俺あ、自慢じゃねえが現役の百姓だ。その値段なら、寝ていた方がよかんべえ」

3

朝市には、近郊の農民や漁師が、自分で作った野菜や獲った鮮魚を持ってきているのだと、長いこと考えていたが、実はそうではなかった。

「ところで、この人たちはどうゆう人たちなの？」

「地方の出稼ぎだっけさ」

地方出身者が、少ない資金を元手に卸市場で仕入れ、小売りして日銭を稼ぐ、その日暮らしの者がほとんどだったのだ。

確かに上海近郊の農民の家は、どの家も立派で二階、三階建てが当たり前だ。

すでに“万元戸”のレベルではなく、年収が日本円で数百万円、或いは数千万円のいわゆる“十万元戸”、“百万元戸”の農家が誕生している。

彼らは豪華な一戸建ての家に自家用車や大画面テレビを所有、農閑期には海外旅行と、上海市民も羨む豊かな生活を享受しているとのことだ。

こういつた朝市の光景は、ほんの数年前まで、どこの道路や脇道でも見られたものだ。

しかし、最近は衛生上の問題とか、国際化にともない見栄えが悪いとかの理由で、限られた場所だけに減ってきている。

確かに、衛生面からいえば問題はある。

冷蔵庫などはないし、肉や魚には蠅がたくさん群がっているが、どれも殺したての新鮮な肉である。

鳥類（鶏、家鴨、鳩など）は生きたまま売られているのがほとんどで、商談が成立すると、その場で頸動脈をハサミでチョン切り、血抜きした後、熱湯に浸され羽をむしられ、解体される。

断末魔の鳴き声、解体される仲間を見つめる鳥たちの悲しげな目は、脳裏に焼きついて離れない。

「そうそう。こういつた光景は、子供のころよく見られたよな」

施川が懐かしげに感慨を込めて言った。

「うん、俺も記憶にあるよ。村のなんかの集まりに、家の爺さんが鶏の首を捻って喉を包丁で掻き切った。その鳥を木の枝に逆さにぶら下げると、喉元から赤い血がポトポトと滴り落ちた。……そんな

光景を、一部始終を目の当たりにしちゃったモンだから、その晩、鶏肉の炊き込み飯が喉を通らなかつた」

綺麗にパック詰めされて並んでいる肉や魚ばかり見ていると、裏側で誰かがこういつた汚れ仕事をしてくれているということをつい忘れてしまう。

日本で先生が、図画の時間に“魚の絵を描きなさい”と言うと、魚の切り身を描く生徒がいるそうだ。

日本の将来が思いやられると考えるのは、私だけだろうか……。

四、犬と驢馬<sup>ロバ</sup>、どちらがうまい？

「もつとさあ、犬とか蛇とか売られているのかと思っただら、意外と普通のものばかりだなあ」

施川が拍子抜けしたとばかりに言った。

「俺あも……、ほれ、夕べ誰かがゆつたべえ。“中国人が食わねえのは、羽のあるものは飛行機、四足は机だけだ”つてよあ……」  
と、邑中が口を尖らす。

二人とも怖いもの見たさで、いわゆるゲテモノが並べられているのを、少なからず期待していたようだ。

「どうも、そういつた誤解があるようだな」

日本人の持つイメージからすると、中国人は日常的に蛇や犬猫を食していると思われ勝ちだが、それは間違いで、平素は極めて普通の食材を使っている。

しかしながら、そういった食材は北と南では良く使われているようだ。

“食は広州にあり”で知られる広東省では、それこそなんでも食べるといわれており、その貪欲振りには、さすがの上海人も舌を巻くそうだ。

「従業員に黒龍江省の出身者がいてね、食事の度に、犬の肉は美味しい、もう一度食べたいって言うよ」

「犬ってどんな味なのかな？」

「うん。俺も訊いてみたよ」

「そしたら、なんだって？」

「豚や牛なんて問題にならない。羊よりもうまい。でも、なんといつても一番美味しいのはロバの肉です、だって」

「なんだあー、ロバってなあ？ あの馬のちっちゃっこいやつかあ？」

「あの驢馬だろつなあ、他になんかあるか？ 老婆、なんちって」

「へへへっ……、老婆は食えねえべ。もつとも施川じゃ食うかも知んねえけんどよあ」

「わしが婆様のなにを食うンじゃ、馬鹿者メ」

「へえへへ……、昔つか見境ねえべよお」

「かあかかあ……、それはある意味では正しい。驢馬ねえ……、驢馬つてゆわれても味の想像ができねえな。だいたい、動物園でしか見たことねえモンな」

「上海人の肉のランクは、一に鶏、二に羊、三に豚、四、五がなく、六に牛といったところかな」

2

上海は食材がとても豊富で驚くばかりである。

魚貝類はほとんどが河川や湖で獲れたもので、日本では見られない種類の魚貝や甲殻類が信じられないほど安く売られている。

海の幸はとも少ないが、イシモチに太刀魚、渡り蟹にスミイカ、このあたりは一年中売られている。

近海の汚い海でも獲れるのだろう。

海の魚貝類は河川ものに比べると、二倍以上の価格がする。

それでも中国が豊かになるにつれ、それらの消費量が増えて、国際相場に影響を与え始めていると聞く。

「困るなあ。中国人の一割としても日本の人口と同じくらいだろう。鮪のうまさなんか知ったら、わしらの口に入らなくなっちゃうよな」  
「すでにその傾向が出ているらしいよ。やはりうまいものは、誰が食ってもうまいものなあ」

「うんだあ、テレビで見たことあんど。俺あ、大トロがでえ好きだかななあ。銭つ子払っても、食えねくなんのがしんぺえでしんぺえで」

3

日本ではほとんど食べない雷魚や草魚、最近やたらと増えて在来種

の生態系を壊しているブラックバス、毛色の変わったところではアメリカザリガニなども、こちらでは好んで食べられている。

もちろん蛙は、言うまでもなく人気食材のひとつであるが、時々、錦鯉や金魚が水槽に泳いでいて、ここはペットショップかで見紛う食品売場もある。

もちろん、錦鯉も金魚も食用として売られている。

「へーえ、そうなんだ。錦鯉はともかく金魚は不味そうだな」

「そうだろう。食うとこなさそうだし……。でもよ、施川。雷魚や草魚は泥臭くて食べたモンじゃねえが、“ザリガニ”だけはうまかったよ」

「ザリガニなら、わしも餓鬼のころ茹でて食ったことがある。確かに、不味くはなかった」

「施川あ、なあーに気取ってんだあ。“不味くはなかった”だとお…。ふへっ、生で齧ってたくせによお」

「じやかましいー、人間様を野生熊と一緒にするな」

「峪口い、オメエもなに気取ってんだあ。ザリガニって、“エビガニ”のことだんべえ。うんめえべよお。俺あ、でえ好物だあ」

千葉県の一部の地域では、ザリガニをなぜかエビガニと呼ぶ。

日本の在来種も、以前は混在していた記憶があるが、繁殖力の旺盛な外来のアメリカザリガニに放逐され、絶滅の危機にあると聴いている。

「へいへい、そりゃようござんしたね。峪口い、生のやつを少し取ってやれよ」

「うん、そうだな。お姐さ〜ん！ やっぱり調理方法だと思っよ。

濃い醤油味をベースに大蒜をたっぷり、油ギトギト、唐辛子でスープが赤くなるほどのとても辛い味付けだったけど、ビールにぴったりに。初めてのときは、恐る恐る箸を付けたものだけど、今じゃ主菜の“火鍋”よりも好きになった」

「そうか、そんなにうまいのか」

「ふんだから俺あがゆったべえ。なあ、頼むべえ」

「今の季節は不味いらしくて、ないんだよ」

「なあーんだ。ねえんならゆうなよ」

高級魚の桂魚は川魚だが癖もなく、白身は淡白で、まさに日本人にはうってつけの魚と言える。

だが調理方法は蒸すの一点張り、馴染みの店に行くと思わずに、“塩を振って焼いてください”と懇願するのだが、焼く設備がないと断わられ続けている。

市場では生きた亀や蛙の種類の高さも目を引くが、野菜がこれまた豊富で、日本人が食べている野菜はほとんど揃っている。

なかには川岸に茂るマコモなどの、“これって草じゃないの”といったものも野菜として売られている。

逆に、“これはなんの木の根っ子ですか”と問われる牛蒡を説明するのに、苦労させられた覚えがある。

穀類も豊富で、日本で以前に赤いダイヤと揶揄された小豆、これを原料とした餡子の安さには驚かされる。

日本で使用されている餡子のほとんどが中国産と聞いている。

夏になると枝豆も豊富に出回るが、レストランなどで出される紹興酒漬けされた枝豆には馴染めない。

“お願いだから、茹でた熱々に塩を振って出して”というささやかな願いも、魚の塩焼きと同様に無視され続けている。

## 第七章 外灘（ワイ・タン）

### 一、浦東新区

1

「いやいや、朝市は面白かった。ところで、これからどうするの？」  
「俺あ腹減った。なんか食うべえよ」

「さつき喰らったばかりだろうが、その辺に落ちてる野菜の切れ端でも拾って食ってる。それよりわしは喉が渴いた、ビールが欲しい」

「熊、今何時だ？」

「俺あの金の“ロレックス”によると九時五十、三、四、五秒、ああっ、六秒……」

邑中が誇らしげに右の腕を突き出して応えた。

「馬鹿、強盗に殺されるぞ。自慢気に出すな」

慌てて腕を引込めた。

「そうゆうのは、持って来るなど言っただろう。ほんとに襲われるぞ」

「ひいー、施川あ、持っててくんどお」

「なんなら、わしのと取り替えてもいいぞ」

「うん」

「おっ、ほんとにいいのか？」

「ヴァーカ」

「あっ、この野生豚。わしをからかったな」

「痛でえ！」

施川が邑中の植木鉢頭を張った。

「ほれ、じゃれてねえで。外灘へ行ってみよう」

「ワントン？」

「かぁー、まったく餌のことしか頭にねえのか」

「オメエは女のことだけだんべえよお」

「間違いではない。峪口いゝ、なんか餌やってくれ」

「よしよし、ちよつと待ってる。肉マンでも買ってやるから」

「うんうん、やっぱり峪口だ。ほれ、銭っ子」

「峪中は上機嫌に百元札を差し出した。」

「いいよ、だいいちお釣りが無いと思うよ。一個一元ぐらいのモンだから」

「峪口はデツカイ肉マンを四個買って、二人のところへ戻った。」

「峪中に二個渡し、施川に一個差し出すと、」

「わしはいらん」

と受け取らない。

「あんでえ？ オメエおつかねえのかあ」

「わしはデリケートじゃけん」

「くくくつ…、なあんがデレケートだあ。デレスケのくせによお」

「おつ、生意気に横文字できたか。それをゆうんならデリケートじ

ゃ、デリ……」

「ふんなこたあ、どつちでもよかんべえ」

「施川、大丈夫だから食ってみるよ」

「いや、わしはいい」

「そうかあ…、うまいんだけどなあ。ほれ、邑ちゃんもう一個、食えるだろつ？」

「ちつとばつかし多いなあ」

「皮を食わないで、餡だけ食えよ」

「そうすんべえ」

「峪口、早くワントンとやらへ行くつ」

「外灘ね。ほら、河畔で歴史的な建物のある場所、テレビでもよく紹介されるだろつ」

「ああ、わかった。ヨーロッパのような雰囲気のあるところね。いいね、いいね」

施川が嬉しそうな声を上げた。

「施川、オメエ……」

「ああ、わしは行ったことあるよ。文句あるか？」

「俺は行ったことねえよ」

「あんれえー、なんでわかつたんだべえ……」

「オマエさんの考えることぐれえわかるよ」

「ふんとかあ、気いつけねえと……。ふんふん」

「なあーにが、ふんふんじゃ、エロ熊が……」

2

襄陽北路と長樂路の交差点でタクシーを捕まえた。

「先ず“浦東”側に行つて、“陸家嘴地区”の金融街を見よう」

「ニュージャージー？」

「俺あ行ったことある」

「へいへい」

「はははっ……、似ているけど、リニュージャージーだ」

「どこが違うんだあ？」

「はい、峪口。無視、無視」

浦東はつい二十年ほど前まで、鄙びた漁村だった。

西側、つまり“浦西”は都市部で豊かな地区、対して浦東地区は貧しさの代名詞になっていたそうだ。

それがどうだろう、外資企業の誘致によって、今では超近代都市に生まれ変わるうとしている。

「“東方明珠塔”、テレビ塔ね。それに“金茂大厦”は上海で一番高いビルだ。八百半もあるよ」

「あつ、わしも知ってる。団子を串刺しにしたみたいなたね。ジンマオ、なんとか、つてのは？」

「ジン・マオ・ダーシャ（金茂大厦）。百階近い高さで、四十階から上はホテルになっている」

「あつ、運転手さん。悪いけど、東方明珠塔で停めてくれる」

「オツケー！」

「はははっ…、オツケーだって」

「あがれんのかあ？」

「もちろん昇れるよ。高速エレベーターで、アッっという間さ」

「せっかくだから昇ってみるか」

「……………」

「どっち？」

「両方」

「りよ、両方つて…、唯じゃないよ、施川君」

「なにつ、唯じゃないのか。でも、一万円は取らねえだろう」

「……………」

「そらまあ、確かに。金茂大厦が五十元だったかな。テレビ塔は一番上まで行くと、百五十元ぐらいだったと思う。あれ、邑中、静かなだ」

タクシーは“延安トンネル”を潜り抜け、金茂大厦の前をグルリと迂回して、“世紀大道”を直進、やがて東方明珠塔の前に停車した。

二、テレビ塔“東方明珠塔”

1

「二十五元か。邑ちゃん払っておいて」

邑中が施川の求めに応じて、三十元を差し出した。

「はいよ、三十元。釣りはいいわ。領収書を頂戴ね」

「サンキュー！ ほい、領収書。バイバイ」

「ははははっ…、珍しく、明るい運転手だったな」

「熊ちゃん、領収書はいらねえな。わしが貰っておく。……………でっ、

でかい」

テレビ塔を見上げた施川は、そのスケールの大きさに驚きの表情を見せた。

三本足で支えられたその塔は、丸い球体が三つ串刺しにされたような形をしている。

「へーえ、下から見上げると、ものすごいな。なあ、熊……、ん？」  
施川が邑中の顔を覗き込んだ。

「おい、どうした青い顔して……。ははあくん、もしかして、オマエさん怖いんだろう」

「えっ、なんだ邑中、高所恐怖症か」

「ふ、ふんなことねえよお」

声が尻すぼみだ。

「そうか、じゃあ行こうか」

「う、うーん……」

「保険でも入るかあ」

「あんのかあ？」

「けけけっ……、あるわけねえだろう。あっても熊は入れねえよ」

「施川、あんまりからかうなよ」

「わしはハゲ、いけねえ……自分でゆっちゃまった。励まそうと」

邑中がクスツ……と笑った。

「ふふっ……、ほら、球体が三つあるだろう。あの一番上まで行ける

よ」

「……………」

無言で俯く邑中。

「ほれ、行こう。料金は？」

施川が邑中の肩を小突いた。

「てっぺんまで行くと、百五十元だ。付属の施設にも入れるそうだ

よ」

「ど、どしても、行くんかあ……」

「ここで待っていてもいいぞ。ほれ、いい加減に覚悟を決めろよ。

はい、三百元。ところで、付属施設ってなんだ？」

「博物館とか……」  
「それはどつちでもいいや。とにかく行くつよ。ん、なんだこのおじさんは？」  
「写真を撮らないかってさ」  
「写真、いらねえよ。峪口、カメラあるだろう」  
塔の前の石段を上って、エレベーター乗場に着くと、土曜日の所為か順番待ちの客が多かった。  
二十分ほど待たされてエレベーターに乗り込んだ。  
途中で乗り継ぎをして二段目の球体に到着、三百五十メートルほどの高さだそうだ。

2

「この上まで行くんだろう、わしらは」  
「そうだけど、おかしいな……。エレベーターが封鎖されているんだ」  
そこでは数名の客が、小姐（女性従業員）となにやら揉めている。  
「え、ええー。施川、上に行けないんだって」  
「なんでやねん。金は払ったぞ」  
「ふんふん……、エレベーターの……、うんうん」  
峪口は小姐の説明を訊いた。  
「なになに、なんだって？」  
「施川、行けなくて良かったかもな」  
「なんでえ？」  
「エレベーターの通路っていうのかな、それが歪んでいて、箱が途中で引つかかっているそうだ」  
「箱の中に客はいるのか？」  
「だろうね、お気の毒に……」  
「ひょえーッ！ そらよかった。さすがは中国だな」  
「うんだあ、俺あ、ここで十分だあ。よがったなあ、俺あたちが乗

つてなくてよお」

「うんうん……。無事に帰ればなによりだ。それにしても、見晴らしが悪いいなあ。霧か霞か、ぼんやり霞んでいて、まるで熊の頭の中のような」

「今日は、これでも一応晴れんだけどね。俺がよくメールに書く“上海晴れ”だよ」

上海ではほとんど青空が見られない。

黄砂か、はたまた異常な建築ラッシュの影響か……。公害の垂れ流し、公害大国、中国である。

「納得、納得」

3

「ところで、料金の払い戻しはあるのかな？」

「ない」

「施川あゝ、命が助かっただけでもよかんべえよお」

「さすがはお大尽さま、諦めがいいな。代わりに金を返してくれ」

「あつ、エロハゲ、オメエは銭払ってねえべ」

「あらあゝ、ばれちゃったあゝ」

「銭つ子けえせ、このおゝ」

「エロハゲで名誉毀損、だから帳消しじゃ。それにしても、景色がよく見えねえ。ポーッと霞んでいてお。邑の面みてえに空気が汚ねえんだなあ、上海は」

三人は球体の中をグルリとひと廻りして、元の場所に戻っていた。

「なにしているんだ、あの連中は？」

施川が球体の真ん中の人込みに向かった。

そこではグルツと柵を取り囲むようにして、観光客が下の方を覗き込み嬌声を上げている。

「なんだなんだ。はい、ごめんなさいよ」

施川が人込みを掻き分け、柵にたどり着くと、

「お、おーッ！ す、すんげえーッ！ 峪口いーッ！ 邑あーッ！  
は、速く来てみるッ！ 速く来いッ！」

「ななな、なんだべえーッ！」

と、邑中が慌てて飛んで行った。

「ひゃーッ！ おっ、おっかねえーッ！」

施川の隣で下を覗き見た邑中が嬌声を上げて、後退りした。

「ダ、駄目だ、俺あ駄目だあ。ああ、めまいがする。吸い込まれる  
みてえだあ」

そこは地上から吹き抜けになっていて、まるで火山の噴火口のように  
真っ赤な口を開けていた。

峪口は二人のところへゆつくりと近づいて行った。

「なんだオメエは知ってたのか」

「それはまあ、俺はなんども来ているからな」

「それにしても熊ちゃんよ、おまえさんの怖がり方は半端じゃねえ  
な」

施川が呆れたように言った。

「オメエらはおっかねえのかあ？」

「確かに覗けば足も竦む。でも、邑ちゃんの怖がり方は異常だ。な  
にか穴にトラウマがあるンでないの？」

「俺あ餓鬼るとき、芋穴で死にはぐったって、婆様から聞いたこと  
ある」

「芋穴？」

「うんだあ、さつま芋を保存しておく穴だあ。峪口い、オメエんと  
こにもあつたべえ？」

「あつたあつた。俺も爺様に言われたこがある。芋穴へはいきなり  
入るもんじゃねえ、て」

「芋だけに、ガスでも出るのか」

「施川あ、オメエもバカじゃねえなあ」

「うっせえッ！ もう下りようか、峪口い……」

「そうだな。どうする、あっちのビル（金茂ビル）も昇ってみるか

い？」

「否、もういいよ。同じようなモンだろう。なあ、エロ熊？」

「うんだ、もう要んねえ」

「まあね。見える景色はほとんど同じだ」

「だろう。じゃあいいよ。なあ、エロ豚？」

「うんだあ。どっちかにしてくんろ」

エレベーターは混んでいて、三十分ほど待たされた。

三、「長江」の上流が“揚子江”？

1

「ところで、下を流れている汚い河は“揚子江”？」

「はっははは……、俺も初めて見たとき、同じ質問をしたよ」

「違うのか？」

「イエース！ “ファン・ブー・ジャン黄浦江”チャン・ジャン”チャン・ジャン”と違って、長江の支流だ。長江のスケー

ルはこんなもんじゃないってさ」

「なんだあ、そのチャン・ジャンてのは……？」

「上海人は揚子江とは呼ばないよ。長江、日本読みなら“ちょうこう”だ。その長江の上流の一部を揚子江と呼ぶらしい」

「ジャン、ジャン。ふうーん……」

「邑、チャン・ジャンじゃ」

「へい、チャンチャン、と」

「長江は上海から近いんだけど、機会がなくて、俺もまだ飛行機からしか見たことがないんだ。河口では、向こう岸が見えないそうだ」

「利根川よりでけえか？」

「はへっ、邑ちゃん、長江の中ほどに東西八十キロ、南北十五キロという“崇明島”があつて、何千人も住んでいるんだ。対岸までは三、四十キロはあるんじゃないのかな」

「日本人の持つ川のイメージとは違うわけね」

「そうそう。俺たちは精々利根川に江戸川なものな。あれでもでかいと思ってるけど、中国人から見たら掘りぐらいのものか」

「中国はなんでもスケールが違うね。白髪三千丈か。で、人間はどうなの？」

「あんだあ？」

「君のチン玉袋と同じ、八畳敷き」

「あんだあ？」

「たあん、たあん、狸のチン玉は、かゝぜもないのにぶくらぶら」

「あんだあ？ 狸のキンタマがどしたんだあ？」

「はっははは……、人間ねえ……。人間は、まあ、いろいろさ。特に最近は金、金、金。元々私有財産てのが認められてなかったわけじゃない。それが一気に開放されたものだから、その執念たるや日本人の比じゃないよ」

「共産主義だかんな」

「十二億の人口を抱えて、急激な変化を遂げているわけだから、歪みもでるだろう」

「中国の発展って、今ものすごいじゃない。政治の中心はともかく、経済の中心は四十代の人たちなんだ」

「うん。確かに、経営者が若いよね」

「それはね。ちゃんとした理由があるのさ」

「どんな？」

2

「日本では九十年代を失われた十年って言うだろう。中国にも、六十年代の半ばから七十年代前半にかけて失われた十年があるのさ」

「……………」

「ほら、俺たちの中学生のころかな。“文化大革命”ってあったじ

やない」

「あつたあつた。“毛沢東”さんに“紅衛兵”か」

「うんだ。俺もテレビニュースで視た記憶あんど。人民服着て、みんなで壁新聞読んでいたべえ」

「そう、それと首から看板ぶら提げられて、引き回されている人の写真……」

「そうそう。あの時代は、教育や文化を全面否定したわけで、当然教育も滞った。だから、この間にまともな教育を受けた者はあまりいないんだ。それが、今の五十代の人たちなんだよ」

「そうか、中国は一気に国際化されて、そういった人たちでは対応ができなくなってしまった。それで世代交代が急激に進んだってことかな」

「そうゆうこと。それで一気にこの世代が社会の中核から抜けてしまったんだ」

「それも犠牲者だんべえ。冷てえんだよなあ、国は」  
現在、上海の大学進学率は八十パーセントを超えていると聞いている。

ご多分に漏れず、猫も杓子も大学、大学といった状況で、塾が大繁盛している。

しかし、今の四十代の人たちの時代には、わずか一、二割の者にしか大学進学が許されなかったそうだ。

エリートだけが大学へ進学できたわけで、その分優秀な逸材が四十代に多いということである。

そのように考えてみると、現在の中国の発展振りにも納得が行く。それに比べて、“小皇帝”と揶揄される現在の十代、二十代の連中には、正直あまり怖さを感じない。

小皇帝と揶揄される世代は、両親と両方の祖父母を含めた六人によって、それこそ蝶よ花よと、甘やかされて育った子供たちで、三、四十代の人たちから見ても、まさに宇宙人に思えるそうだ。

「十一時半か、どうする、なにか食べる？」

「そういえば、わしは朝飯を食ってなかったな。どおりで腹が減ったはずだ。どっかうまい店知ってる？」

「うまい店ねえ……？ 確か金茂の四十五階だったな、本格的なイタリアンの店があるよ。一度、梨田総経理に連れて行ってもらったことがある」

「高<sup>た</sup>けえだんべえ？」

「四十五階だからな、そりゃ高いわな」

「そうじゃねえよお。高<sup>た</sup>けえべって訊いてんだよお」

「だから高いってゆってるべえよお。よっしゃーッ！ 行ってみるかあ。偶に贅沢しても怒られねえだろう」

「誰に？」

「かあちゃんに、……言わせるなっ、て」

「予約なしだが、とにかく行ってみよう」

「エロ河童、頼むわ」

#### 四、グランドハイアット上海

1

「ひいー、すんげえビルだあ」

「おい、邑ちゃん、オドオドするなよ」

「さすがのわしもビル……」

邑中と施川が小さくなった。

「食事をしたインだけど（標準語）」

「はい、ご希望はございますか？」

「確か、五十五階だったと思うけど、イタリア料理の店があるでしょっ」

「はい、五十六階にイタリア料理の店『トラットリア『クッチーナ』がございます」

金茂大廈は八十八階建てのインテリジェントビルで、五十三階から八十七階までがホテル、その下はオフィスになっている。まさに雲の上のホテルである。

ホテルは五百五十五室を有する“上海金茂君悦大酒店（グランドハイアット上海）”である。

また、地上三百四十一メートルの八十八階は展望台として、一般に開放されている。

「俺あ、こんな場所あんまし好きじゃねえ。小っ恥ずかしい」

「お大尽様がなんば言うつとね。なんなら一万円札でも顔に貼り付けておけ」

「そうすべえ」

「あつ、よせ、馬鹿。それこそ小っ恥ずかしい」

「ヴァカ、やるわけねえべよ」

「オマエさんじゃ、やり兼ねねえ」

「あんれえー、峪口までそんなことゆうかあ」

「熊、恥ずかしいから顔隠せ」

「オメエはハゲ隠せ」

「ほれ、ウダウダ言うつてねえで、真っ直ぐ行け。エレベーターがあるだろう」

「あれ、五十五階までしかねえぞ」

「えつ、そんなはずは……、ないだろう？ 直行便で八十八階の展望台へ行ったことがあるもの。もっとも乗った場所は違うけど……」

「すみません。五十六階へ行くのには？（標準語）」

「五十五階で降りて、お乗り換えください（英語）」

「おつ、英語できたか」

「英語なら熊が得意だ。ほれ、話してみろよ」

「やめるよ。……おつぱずかしい」

急に小さくなった。

「残念だ。わしのフランス語では役にたたん」

「けへつ……」

「早いな。もう着いた」

「あんれ、乗り換えはどこだ？」

「こちらでございます」

「えッ！ ああ、びっくらこいた」

エレベーターの前には案内の女性が立っていて、乗り換えるエレベーターまで導いてくれる。

「何階でございますか？」

すべて英語だ。

「綺麗なねえちゃん、中国人じゃねえのか？」

邑中が峪口の耳元で囁いた。

「中国人だと思うよ」

「ふんじゃ、なして英語なんだあ？」

「日系以外的高级ホテルは、大概英語が公用語だ」

「ふんとかあ」

「熊、恥ずかしいから、あんまり喋るな。おねえさんありがとう」

「ユア・ウエルカムだと」

「ほら、二人とも早く乗れ。日本の恥じゃ」

2

「おっ、もう着いた」

三人は恐る恐るエレベーターから顔を出し、外の様子を窺う。

「痛てっ…、押すな」

全面ガラス張りの壁面から、下界百八十度外の風景が見える。

「ほーう、夜なら夜景がすごいだろうな」

窓に沿ってバーがあり、白人が何人が寛いでいた。

真ん中にホテルのフロント、何人かがチェック・インの手続きをしている。

「げ、げえこく（外国）みてえだな」

「げえこくじゃ、ここは。峪口い、一泊いくらぐれえするんだ？」

「スイートは滅茶苦茶高いらしいけど、普通の部屋は四、五万じゃないのかな……」

「元、か？」

「ま、まさかあ……。おっ、ここだ“クッチーナ”」

「いらっしやいませ。お食事でございますか？」

洒落た制服に身を包んだ、如何にもキャリアウーマンといった感じの女性が三人を出迎えた。

「はい、席は空いていますか？」

英語で問われたが、峪口は中国語で応じた。

「ご予約は……」

それでもその女性は英語で対応する。

「いいえ、駄目ですか？」

「少々お待ちください」

と、予約表に目を落とす。

「三名様ですね。はい、ございます」

「なんかチグハグだな。英語と中国語でよあ……」

「俺たち、アメリカ人に見えるんだんべえ」

「見えない、見えない」

「どう見ても、ペットの熊と田舎者モンの運転手を連れた日本の紳士、つまり私だ」

「なあーんが、わた“くし”だあ……。オメエは“櫛”は要らめえ」

「じゃかましい！」

「邑ちゃん、冴えているう。彼女が、“二匹の獣を連れて大変ですねえ”、と言っている。やっぱり見る人が見るとわかるんだわ」

「あんだあ〜」

「おかしい、どう見ても紳士はわしじゃ……。ははあん、察するところ、彼女はまだ男を知らねえな」

「俺あが教えてやるべえ」

「おっ、本性を表しやがったな、エロ豚」

「よせ、使いモンにならなくなる。くくくくつ……」

「エ口河童も本性を出したか。やはり本物の紳士は、わしだけのよ  
うじゃな。ふえっふえふえ…」

五、“トラットリア『クツチーナ』”

1

運良く窓側の席が空いていた。

「おい、邑ちゃん、そっち側へ座れ。外の景色がよく見えるだろう」

「うんにゃあ、俺あはこっちの方がええ」

「くくくく…、おつかねえンだろう」

「うんだあ、足元がスウスウして落ち着かねえんだ」

「そうか。じゃあ、しょうがねえな」

「峪口い、馬鹿にされねえように、なんか高めえモン頼め。銭つ子  
は、俺あがいくらでも出す」

邑中がそつと囁いた。

「おつ、悪りいな、熊ちゃん」

「あんでえ…、峪口の方だけだあ」

「あららあ…」

「先ずビールだな。それと前菜の盛り合わせ、ここの前菜はなか  
かのモンだよ。量もたっぷりだしね」

「峪口、オメエに任せっから、いっぺえ頼め。日本人の恥になんね  
えようによあ」

「すごいことになったな。日本人の恥、だとよ」

「まったく、前時代の人間、じゃなかった。熊だ」

「本人がああ言ってるだから、峪口、高いものを注文しろよ」

「うんだ、笑われねえように高めえモン頼め」

「おまえなあ…、誰が笑うんだよ」

「いいじゃねえか、ワインのいいやつ頼めよ」

「オメエには“赤玉”でよかんべえ」  
「おつ、古いねえ 邑ちゃん。赤玉ポートワインか」  
「うんだあ。それと蜂ハニーワインだんべえ」  
「へいへい、どちらもおいしそうですなえ……」  
「俺あは甘口が好きだかな」  
「そんなモン、ここにあるわけねえだろう！　なあ、峪口い……」  
「ははっ……、ないと思うよあ」  
「施川あ……、ねえ けら、外へ行つて、買って来い」  
「どこでじゃ」  
「ピザは生地が薄いやつがいいだろう」  
「まあ、ちよつと気になるが、薄いやつでいいよ」  
「へへへへっ……、薄いやつ、薄いやつ、毛のうすーいやつ、と。へへへっ……」  
「しつこいやつ ちゃん」  
「それと……、スパゲティーは二人前でいいな。三人でわけて食おう」  
「駄目だよあ、峪口い……。みつともねえから三人分頼めよあ」  
「おつ、さすがはお大尽様、太っ腹。メタボツ腹」  
「そんなに食い切れねえぞ」  
「いいべえよあ、残せばいいべよあ。なんなら、施川の明日の餌にすればよかんべえよあ」  
「な、なんじゃと」  
「まあ、いいけどね。じゃあ、なにがいい？」  
「俺あナポリタン、赤いソーセージのへえたやつ」  
「赤いソーセージ？」  
「タコみたいに切ったやつか？」  
「うんだあ」  
「あのなあ、熊。田舎の喫茶店じゃねえんだから、そんなのあるわけねえだろう」

「海鮮のトマト味を頼んだから、もう一つは“カルボナーラ”でどうだ？」

「なんだあ、それ？」

「熱々の麺に卵とチーズを絡めたやつだ。わしは大蒜をうんと効かせてほしいな」

「ふんとか、峪口い？ エロハゲのゆうことは、信用なんねえ」

「じゃかましい、エロ豚。わしがいつ嘘をついた」

「じえんぶ」

「うん、珍しく正しい。最後は“マルゲリータ”でいいか？」

「マル…、ハゲ…」

「熊ッ！ わしにどうしても喧嘩売りたいわけね」

「はっははは…、ほらほらビールがきたぞ。乾杯をしよう」

二時間後、三人でビールを数杯とワインを一本空け、ほろ酔い気分でレストランを後にした。

「思ったより安かったな。三人で千八百元ということは、大体三万円か。ほら施川、六百元ちょうだい」

「いいって、俺あが出すつてばあ」

「おっ、サンチュー」

「邑中、いいよあ。ここは割り勘で行こうよ。なあ、施川？」

「ああ、勿の論だよ。へい、六百元。ふーん、ワインが八百元かあ…、失敗したなあ。二百間のにしとけばよかった」

「二百元のなんてねえべよ」

「確かに、一番安いものでも四百元だった。いつも思うんだけど、ああゆうとき、どうしても中間の価格帯から選らんじゃうんだよなあ」

「わしもそうだ。見栄張つてなあ。見栄なんか張つてもしょうがないのによあ。わしら庶民の性かな」

「価格設定もそのあたりを計算しているんだろう」

「うんだから、ゆったべえ。一番高けえの頼めつて」  
「わかりやした親分、次はそうさせていただきやす」  
「わかればええ」

三人はブツブツと言い合いながら、“黄浦江”の岸へ向かって歩き出した。

「ほら施川あ、見てみな、あの地球儀のついた建物。先日サミットをやったところだ」

「へーえ、ここへ純ちゃんやプーちゃんも来たのか。うーっ、寒びいーッ！」

と施川は襟をすぼめた。

黄浦江の岸に沿って公園がある。  
対岸は外灘だ。

「あの時計のビルが“海関大楼（貿易センター）”、あっちのグリーンの三角屋根は“和平飯店”だ」

「ほおー、まるでヨーロッパだね、この景色は……。あっ、わし欧州へ一回行ったことがあるぞ。邑ちゃんにゆわれる前に言っておくけど」

「俺はまだ行ったことがない。邑中に言われる前に……。あっはははは……」

「俺あ三回行った」

「へへーっ。お大尽様、今度連れていってくだせえ」

「俺あのゆうこと利けば、考考げえてやってもええ」

「なんだあ、ケツでも貸せってかあ」

「オメエの汚ったねえケツメド借りてどうすんだ」

「汚ったねえは余計じゃ。誰が貸すか。ぶっといのをぶち込まれたら、使い物にならなくなっちまうわ」

「おまえら、なんちゆう会話をしているんだ」

「面目ねえ……。この変態熊が余計なことを言うモンだから、つい話を合わせちまった」

## 第八章 南京路（ナン・ジン・ルー）

一、上海のマドンナ

1

周りでは観光客たちが写真を撮りまくっている。

ほんとうに中国人は写真が好きで、撮る前には恥ずかしげもなく、一々ポーズを決める。

「施川、俺たちも撮ろうか。あの娘に頼んでみるよ」

近くにいたポニーテールの女性に写真撮影を頼むと、快く応じてくれた。

邑中の希望を入れて、三人一緒ではなく二人ずつ写真に納まった。

「そ、それにしても、か、可愛い娘だな。一緒に写りたいな」

施川は興奮すると少しどもる癖がある。

「よしよし、どうどうどう、興奮するな。施川さんのためだ、頼んでみるか。ほれ、涎を拭いとけ」

「あいよ」

「止めるよお〜。いいよお〜」

と、嫌がる邑中を無視して峪口が頼むと、その女性は快諾をくれた。

「施川あー、喜べ。写真もオツケー、南京路の案内もしてくれるってさあ」

「ふ、ふんとか？」

嫌がっていた邑中が一番に反応した。

「けっ、このエロ豚が……」

「あちらも三人だよ。全員日本語ができるそうだ」

「オーケイ、オーケイ、わしはあの娘じゃ。邑ちゃんも頑張れ、同じ体型のがいるだろう」

邑中は“うん”と小さく頷き俯いた。

三人は“華東師範大学”の同級生で、全員が日本語の専攻ということだ。

「師範大学ってことは、先生の卵ですか？」

「いいえ。別に、先生にならなきゃいけないというわけじゃないんです」

写真を撮ってくれた“王英”<sup>ワンイン</sup>は滑らかな日本語を話したが、あとの二人はぎこちなかった。

「にっ、日本語が、お、お上手ですね。峪口はあっちへ行っていていいよ」

「はいはい。さて、そろそろ“外灘”側に行こうか」

「よし、タクシー代はわしが持つ」

「おっ、気前がいいね。えっ……」

王英の話によると、つい最近黄浦江の下にトンネルができたという。

遊園地の乗り物みたいなものだが、とても綺麗と評判なので、一度は乗ってみようと、三人で来たそうだった。

「へーえ、そんなのがあるんだ。じゃあ、それに乗って行こうよ」

「おうおう、エロハゲが張り切っちゃってよお」

毘中が呟いた。

「はい、なにかおっしゃいましたか？」

「うんにゃ、な、なんも……」

「直ぐそこから乗れるそうだし」

「よっしゃーッ！ 熊、行くぞッ！」

「施川く〜ん、料金、頼むよお」

「あらら……」

「片道三十元だから、六人で百八十元だ。施川さんはありがとうございますぞいます」

峪口が言つと、三人も“ありがとうございます”と声を揃えた。

「あっ、いやいや、どういたしました」

施川はテレながら応じた。

「施川くん、あんがと。俺あ、初めての経験だあ、オメエに奢ってもらうのはよお」

「あ、うん、オメエさんもかあ。……なあ、割り勘にしねえかあ」  
乗車券売場からエスカレーターで地下に五十メートルほど下りると乗場がある。

ここではゴンドラのような乗物が、数分おきに発着を繰り返している。

十人乗りだが他に客はおらず、六人だけで出発した。  
トンネル内ではレーザー光線が激しく点滅している。  
乗車時間はわずか五分、子供騙しの代物だった。

「こんで終わりかあ。はあゝ……」  
邑中の溜息が全てを物語っていた。

2

六人は外灘の岸边から、先ほどまでいた浦東側の高層ビル群を眺め、互いに数枚の写真を撮り合った。

黄浦江には常に船が行き交っていて、観光船に交じり大型タンカーも通り抜けて行く。

「そろそろ“南京路”に行きましようか？」  
王英が促した。

「行きましよう、英ちゃん。二人だけで」

「えっ、まあ、施川さんたら……」

「すいませんねえ、王さん。まあ、本人も人畜無害だと言ってますから」

「じんちく……、なんですか？」

「人畜無害、そうですねえ……まあ、口ほどではない、といった意味でしょうか。放し飼いにしても、他人に噛みつきたりしないということですよ」

「まーあ、うふふふっ……、放し飼いですか」

「王さん、嘘、嘘。峪口はヤキモチを焼いているんですよ、僕たちに」

「なんが僕たちだんべえ。僕って面かよあ、ハゲ茶瓶が……」

「じゃかましい、エロ豚」

「ヤキモチ？ ハゲチャビン？ エロブタ、ですか？ みなさんの言葉は難しくってわかりませんわ」

「王さん、楊さん、張さん。さあ行きましょう、こんな相手にしないで」

「こつ、こんなの。ねっ、ねっ、失礼な男でしょう、峪口って」

「うんだあ、こんなので十分だあ」

「ほほほほっ……。でも、峪口さんと毘中さんのお気持ちはよくわかりますわ」

「またあゝ、英ちゃんまで」

「ヒデちゃん、って、私のことですか？」

「この男はね、女性の名前を勝手に変えて呼ぶですよ」

「そうなんですか。でも、かわいい感じがしますね」

「ほーら、峪口いゝ。ねえ、英ちゃん」

「はゝい、こちらです。そちらは“北京路”、南京路はこつちですよ」

## 二、南京路歩行街（歩行者天国）

1

六人は地下道を通り抜け、和平飯店の直ぐ傍に出た。

「ここが和平飯店。ジャズバーで有名なホテルです。日本でもこのホテルは有名だそうですけど、施川さんはご存知でした？」

「えっ、ええ、も、もちろん、ご存じでした」

「まあ、おもしろい方」

「でえへへへっ…、嘘こけえ」

「じゃーまし、エロ豚雄くんは黙ってなさい。よく、旅行社のパンフレットに出ています。それにしても古いホテルですねえ」

「ダイエーの中内さんはが上海に来ると、必ずここに泊まったそうだ」

「へーえ、中内さんがねえ…。ダイエーも経営がおかしくなっちゃったからなあ。栄耀栄華は長く続かないものだなあ、豚雄くん」

「豚でなくて、馬だんべえ。“人間万事塞翁が馬”、ちってなあ…。わかつかオメエ？」

「おっ、おおおお、おでれえーたのなんのって、熊、熱があるんじゃないか」

「その故事は中国の古い書物“淮南子”に出ているものです。日本人も使いますか？」

「うんだ。この馬鹿は知らねえと思うけど、普通の日本人は使う。“禍福糾える縄の如し”ともゆうな」

「ひよえーっ、おい、峪口いっ、熊狂っちゃったぞ」  
「どれどれ……」

峪口が邑中のオデコに手を当てた。

「あちツ！ これは間違いない、知恵熱だな」

「英ちゃん、どっか病院紹介してちょうだい」

「うふふふっ…、動物病院でしたらご紹介しますわ」

「おっ、言いますねえ。施川も一緒に頼みます」

「はい、当然です」

「あっ、きついことを、サラッとゆってくれますね。なあ、エロ豚」

「……エロブタって、どうゆう意味ですか？ それとこの方のお名前はどれが正しいのですか？」

と王英が首を捻った。

「この方ちゆうほどのモンではない。この動物とゆった方が正しい。エロが苗字で名前が豚、場合によっては熊じゃ。苗字は漢字で邑中と書くが、読みはエロでいいのだ」

「……………?」

この辺りは古い老上海の面影を留めているが、道路は狭くいつも渋滞していた。また、歩道も狭く観光客が多いので非常に歩きにくい。「ほら、あそこまで行けば歩行者天国になりますよ」

と、王英が五百メートルほど先の信号機を指差した。

「急ぐべえ」

“河南南路”との交差点から先が“南京路步行街（歩行者天国）”になっている。

全長千二百メートル、世界で一番長いというのが上海っ子の自慢である。

南京路は“西藏中路”を境に東が南京東路、西が南京西路にわかれる。

したがって歩行者天国は、南京東路の一部を指す。

2

「ほう、すごい人出だな。それとこの派手な看板はネオンになっているのか。夜は綺麗だろうな。まるで英ちゃんみたいに……………」

「また、悪い病気が始まったべえ」

「ほれ施川、お猿の電車が来るぞ。でれつとすると轆かれるぞ」

「なんでやねん。ここは歩行者天国じゃねえのかあ」

「一回轆かれておっちんでみたらよかんべえ。馬鹿は死ななきゃ治らねえ、つてゆうべえ」

「ふふふつ…、中国人は商魂が逞しいんですよ」

南京東路は上海観光の数少ない目玉のひとつで、地方のおのぼりさんは言うに及ばず、世界中からやって来る観光客で一年中溢れかえっている。

「これはまた、なんとも派手な建物だ、金ぴかだよ。いかにも中国人が好みそうな。 “ソヒイテル” ……、確かフランスのホテルだよな」

「あら、施川さんて、意外とお詳しいんですね。私はこの裏の“福州路”の生まれなんです。このホテルができたときは中学生で、ほんとうに驚きました」

「英ちゃん、意外に、はないでしょう」

「あら、ごめんなさい。さすがに、でしたわね」

「そう、それならいい。英ちゃん、アイスクリームでも食べますか？」

ソフィテルの一階には、イタリアの“ジェラート”が出店していた。施川さん、ここは高いですよ」

「任つかせなさい。なあ峪口い……割り勘、なっ」

「へいへい、それじゃ少し休みますか？」

「楊さん、張さん。施川さんがご馳走してくれるそうですよ」

「へへへっ……、任つかせなさい」

濃厚な味のアイスクリームに舌鼓を打ちながら、一行は一時間ほど無駄話に花を咲かせた。

表に出た施川が、

「四百五十元か、確かに高いな」

と、呟いた。

それを聞いた三人は声を揃えて“吃好した（ご馳走さまでした）”と頭を下げた。

「それでは私たち、ここで失礼します」

「あらあー、帰っちゃうのお……」

「ええ、これからお洋服を買いに行きますの。謝謝、再見！ ありがとうございます」

三人は手を振り振り、アホ面三人衆のもとから去って行った。

「あつ、ああ、あつ……」

未練がましい施川に邑中がひと言。

「諦めろ」

「じゃかましい！ あゝあ、行っちゃったよ。それにしても、英ちゃんはお可愛かったなあ……。峪口い、電話番号は訊いたか？」

「もちろん」

「ほつ、ほんとか？ ムツツリスケベ」

「エ口河童」

「嘘だよ。嘘、嘘」

「またあー、ほんとは訊いただろう。なんか、さっきゴチャゴチャやってたモンなあ。奥さんにはらすぞ。このおー、このおー」

「ははははっ…、よ、よせ、くすぐりたいよ。ほんとに訊いてないつて」

「俺あも、ほれほれ」

「あつ、よせ。くすぐつてえ。くへつ、くへつ…」

歩行者天国の真ん中で戯れる三人、他の観光客たちが怪訝な顔で避けて行く。

### 三、足ツボマッサージ

1

「さあ〜て、三人になっちゃったけど、どうするか。周さんとの約束までには、まだ時間があるしなあ…」

「そうか、周さんがいたんだ。美人ってゆったよな。こんな顔のが来たら、わしは帰るからな」

施川は子供がやるように両手で顔を崩して見せた。

「ハゲ茶瓶のお客さま、お帰りいー！」

「じゃあましいい、絞め殺すぞ」

「ああ、おっかねえ…」

「そうだそうだ。いいよ、帰っても。なあ、邑中？」

「うんだうんだ。バイバイ」

「あつ、こいつ」

「心配だから、わしも行くわ、へへへっ…。それに、峪口の奥さん

から見張るように頼まれし、うん」  
「へいへい。マッサージにでも行くか？ 彭さんから紹介してもらった店が、確かこの近くだから」  
「峪口は昔っから好きだからな、マッサージ」  
「助平！」  
「ス、スケベエ……。まったく、毘中にかかっちゃ敵わねえな。なにが嬉しいって、上海に来て、マッサージぐらい嬉しいものはないね。どう、行く？」  
「しょうがねえー、暇だから付き合っただけや。熊、行くぞ」  
「俺あ要んねえ……。俺あ、下着とつけえてねえもん」  
「こらエロデブ、なにを考えているンじゃ」  
「熊だのデブだのって、どれかひとつにしてくんど」  
「そうか、じゃあエロ・デブ・熊・豚、行くぞ」  
「はあははは……。確か、あのビルの六階だったな」  
峪口の記憶に間違いなく、三人がエレベーターを降りると、直ぐに小姐（女性従業員）が出迎えた。  
受付でサービス内容と料金を確認する。  
「周さんとは六時の待ち合わせだから、二時間コースがちょうどいいな。“足ツボ”と“全身”マッサージにしようか、どう？」  
「足ツボか、痛いんだよなあ」  
「それはなあ施川、身体に悪いところがある証拠だ。俺なんか、ぜんぜん平気なもの」  
「俺あくすぐつてえのは駄目だあ」  
「なんだ、チンポコが硬くなっちまうのかあ」  
「えっへへへ……。んだあ。施川、オメエモかあ？」  
「わしはその程度じゃ、硬くなんぞなんねえ」  
「ええなあ。俺あ小ツ恥ずかしくつてよあ」  
「問題ないよ」

部屋に通された三人は専用の椅子に身体を横たえた。

「ふーう、疲れたあ」

「俺あも。ああ、気持ちええなあ」

「ここへ座ると、ホツとするよ」

間もなく、薬草湯の入った木桶を抱えて、三人の小姐が部屋に入つて来た。

「おつ、可愛い娘じゃん。わしはそっちの娘にする。いいだろう？」

「いいよ。邑中はどの娘がいい？」

「うん、俺あ真ん中の、あの娘……」

邑中が顔を赤らめ恥ずかしそうに応えた。

「あつ、ちちちちーッ！」

と、施川が悲鳴を上げた。

どうやら、いきなり木桶に足を突っ込んだようだ。

三人の小姐も遠慮気味にクスクス笑っている。

峪口も足を湯につけてみた。

確かに熱い。

「水を入れて」

「俺あにも」

「なんだよお、ずるいなあ、オマエら。わしにも水を入れてくれよ

お。ほら、真つ赤だよ、足が……」

「ふんとにオメエさんは、なにをやっても落ち着きがねえなあ」

「じゃかましい！ わしの持って生まれた性分じゃ。文句あつか！」

「ねえ……、 “君子危うきに近寄らず”、だんべえ」

「あにつ、誰が君子じゃ……」

三人は、足ツボマツサージで激痛にのたうち回り、

「ぎゃーッ！ うおーッ！」

「痛で痛で、痛でえーッ！」

「堪忍してくんろおーッ！」

などと悲鳴を上げ続け、

また全身マツサージでは、

「あつはははは……、くすぐつてえーッ！」

「あへっ、ひへえー、ぐえっ、ぷへへっ……」

「きゃきゃきゃ、けへっ、ふへっ、ぷへっ」

と笑い転げ回り、暫くしてようやく眠りについた。

「はい、終わりましたよ」

と小姐に肩を揺すられ、峪口は目を覚ました。

施川も同時に目覚めたようだ。

「あゝあ、気持ちよかった。峪口の躰に釣られてわしも寝ちゃったよ。それにしても峪口の躰はすごいな」

「ははははっ……、ときどき自分の躰で目が醒めることもある。特に酒が入っているとすごいみたいだ」

「そうそう、わしも女房によくゆわれる。それで最近は家庭内別居じゃ。こら、デブ熊、起きろッ！　いつまで寝てるンじゃあーッ！」

小姐が優しく揺すつても起きないので、椅子の傍らに立った施川が、  
「わあーッ！　起きろーッ！　こらあーッ！」

と耳元で大声を上げた。

「ひゃーッ！」

と叫んだ邑中が椅子から転げ落ちると、小姐は驚いて飛び退いた。

「あーあ、びつくらこいたあ」

と、寝ぼけ眼で腰を擦りさすり邑中が起き上がった。

「おい、大丈夫か？」

「うん？　なんがあ？」

「ああ、いい、なんでもねえ。さすがは野生動物だ」

「あんだあ？」

## 第九章 大閘蟹（ドウ・ザ・ハア）って？

### 一、王寶和

1

三人がマツサージを終えて表に出ると、南京路はさきほどよりも人が増えていた。

「それにしても、ほんとうに人が多いねえ。夕方になって益々増えてきたようだ。日本とは桁が違うわ」

「俺あ十年分ぐれえの人間を見たなあ」

「ああ、うちの会社の連中も、東京から上海に来ると人中りするって言うもの」

上海は人、人、人の洪水、まあ、ご覧になった経験のある方は、  
「隅田川花火大会」の混雑振りを思い出してくれればよい。

それが毎日のことなのだから恐れ入る。

「ところで、周さんとはどこで会うの？」

「あれっ、俺、言わなかった？ “上海蟹”の名店、“王寶和”  
直ぐ近くだ」

「ワン、バオ、フウ？ 上海蟹か、初めてだなあ」

「季節としては少し遅いけど。まあ、二人とも初めてだと思ったから、王寶和にしたんだ」

「嬉しいねえ……、おまけに美人つきか」

「上海蟹ってあれだんべえ、家の祖父じいさんに聞いたことあっけど、

“藻屑蟹”のことだんべえ？」

中国藻屑蟹モクスは、中国及び朝鮮半島東岸部が原産のイワガニ科の一種である。

従来は支那藻屑蟹シナと呼んでいたが、近年ではあまりこの名称は用いられない。

日本では一般に上海蟹の名で知られる。

上海や香港などでは、秋から冬にかけてが旬とされ、大変珍重されている。

最近では北京などでも人気食材になっている。

「もくず蟹？　なんだ、それ？」

「蟹のハサミんとくに毛の生えたやつだんべえ？」

「ああ、確かに生えている」

「うんじゃ、そうだ。間違えねえ」

「ああ、俺も思い出した。子供のころに捕まえたことあるわ。確かによく似ている」

「それならわしも知っている。肺臓ジストマが寄生しているやつだ。わしの家の方じゃ、“モクゾウ”ってゆったな」

「俺あ家ちの方じゃ、“モクズ”だ。小つちやくて食うところねえから、擂鉢で擂り潰して笹で漉して、オツケ（味噌汁）へぶっこんで食った。うんまかったなあ…。なんだあ、ジストマって？」

「寄生虫だ」

「ひよえーっ…、おつかねえな。これから、そんなの食うんかあ？」

「姿は似ていても違うだろう。だって、世界的に有名な蟹だぞ、上海蟹は……」

「わしは食うぞ。生で喰うわけじゃねえもん。それに峪口たちは、いつも食っているだろう」

「まあな、いつもってわけにはいかないけど、ときどきはな」

「それにジストマって、川魚に寄生してるんだろう。わしと峪口は生でさえ食わなきゃ大丈夫だ。熊ちゃんの場合は、生で食い慣れているから、問題ないだろうけどな」

2

王寶和は上海蟹の名店である。

場所は南京東路の裏通り、福州路に面している。

正式には“王寶和酒店”という。

酒店はホテルの意味で、その五階にあるレストランが王寶和だ。

「そろそろいい時間だから行こうか」

時刻は六時、三人が店に着くと、周麗はすでにロビーで待っていた。峪口に気づいた周麗が二人の所に歩んで来て、

「峪口さん、お久しぶりです。お元気でしたか」

と、ハキハキとした口調で挨拶をしながら右手を差し出した。

「やあ周さん、お久しぶりですね。お元気そうでなりよりです。この二人は私の悪友で、施川と邑中です」

峪口は軽く周の手を握り、二人を紹介した。

「お友達ですか。……周と申します、よろしくお願ひします」

と、丁寧な挨拶をしながら、二人にサツと名刺を差し出した。

「せつ、施川です。よ、よろしくお願ひします」

名刺を差し出す施川の手が、心なし震えて見えた。

いつもは軽口を言う施川が、顔を少し赤らめて寡黙になった。

「あ、ありがとうございます。お、俺あ、名刺は持ってねえもんで…

…」

仰々しく名刺を受け取った邑中が、少年のような恥じらいを浮かべて言った。

「えっ、あ、いいんですよ」

「俺あ、邑中和利といいいます。峪口とは保育園からの付き合いで、こっちのハゲとは高校るときからで、ええと、俺あ、自営業なモンで名刺はねえんです」

と照れながら自己紹介をして、右手を差し出した。

「あ、はい。わかりました。うふふふっ…」

周は微笑みながら邑中の手を握り返した。

「あつ、このデブ、うまいことやりがつて。いいな、いいな。それじゃあ、わしも……」

と、施川も右手を差し出した。

「えっ、あ、はいはい」

「周さん、こいつら調子に乗るからあまり構わないでください。と  
ころで彭さんは？」

「ええ、でももう直ぐに着くはずですよ。道路が混んでいるので少し  
遅れるって、先ほど電話がありました」

「さつきハゲとかなんとか言ったな」

「オメエも俺あのこと、デブってゆったんべえ」

「間違ってるか？」

「うんにゃ。俺あも間違っていねえべえ」

「確かに……」

施川と邑中がいつものようにじゃれあっている。

「そうですね。どうします、ここで彭さんを待ちますか、それとも  
店の中で？」

「予約は何時ですか？」

「六時半です」

「そうですね。……五分前ですね。じゃあ、店の中で待ちましょう。  
確か、このお店は予約から十五分過ぎると、自動的にキャンセルさ  
れるはずですから」

「へーえ、キャンセル料を取るんじゃないかと、店側からキャンセル  
しちゃうんだ。すごいねえ……」

「そうなのよ、施川さん。この店は、予約を取るだけでも大変なん  
だから」

「いや、ありがと、ありがと、シエシエ、峪口様」

「うんだあ。銭っ子は俺あと施川で出すかな」

「なななな、なにー！。か、勝手に決めるな、ボケ。後でゆっくり  
相談しよう」

「でえの男が、高々銭のこって、うるたえんな」

「御大尽さまあゝ、そんなことゆわねえでけるおゝ」

「うふふふっ…、あらっ、いらしたみたいですよ」

二、上海蟹の値段は？

1

エレベーターを待つ四人のところへ、彭成軍が走って来た。

「すみません、峪口さんすみません。車が混んでいたものですから、いや、ほんとうにすみませんでした」

と、息せき切って詫びを言った。

「問題ないよ彭さん。ちょうどぴったりだ。とにかく店に入ろう」

五人はエレベーターに乗り込んだ。

「こちらがお友達ですね？」

「二人ともそうです。会社で話した、四十年来の悪友です」

それだけ話すと、エレベーターの扉が開き、待ち受けていた小姐（女性従業員）に導かれ、五人は予約席に着いた。

店内は八分の入りだが、すべて予約で埋まっていて、小一時間もすれば満席になると小姐が答えた。

今日の上海蟹の値段は、一斤（500g）二百五十元だと説明した。

上海蟹の旬は十月から二月ぐらいまでだ。

走りはなんといっても雌の卵だが、十一月の声を聞くと雄の身のゼラチン質が美味しくなる。

「そろそろ旬は終わりだけど、今日は思い切って雌と雄を一パイずつ注文しましょう」

「大闸蟹を一人二ハイずつですか、峪口さん高くつきますよ」

彭が忠告した。（ドウ・ザ・ハア）

「今日は周さんにも来ていただいたし、施川と邑中も上海蟹は初めてのことだから、いいでしょう」

「ドウ、ザ……なんとか？」

「ドウ・ザ・ハアですよ施川さん」

「なんですか？」

「上海弁で上海蟹のことをそう呼ぶんです」

「ドウ・ザ・ハア、ですか」

「お上手です」

「邑ちゃんゆつてごらん。はい」

「……、糞ッパゲ」

「ほほほっ…、嬉しいわ。私、近くに住んでいましたけど、実はこのお店で食べるの二度目なんです」

「そうなんですか」

「実は俺も初めて。彭さんは何度か来たことがあるンでしょう？」

「はい、前の会社のとくに…、日本のお客様をお連れして、何度か来ています」

「彭さんはね、以前、日本の有名なコンサルティング会社にいたんだよ」

「私は彭さんの部下でした。うふふふっ…」

周麗が補足した。

「ははははっ…、いい上司だったでしょう」

「ええ、とつても」

周麗はすまし顔で言った。

「たっ、峪口から聞いたンですけど、周さんはとても優秀なンだそうですね」

「そうですね。彼女は“復旦大学”出身の才媛です。はっははは…」

…

と言う彭の言葉を受けて、

「あら彭さん、なにが可笑しいのかしら」

周麗がキッと彭を睨んだ。

峪口はその顔に妙に艶かしい色気を感じた。

「おお、怖い、怖い」

「そうですね。私は才媛でしょう。ねえ、彭さん。ほほほほっ…」

「この通りです。怖い部下でした」

「まあ、そんなこと、ありませんのよ。峪口さんならわかりますわね」

と言って左目でウインクをした。  
「えっ、あ、はい」  
峪口は慌てて同意を示した。

2

「お二人とも日本語がとてもお上手ですけど、日本へ留学経験が  
おありなんですか？」

タイミングよくで施川が質問をした。

「彭さんは五年、私はまだございませんの」

「そ、それでそんなにお上手なんですか。この熊男なんか、五十年  
以上も日本に住んでいるのに、まともな日本語が話せないんですか  
らね」

「まあ……、確かにみなさんとは少し違いますね」

「へへへっ……、少しではありませんよ。彼これ四十年の付き合いに  
なりますが、五十年付き合いのある峪口に通訳してもらわないと、  
なにを言っているのか理解でないんですからね」

「はあはははっ……」

「おほほほほっ……」

周と彭か声を揃えて笑った。

「ふんなことあんめえよ。俺あのは“ひょうじんご”だんべえ」

「こらあー、嘘をつくな。美しい日本語のイメージが壊れるだろう  
が」

「ほほほほっ……、面白い方ですね。私、ぜひ、日本へ行ってみたい  
のですけれど……。施川さん、私を連れてってくださいますか？」

「いつ、いいですよ」

施川が即答した。

「任つかせてください。周さんのためなら、たとえ火の中、水の中。  
頑張らせていただきます」

「えっ、ほんとうですか？」

「ほつ、ほんとうです」

「こらこら、施川。また、調子のいいこと言って」

「ふんどだ。この男はハゲで嘘つきですから、ほんとにしねえてください」

「まあ、そうなんですか。施川さんたら、本気にするところでしたわ」

「ハゲは余計じゃ。ほつ、ほんとです。しゅ、周さんのためなら、家庭を捨てます」

「まだゆってるどお、このバカハゲは」

「ほほほほつ…、おもしろい方」

と言った、周の目は笑っていない。

間もなく上海蟹が雄雌合計で十パイ、小姐が盆に乗せて運んできた。“これをこれから蒸しにかけるので、品質を確認してください”という意味合いである。

その日の蟹は大きめで、一パイが三百グラム以上ありそうだとすると、一パイは百五十元見当になり、十パイだから合計で千五百元になる。

中国のレストランでは蟹に限らず、生きた食材を確認させるところが多い。

蟹は一パイずつ身動きができないように、丈夫な麻糸できつちりと結ばれていた。

なぜなら上海蟹の爪は強力で、挟まれようものなら、指が取れないまでも、かなりの深手を負うことになるからである。

また、蒸したときに暴れて爪や足が取れないように、という配慮もある。

上海蟹は川蟹なので寄生虫の恐れも否めない。

そこで時間をかけて蒸しあげる必要がある、最低でも三十分は蒸すとのことだ。

### 三、上海蟹尽くし

1

上海蟹は最後のお楽しみということで、先ずは前菜が出てくる。

キュウリの大蒜炒め、

世界三大ハムのひとつキンカハム金華火腿のゼリー寄せ、

小振りな上海蟹の紹興酒漬け、

上海風漬物など、

六品の前菜がテーブルに並べられた。

上海蟹の紹興酒漬けは実にうまい。

特に卵の部分はネットリしていて、まるで上質の雲丹の味わいである。

更に、トロリとした塩辛風の肉味は日本酒の肴として絶品であるが、残念ことに、この店に日本酒は置いてない。

「施川さん、ええとそれに、むり、むら、昆中さん。お二人はこの料理に少し不安を感じるかも知れませんが、勇気を持って、ぜひ味わってみてください」

「これ生だんべえ、俺あは要んねえ。ジスト…」

「かあかかか…、ジストマか、大丈夫だ、君の場合はジストマが逃げていく。わしはもちろん食べます。周さんのお勧めなら、たとえ毒でも食べます」

「まあ、さすがは日本男子ですこと。彭さん、見習いなさいよ。ほほほっ…」

「はははは……、やれやれ、とばっちりが来た。施川さん、あまり上海女性を煽てないでください。それでなくとも、上海の女性は十分強いんですから。ねえ、峪口さん？」

「なんですってッ！」

「ほらね、施川さん」

「おっほほほ……。嘘ですよ、施川さん。上海女性は優しいんです

すのよ。ねえ、峪口さん？」

と言つて、周麗は科を作つてみせた。

「えっ、まあ、なんとお答えしてよいものやら……。さあ、みんなで乾杯しましょう」

「まあ、峪口さんたら……。ところで、ジストマってなんですか？」

「えっ、あ、いや、邑の、邑中の嫌いな料理です」

峪口はジストマの説明を避けてはぐらかした。

王寶和は上海蟹の専門店というだけあつて、出てくる料理、出てくる料理、蟹尽くしである。

海老シンジョウならぬ蟹シンジョウ、野菜炒めの中にもほぐした蟹肉といった具合である。

「いやー、うまい。どれもこれもうまいわあ」

「ふんとに、うんめえくなあ」

「うんめえ〜、うんめえ〜つて、山羊かアンタは」

邑中と施川は夢中で料理を掻き込んでいる。

「おい、君たち、少し控えた方がいいぞ」

どれもこれもおいしくて、つい箸を出してしまうが、ここはグツと我慢が肝要である。

2

なぜならメインディッシュの上海蟹は、まだ暫く出てこないからである。

「でえじょうぶだあ。いくらでもへえる」

「わしも旨いものはいくらでも入る」

「ほんとうに豪快な食べっぷりですこと」

「峪口さん、みんなで乾杯しましょうか」

との彭の提案に、

「わしはそろそろ紹興酒がいいな」

施川の調子が上がってきた。

「わかりました。このビールを空けたら、紹興酒にしましょう」  
「彭さん、安いやつでいいよ、この男は底なしだから。そうだ、早く酔わせるために“白酒”ももらおうか」  
「そうですね、いきますか」  
「おう、一番強いのもらつてくれ」  
「いいですねえ。施川さん私と勝負しましょうか」  
「施川、周さんは半端な強さじゃないぞ」  
「オツケー、オツケー、やらいでか。わしも半端ではないぞお。女性に勝負を挑まれて逃げたとあつては、ご先祖様に申し訳が立たん」  
「さすが男の子、お手を柔らかかに。うふふっ……」  
「へへへっ……、周さんに褒められた。峪口も一緒に、なっ」  
「よおーし、今日は徹底的に飲むかあ」  
「俺あ、茶をもらうべえ」  
「あらら……、拍子抜けするな。相変わらず空氣の読めねえ熊だこと」  
「酒は強くねえもん。俺あ飲み過ぎつと、引っくり返えちゃうからよお」  
「まったく、一升瓶でラツパ飲みしそうな面あしやがって。お茶だあ……、中国を舐めとんのかあ！」  
「ふんなことゆつたつて、ほんとに弱ええんだもん。オメエが俺あの分も飲めばよかんべえ」  
「邑中さん、無理なさらない方がいいですよ。中国の白酒はとても強いですから」  
と彭が助け舟を出した。  
「だあ〜つて、熊ちゃん。よかつたねえ」

3

ワイワイガヤガヤと杯を重ねていると、見覚えのある旅行社の旗を掲げた添乗員に先導された日本人の一団が入つて来た。  
すでにお酒の入った方もいて、客席を睨め回すようにして、“俺た

「ちは特別な客だ」といった横柄な態度で個室へ向かった。

このような日本人の態度が、中国人から見ると、実に不愉快に感じるところだ。

彼らが個室に入ると、「待ってました」とばかりに、従業員がビールを運び込む。

それを見た周麗が囁いた。

「ああ、あんなにたくさんのビール、まずあれでお腹を膨らませます。添乗員の魂胆が見え見えです。次に簡単な前菜、そして炒飯とか餃子が山のように出されるはずですよ」

なるほどその通りで、大皿で炒飯と大振りの焼き餃子が数皿運び込まれていった。

上海で焼き餃子は珍しいには珍しい。

そして再びビールの追加である。

「恐らく、ひとり千円（一万五千元）以上は取られているでしょうね。日本の団体さんはいい力モですよ」

と、彭がもらった。

五人が入店してそろそろ一時間半が経過、

「上海蟹はまだかなあ……」

「そうだな、そろそろいいね」

と言う施川と峪口の会話を受けた彭が、早く出すよう催促するため席を立ったとき、個室に入った日本人団体客は早くもお帰りである。

「ほら、私の言った通りでしょう。ビールとご飯もので腹を満たしておいて、小振りの冷えた上海蟹、最後にデザートのスイカが出て、はいご馳走様です」

と言う彭の言葉を聞いた施川が呟いた。

「時間がありません。さあ、次の観光に行きましょう、でしょう」

「施川さん、その通りですよ」

#### 四、上海蟹の食べ方

1

旬の走りにうまいのは雌で、腹側の上蓋を外し、尻側から甲羅を外すと、中に半熟卵のような色をした卵がたつぷりと詰まっている。

“ちよつとそこの方、外した上蓋を捨ててはいけませんよ”

なぜならば、二重になった皮と皮の間においしい身が隠されているからです。

また甲羅にも卵がへばりついているので、そこに大蒜など刻み込んだ特製の黒酢を垂らし込み、かき混ぜて一気に嚼り込みます。

この癖のある黒酢、こいつが上海蟹と実に相性がいいのです。

“お待たせしました、いよいよ本体です”

ちよつと痛いけど蟹の手足をしっかりと持って、真ん中から縦に二つ割りにしましょう。

“さて、どちらから食べようか……”

私ならたくさん卵のついた方に、たつぷりと黒酢を滲ませて、一気に齧りつきませす。

すると、濃厚な卵の味とゼラチン質の肉の蕩けるような味が渾然一体となり、まさに口福が訪れます。

もう半身も同じように食し、

“ああ、おいしかった、ご馳走様”

と言つと、

“なんと勿体ない”

と、上海人に叱られます。

彼らは蟹のハサミや足も噛み砕き、時間をかけて綺麗に平らげます。

#### 五、上海蟹のブランドは“陽澄湖”産

上海蟹にもブランドがあつて、上海市内から高速道路を飛ばして小一時間、陽澄湖産がなんといってもナンバーワンです。

というよりも、この湖の蟹だけが唯一絶対のブランド品なのです。陽澄湖産とその他の場所で獲れたものでは価格がまるで違います。当然の如く偽物が出回ることになります。

陽澄湖産は腹が白いと聞けば漂白し、爪の毛が金色だと聞けば脱色するといった具合です。

それに堪り兼ねた産地が、爪に電話番号とナンバーの入ったタグをつけ、本物の証としました。

そこに電話してタグのナンバーを言えば、本物かどうかを証明してくれる仕組みです。

しかし、タグのついた上海蟹が出てきたからといって喜んではいけません。

なぜならば、そのタグと同じものがどこでも買えるのですから……。

以前、高級レストランで上海蟹を食する機会に恵まれました。

そこで試しに電話を試してみたところ、予想通り、誰も電話に出ませんでした。

従業員曰く、

“今日は日曜日、担当者が休みです”

旬の走りということもあつて、小ぶりながら一パイの値段は二百元（三千円）とかなり高価なものでした。

同行した日本人曰く、

“まあ、おいしいといえばおいしいが、北海道の毛蟹やタラバと比べると、貧乏臭くて物足りないね”

と、だいたいがこんな感想を述べます。

しかし上海人の前でこの言葉はタブーです。

“ いやあ、さすがにおいしいですね。みなさんが誇るだけのことはあります”

と満面に笑みを湛えて言えば、日中軋轢の解消に少しは役に立つことでしょう。

九時を少し廻ったところで店を出て、彭と周とは店の前で別れ、夜景を見たいという施川の要望を入れて、三人はもう一度南京路へと向かった。

## 第十章 魅惑の夜上海

「、ピンクの床屋？」

1

「へーえ、すごいな、まるで香港だ。このネオン看板はすごいを通り越しているよ。異常だ」

「ハゲ、オメエは香港へ行ったことあんのかあ？」

「わしだって、香港ぐらい、行ったこと、ねえ。行ったことはねえが、テレビや映画では見たことがある。アチョーッ！」

と奇声を発した施川が、邑中の植木鉢頭を思いつ切り張り倒した。

「いでえーッ！」

「かあかかか……、アチョーッ！」

「いでッ！ いでててて、いでつてばよあ」

「ハゲを舐めるなよ。ポカツ！ おまけじゃ」

「おお、いでえッ！ 峪口い、助けてくんろあ」

邑中は峪口の後ろに廻り込んだ。

「おまえが悪い」

派手なネオンに彩られた南京路は、純情可憐な田舎娘から化粧もケバイ夜の蝶へと変身する。

「寒いのに人も多いなあ」

「ふんどだあ。まるで芋を洗ってるみてえだあ」

「ほんとだ。邑中が一個、邑中が二個、と。芋がいつぱいだ」

「南京路は観光客が多いんだ。地方のおのぼりさんに海外からの観光客。地元の人は少ないそうだ」

「浅草みてえなもんか？」

「そうそう、イメージとしては浅草だな」

三人は“新世界広場”の前から人波を掻き分けるように東へ向かつ

て進んだ。

「ところでさあ……、さっきの通りに、クルクル回る日本の床屋さんのようなネオンがあったよな」

「ああ、あった、あった。あれに目をつけるとは、さすがは施川さんだ」

「中を覗いたら、ミニスカートの女性は何人もいた。彼女たちは理容師？」

「はっははは……、あのコスチュームにハサミは似合わないだろう」「そうだよなあ。……あれは、何屋さん？」

「くくくつ……、わかっているくせに……。通称“ピンクの床屋”さん。お察しの通り、違う頭を気持よくしてくれるところ、だそうだ」

「だそうだ、なんて、如何にも誰かに聞いた風な」

「だって入ったことないもの」

「けけけつ……、嘘こけ」

「あんだあ、違う頭ってよお？」

「けけけつ……、わかっていくくせに、このど助平が。芋の頭だよ」

「ああん、イモ？ 俺あ家の芋は日本一だあ。……なに、チンポコ

だと、やんだあ、施川のど助平」

「なあんが、施川のど助平じゃ。カマトト振りがつて、熊、おまえさんがフィリピンバーへ通っていることは、村中の人知ってるぞ」

「あへつ、あんで知ってんだあ？」

「あつ、こいつ」

「しゃんめえよお、新川に誘われて、遠島の店へ一回行っただけだあ」

「遠島つて、あの遠島か？ ふーん、あいつが自分で経営しているのか？」

「うんだあ。俺あのゆうことならなんでも聞く」

「あの悪がねえ、……不思議だよなあ」

「へへへつ……、保育園のとき、俺あ、あいつをぶん殴ったことあんだ」

「おお、あの伝説の熊の脱走騒動か」

2

「なになに、なんの話だ？」

「でえへへへっ……」

「くくくくっ……、この邑ちゃんはねえ……、今じゃ大人しそうに見えるけどねえ……、餓鬼んときはものすごいワルで、手が付けられなかつたらしいんだ」

「でえへへへっ……、あんまし褒めるなよお峪口い。くうくくくっ……」

「誰も褒めてねえよ。後にも先にも、たった三ヶ月で保育園を退園になったのは、熊、おまえだけだろう」

「そいつは珍しいな。わしも保育園中退なんて聞いたことねえよ。恐らく全国でもおまえだけだ」

「なっ、だろう。それで遠島には、邑中の恐ろしさがトラウマになっっているんだろうな」

「なるほど、それが大人になっても抜けないわけだ。面白いモンだねえ。この男がねえ……」

「いでッ！」

施川が邑中のデツカイ植木鉢頭をパチンと張った。

「なあなあ、峪口い……」

と、施川が声を潜めて囁いた。

「な、なんだよ？ えっ、どうやってやるのかって。俺もよく知らないけど、奥に個室があるらしいよ」

「個室か……、個室、ってゆくと、なんとなく淫靡な香りがするなあ。あのさあ……、入ってみようか？」

「おっ、きたな。でも、あんたは人畜無害だろう」

「そうだけどさあ……。なんとゆうか、まあそのお……、風俗の調査ということで」

「風俗調査か、じゃ調査費用は施川さん持ちかい？」

「それはちよつと困るけど、高いンだろう？」

「まあ、うちのスタッフの話だけど、高くは、ない、みたいよ。でもお…、知らない場所じゃ怖いな。特に日本人と見ると、ボラれるからな」

「ボラれても大したことはねえだろ」

「否、そうでもないみたい。結構、駐在の長い連中がやられているもの、いろいろと聞いたことある。相当な額をボラれるみたいよ」

「そうか、怖いのかあ…。誰かスタッフを呼んだら」

「もう九時半だよ」

「いいじゃねえか。わしらは明日帰るンだぜ。それに今日は土曜日だろつ」

「うーん、まあそうだけど。あまり綺麗じゃないらしいよ」

「そんなことねえよ。結構かわい娘ちゃんがいたよ」

「目聡いやつだな。そうじゃなくて、不潔つぽいンだつて、悪い病気をもらつても知らねえぞ」

「大丈夫、じえんじえん問題ありません。ほら、日本から持ってきたンだ。出張の友“コンちゃん”」

「俺あも…、こんなこともあるべえと思つてよお」

「持ってきたのか、あんたら。他のことはともかく、こんなことだけは準備がいいねえ」

「エロ熊、かあちゃんに持つていけ、つてゆわれたのか？ へっへへへっ…、まさかあ、なっ？」

「うんだ」

「なにっ!？」

二、備えあれば憂いなし

「備えあれば憂いなし、ってゆうべ」  
「ははははっ…、こんなときに使う言葉じゃないような気もするけどな。よしっ、陳君に電話してみるか」  
「おっ、峪口くんもやっとその気になったようだね。この、ムッツリ助平が」  
「うんだうんだ。峪口がこん中で一等助平だんべえ。エロ河童」  
「じゃかまし、まあな、俺もまだ男の子だからな」  
「おおっ、最初から素直に行きたいってゆえばいいのによお。なあ、エロ豚」  
「うんだ。なあ、エロハゲ」  
「俺、マジに初めてだ。スタッフから何度か誘われたことがあるけれど、いつも断っていたんだ」  
「はいはい、言い訳はいいの。ほら、早く電話、電話」  
峪口は部下の陳周明に電話を入れた。  
「……、というわけだから、せつかくの休みに申し訳ないけど、頼むよ」  
『はい。いいですよ、退屈していたところですから、直ぐに行きます。歩行街の味千ラーメンの前で待っていてください』  
陳は峪口の忠実な部下で、中国人にしては珍しく口の堅い男である。  
「直ぐに来てくれるそうだ」  
「そうか、それはよかった。おい熊、涎を拭いとけ」  
「あ、えっ、う、うん」  
「お陰で俺の信用はガタ落ちだ。彼から言われたよ。峪口さんが、まさかそんな場所へ行くとは思いませんでした、ってね」  
「へっへへ…、それは峪口の本性を知らない人間だな。よかつたじゃないか、これからはいつでも堂々で行けるぞ」  
「バゝ力、あんたらが来たときだけだよ。ああ、俺の貞操が……」  
「けえけけけっ…、貞操ときたか。“涙の操”、ピンカラ兄弟だな」

「うんだあ。ほんとはいつとう助平なんだからよお。ほれ、俺あのやるべ」

「なんじゃこれは、馬用か」

「うーん、確かにデカイ。人間にはデカ過ぎる。わしのをやるう。マツモトキヨシで買った、早漏防止機能がついている」

「なんじゃそれは？」

「厚さが通常の三倍ある」

2

峪口たちは三十分ほど待つて陳と合流した。

「いやー、陳さん、悪いねえ。こんな遅くに……」

既に時刻は十時を回っていた。

「いえ、ぜえーんぜん問題ありません。用事のあるときはいつでも呼んでください」

「こいつが施川、陳さんに迷惑をかけた張本人。それでこっちが邑中」

「施川です。よろしくお願いしもおーす。いや、申しわけありませんねえ、峪口がどうしても行くつてゆうモンですから、わたしは止せとゆつたのですが……。はあはははっ……」

「はいはい。それじゃあ、止めにしますか」

「駄目、嫌、それは拙い。せっかく陳さんが来てくれたんだから」

「ほら、陳さん。わかるだろう、こつゆう男なんだ」

「はははっ……、お二人のお話を聞いていると、まるで漫才ですね」「うんだ」

「うんだ？ 面白い言葉ですね。邑中さんは、出身はどちらですか？」

「邑中は熊に育てられたモンですから、最近よつやく言葉を覚えたばかりなんです」

「そうですね、どおりで……」

「嘘だ、嘘、嘘」

と、邑中が向きになって否定した。

「ははははっ…、まさか、ねえ」

「それにしても陳さんの日本語、すごいですね。どっちが日本人かわからない」

「誰と比べてるんだあ、エロハゲとかあ？」

「エ、エロハゲ…？　ありがとうございます」

「じあましいい！　エロ豚があ」

「エロ、豚…」

「ほら、二人とも、陳さんが呆れてるだろう。陳さんはねえ、阪大の大学院を出ているんだよ」

「は、阪大ッ！　に、に、日本語でえ」

施川は慌てるとドモル癖が出る。

「当ッたりめえだろう」

「ははははっ…、大したことないですよ」

「ひよえーッ！　そんで、てえしたことねえければ、施川はどうなるんだべえ…」

「ただのアホじゃ。なにゆわせるの」

「みなさんはお付き合いが長いンでしたよね」

「邑ちゃんとは五十年以上、施川とは四十年来の付き合い、腐れ縁だな。迷惑していますよ、特にこの施川さんには……。ところで陳さん、どこか知ってる？」

「私は、そっち方面はあまり詳しくないんですけど、来る途中、友達に電話で訊いておきました」

「それはよかった。高くてもいいから、清潔で安全な店がいいな。この二人はどうでもいいけどね」

「またまた、冗談は顔だけ、顔だけ」

「駄目だよお、銭っ子ならあつから」

と、心配気に邑中が口を挟む。

「はいはい、わかっています。“古北”の方へ、少し遠いですけどいいですか?」

「いいよいいよ。タクシーでバーツと行こう。わしがタクシー代を持つから」

「タクシー代は俺あが払うってばあ。その代わり、施川、他は全部もってくんどお。……あんだあ、千元しか持ってねえ……。オメエは帰れッ!」

「カードならあるモンね」

「カードですか、使えないと思います」

「あらあ……」

「バカ、そんなところでカード使う馬鹿はいめえ」

「ここ、ここにいるよ」

と言って、施川は自分を指差した。

「陳さん、だいたい一人いくらぐらい?」

「訊いた話では、四百元ぐらいからあるそうです。でも、シャワーもないですよ」

「施川さんのご希望は、どのあたりまで?」

「そつ、そらあ、まあ、できればホニヤラ、ホニヤラあたりまで、やってもらえれば……」

「ホニヤホニヤまでだって、陳さん」

「そうですね、ホニヤホニヤですか。施川さん、いい度胸していますねえ」

「違うべえ。ホニヤラ、ホンニヤラだんべえ。なあ、ハゲ」

「ハ、ハゲ。こら、熊ッ! どさくさに紛れやがって。でも熊が正解。ホニヤホニヤじゃなくて、ホニヤラ、ホンニヤラだ」

「あつそう。どうしてもホニヤラ、ホンニヤラがいいわけね?」

「おうよ、あつたぼうよお。おーいら伝助、江戸っ子でえーい」

「でんすけ? いどつこ?」

「馬鹿つて、こつてす」

「はっははは……、いいの、いいの、陳さん相手にしなくて」

「峪口い〜、……わし、小便」

「俺も、……ウンコ」

「まったくうるさい連中だなあ。そのラーメン屋で借りてこい。

奥の方にあるはずだから」

「峪口い〜、紙ある？」

「まったく、紙も持ってねえのか。……ほれ」

「漏れちゃう、漏れちゃう。行くぞ熊。峪口い、待ってるよ」

「うんだあ、峪口い待っててくんどお。ハゲ、待ってくんどお。一

緒に行くべえよお」

「置いて行けるか。放し飼いにできなねえ獣を、二匹も置いて行けるわけねえだろうが。ほれ、早く行ってこいよ」

三、カラオケでホニヤラ、ホンニヤラ……

1

店に駆け込む施川と邑中を確認してから、峪口は陳に切り出した。

「どこかカラオケでいいよ。飲んで少し歌わせてやれば、直ぐに寝ちゃうから」

「いいんですか？ 楽しみにしているようですが」

「いいのいいの。本当はね、あまり行きたくないはずなんだ」

「えっ、どうゆうことですか？」

「二人の性格はよく知っているよ。要するに、自分から言い出した手前、ああはゆってるけど……。意外とそういうことには硬い連中なんだ。特に邑中は、そっちはからつきし駄目。施川もよくタイでどうしたの、韓国でどうしたのって言うてるけど、精々カラオケで小姐の手を握ったぐらいのモンだよ」

「そうなんですか。実は、僕もあまり好きじゃないんです。彼女と一緒に住んでいますから」

「そうか、それなら話も早いや。二人が戻って来たら振るから、うまく俺に話しを合わせてくれる？」

「ふふふっ…、わかりました。面白そうですね」

「おっ、来た来た」

「ふーう、さっぱりした。どうも最近、ビールを飲むと近くなっていけねえ」

「邑ちゃんがまだだ」

「そういえば個室で、うんうん息んでいるのがいた」

「おっ、来た。おーい、早く来おーいッ！」

「あいよおーッ！」

「あいよお、じゃねえ、早く来い。ところでタクシーは捕まるかな」

「施川……」

「あ、うん。なあに？」

「陳さんに聞いたんだけど、ほら、あんたが以前泊まったホテル…

…」

「うん？ わしが泊まったホテル、それが？」

「ああ、あのホテルのカラオケは、“その道”で有名ならしいよ」

「その道？」

「あんだあ、オカマバーかあ？」

「おまえさんはそっち方面もオツケーか？」

「あ、う、うん。そ、そんなこと、ね、ねえべえ」

「エロ豚、なに照れているんだよ。これからは一緒に部屋に寝られねえな」

「ハゲは嫌<sup>き</sup>れえだ」

「峪口ならいけるか？」

「……うん」

「あっ、顔が赤くなったぞ。だそうだけど、峪口い、どうする？」

「わしは、邪魔はせんよ」

「よせよ。考えたくもねえ……」  
「でも、あのホテル結構いいホテルだったし、日本人の観光客も多かったよ」  
「だろう。だから、なっ」  
「なるほど、日本人スケベか。灯台下暗しだった」  
「わかってるじゃないの。あんたみたいな男が多いんだよ」  
「うんだ。ハゲは強いからな」  
「なるほど、つてかあ。なんでやねん」  
「ふんでも、カラオケじゃ歌って飲むだけだんべ？」  
「いやいや、そうじゃないそうだよ、邑中君」  
「峪口が意味深に笑う。」  
「そうです。小姐と意気投合すると、部屋まで来てくれて、ホニヤラ、ホンニヤラもオツケーだそうだと、陳がフオーすると、」  
「ふんとかあ！？ ち、ちんさん」  
「ほっ、ほんとう、チンさん？」  
二人が同時に声を発した。  
「ええ、聞いた話ですが、そうらしいですよ。大阪の連中がよく遊びに行くみたいですから。この前会社へ来たとき、自慢してました。触り放題だったとか、言っていました」  
「さっ、触り放題。よっしゃーッ！ そこへ行こう。なあ、邑中、いいだろう。なんなら部屋取ろう」  
「むっふふふっ……」  
「なにが、むっふふふっ……、じゃ」  
「へへへへ……、わしらは旅行者、旅の恥は掻き捨てじゃ。峪口い、かわいそうになあ。くくくっ……」  
「ほれ、ぐずぐずゆってねえで、早く行くべえ」  
「おっ、エロ豚が燃えてきた」

施川はカラオケで小姐たちに囲まれると、ウイスキーのロックを立て続けに呷った。

そして小姐に促され気持よさそうに十八番を四、五曲がなり立て、席に戻ると急に静かになった。

施川はしっかりと小姐の膝枕だ。

邑中はと見ると、調子に乗って飲めないウイスキーを飲んだ所為か、アツという間にダウン、既に豪快な酩をかいている。

賑やかな酩の二重奏である。

「ほらな、陳さん。言ったとおりだろう」

「本当ですね。付き合いが長いと、なんでもわかるンですね」

と、突然施川が起き上がり、

「小姐ツ！ 飲むぞツ！」

と叫ぶ、いつもの寝言だ。

「ああ、驚いた。起きているのかと思いました」

陳が胸をなぜながら呟いた。

「この男も一見能天気には振舞っているけど、相当疲れている。会社もなかなか大変みたいだし、日本のサラリーマンはみんな疲れ切っている」

峪口が本音を口にするには珍しい。

「我々から見ると、日本は豊かで羨ましく見えますけど、大変なんですね」

「まあ、中国も同じだと思っけれど、日本の社会も変化が激しいからね。我々の年代の者にとっては、付いて行くだけで精一杯さ。景気が良くなったって言うけど、それは一部の大企業だけの話だよ」

「そうですね……」

「さて、そろそろお開きにしようか。陳さんお勘定を頼むよ。カードは使えるよね？」

「訊いてみます」

「二千五百元か、思ったより安かった。陳さん、今日は悪かったね」

「いえ、ぜんぜん問題ありません。ところでどうします、この二人？」

「悪いけどタクシーまで頼むよ。施川ッ！ 邑中ッ！ 起きろッ！」  
「駄目ですね。おんぶしていきましようか」

「いや、いいよ。二人とも重いからね。小姐に水をもらおう。それと冷たいお絞りも」

峪口が施川の頭を抱えている間に、小姐がそつと膝を外した。

「ごめんね。重かったでしょう」

峪口が冷たいお絞りを顔に当てると、施川が目を覚ましたので水を飲ませた。

「うっーん、ああ、よく寝た。あれえ？ 峪口いゝ、まだいたのお…、もう帰ればあ…」

などと、勝手なことをほざいている。

「帰ればじゃねえよ。おまえさんも帰るの」

「どこへ？ だいじょうび、小姐、部屋へ行こう」

「ほらほら、みんな怖がっているじゃないか。帰るんだよ、しっかり歩けよ」

「これはこれは、すみませんねえ…。どなた様が存じあげませんが、ご親切にありがとうございます」

「バゝ力。ほれ、水を飲め」

「酒、酒は、もう飲めましえん」

「邑中さん、起きてください。邑中さん」

「なかなか起きませんねえ」

「こらあーッ！ 熊ッ！ 起きろーッ！ 陳さん、頭から水をぶっ掛けてれ」

「はははは……、施川さん、そんな過激なこと……」

「いいのいいの、ちよつとその水を貸して」

「ひょえーッ！ あつぷ、うっへえーッ！ ななな、なにすんだあ」

「あつ、こらこら」

施川が邑中の顔にコップの水を垂らした。

「へえへへへ……、どうだ、起きただろ。じゃあ、わしはもうひと眠り、と」

「ふんじゃあ、俺あ寝るべえ」

「こらこら、二人とも起きろ。ほれ、もう終わりだ、帰るぞ」

「へーい、お休みなさい」

「こらッ！ 施川ッ！ 寝ている場合じゃねえだろ。まだ、ホニヤラ、ホニヤラをしてねえぞ」

「おっ、そうじゃった。エロ豚ッ！ ホニヤラ、ホニヤラするぞおーッ！」

「オメエとかあ？ 俺あ要んねえ」

峪口は陳の手を借りて、マンションへ連れ戻り、ようやく二人をベッドに寝かした。

## 最終章 台風一過

一、惚れた、惚れた、惚れました

1

翌日の早朝、峪口は帰国する施川と邑中を見送るために“虹橋空港”へ向かっていた。

「いやぁー、峪口い、楽しかったよ。悪いねえ、こんな朝早くから“ご満足いただけましたか、施川さん、邑ちゃん？”

「うん、満足。余は大満足じゃぞ。また、ポイントが貯まったら来てもいい？」

「もちろん、お待ちしています。邑ちゃんもね」

「うん。で、なんだあ、ポイントってなあ？」

「まあ、チミにはあんまり関係ない話よ」

日曜日の早朝ということもあり、道路は空いていた。タクシーは快調に飛ばす。

「今度はさあ、どこかへ観光に行きたいなあ」

「そうだな。上海は見るところがないからな。近場にいい場所がたくさんある。蘇州に杭州、それに南京、無錫、紹興に景德鎮。高速道路が開通したから、ひとつ飛ばしで行けるよ」

「蘇州は俺も知ってるぞ、“楓橋夜泊”だんべえ。“張継”の作だ」

「おっ、おおおお……すごいねえ邑ちゃん」

「ただのデブじゃねえな」

「あつ、施川、そりあ俺あの科白だ」

「月が落ちて、カラスがカアと鳴いて、なんとかかかんとか、ってやつだろう。そのくらいは、わしでも知つとるわい」

「おおッ！ てえしたモンだ、見上げたもんだよ屋根屋の禪と。…

…月落烏啼霜滿点、江楓漁火對愁眠、蘇州城外寒山寺、夜半鐘聲到客船」

「なんじゃ、そら」

「中国語ではこうなる。こっちは子供でも知っているよ」

「あらあゝ、そうなのおゝ」

「峪口もただの馬鹿じゃねえ」

「あんがと、とても有名な詩だからね。日本にも良く知られているだろう。特に“寒山寺”は有名で、正月にはわざわざ日本から、鐘を突きに来るツアーもあるそうだ」

「へーえ、暇な日本人が多いなあ。中国人が迷惑するだろう」

2

「はっははは……大丈夫、中国の正月は旧暦だから、元旦は全く関係なし、本当に静かなモンだよ。日本人には寂しいくらいだ」

「なんだよお、餅は喰わねえのかあ。初詣もしねえのかあ」

「ああ、なんにもなし。一応、元旦は休みだけどね。以前はそれもなかった」

「日本の正月を舐めてンのかあ。国際問題になんど」

「日中関係は君に任せる。へえ、そうなんだ。確か、旧暦だと毎年日にちが変わるンだよな。今年の旧正月はいつなの？」

「そのとおり。今日の施川さんはとてもおりこうさんだね。残念ながら、今年はまだ終わったよ。その年によつて一ヶ月くらいずれからね。来年の正月はいつと訊かれて、正確に答えられる人はほとんどいない」

「ふんじゃあ、どうすんだよお？」

「なにが？」

「正月の歌だよ。もうう、いゝくつねゝると、お正月ゝ、って歌あんべえ」

「それは日本の歌だろう」

「テレビで見たことある。あれは香港だったかな？ 毎年爆竹で怪我人が絶えないとか」

「上海も同じさ。いや、それがさあ、ものすごいんだよ。大の大人が夢中で花火をあげまくるんだから。しかも五日間も。特に五日目がすごいんだ。お金の神様がどうかこうとか言ってたな」  
突然タクシーが車線を変えた。

「いてッ！ おい、運ちゃん、安全運転で頼む。家で優しい母ちゃんとかかわいい子供たちが、わしの帰りを待っているんだからよ」  
「へっへへ……、おんもしれえ冗談だあ」

「馬鹿者ッ！ こう見えても、わしの家には愛があるんじゃない。君たちとは違う。それより、ほら周さん」

「ん？ 周さんが、どうかしたか？」

「いやあー、実にいい女だったねえ」

「おっ、また始まった。ど助平が」

「ふふん、邑ちゃんは下品だね」

「また惚れたか？」

「うん。惚れた、惚れた、惚れました。かわいいあの娘に惚れました。次は一緒に旅行に行こう。峪口い、セッティングしてちょうだい」

「バカ。やつぱし只の馬鹿だんべえ」

「へへへへっ……、バカでもなんでも結構、結構。わしは人畜無害の善人じゃ」

「へえへへへっ……、バカにつける薬はねえってけど、ふんどだあ」  
「けえけけけ……」

タクシーが国際線ターミナルに到着した。

二、えっ、お土産は偽札！？

「いくら？ わしが払うから、領収書をもらってよ」  
「いいのか？」

「このくらいは経費で落とせるよ。ん？ 三十五元。はい、五十元、釣りは」

「あんだあ、経費かあ…。俺たち農民は、経費じゃおつことせねえ」

「えッ！ 施川、これ偽札だって」

運転手は五十元札を光に翳し透かしを確認し、手触りを確かめてから峪口に突っ返した。

「うっ、嘘ッ！」

「上海は多いんだよ」

「どうするのよ、これ？」

「どうしようもないな。警察に届けても没収される」

「そうなの……。じゃあこっちの札は？」

施川は別の百元札をつまみ出した。

運転手はその札も先ほどと同じように光に翳し、指で感触を確かめた。

「こっちはオツケーだって」

「チエッ！ 峪口いく、ほんものと代えてよ」

「嫌だよ。記念に持って帰れば。スナックでも行ったとき、女の娘にでも見せなよ」

「そうだな、その手があるな。うん、そうしよう」

「ほら、お釣りと領収書」

「あいよ」

「俺あにくんど。記念にするべえ」

「駄目だよ。スナックの朱美ちゃんに見せるんだから」

「なあー、俺あにくんどつてばあ〜」

「しつこいなあ。どうするんだよ、偽札なんか？」

「村への土産話にすんだからよお。なあ〜」

「しょうがねえなあ。よし、じゃあ千円で売るよ」  
「千円、ああ、ふんなら買っべえ。うんでも、おもしれえべよあ」  
「おお、君は、ほんとは、善い奴だったんだなあ」  
上海の旅の途上、なんらかの買い物をして百元か五十元札を出すと、それを受け取った従業員は、すかさず紙幣の手触りを確かめ、蛍光灯の光にかざす。  
偽札判別機にかける店もある。  
そのときになんと失礼な、と怒ってはいけない。  
偽札は全て没収されるので、真贋を確かめるのは従業員にとって、とても大切なことなのだ。

2

私（作者）が、或る朝いつものカフェで、コーヒーとサンドイッチを買って五十元札を渡すと、それを手にしたレジの小姐から、即座に、

「お客さん、これ偽札」  
と突っ返されたことがある。

「えッ！ でも、今これ、タクシーの……」  
と主張しても後の祭りだった。

偽札に対する考え方も実に大らかである。

日本なら早速NHKニュースのメイン記事に取り上げられるが、こちらでは日常茶飯事のこと故三面記事にもならない。

戦争の話に触れると中国人は機嫌を損ねるが、こんな逸話が残っている。

日中戦争のとき、中国の経済を混乱させる目的で、旧日本軍が大量に中国紙幣の偽札をばら撒いた。

ところがそれを、中国政府は自国紙幣として使用し、混乱どころか大いに経済を援けた。

仮にババ（偽札）を引いても、警察や銀行に届け出るような愚を中

国人は冒さない。

なぜならば、全て没収されて終わるからである。

そこでババ抜きよろしく、なんとか他の者に回すことを考える。

その結果、どうしても、偽紙幣の判別のできない外国人が多く掴まされることになる。

「いやあー、今朝偽札をつかまされちゃったよ。あのタクシー、今度会ったら……」

と言う私の怒りを遮ったスタッフが、

「日本人には見分けがつかないでしょうね、まず無理でしょう。警察へ持って行ったら没収されますよ」

「ええーっ、じゃあ、どうすんのよ、これ？」

と、五十元札をヒラヒラさせる私に、

「どこかで使っちゃえばいいんですよ。タクシー司机（運転手）に掴まされたんだから、他の運転手に回せばいいじゃないですか」

と、事もなげに言う。

「でも偽札使ったら、日本では犯罪だよ」

「全く問題ありません。相手が気づいたら、ああそうですか、わからなかったと言って、別の紙幣を渡せば終わりです」

ですから、いつになっても偽札はなくならない。

また、中国が千元札などの高額紙幣の発行を躊躇する原因でもある。中国ではかなりの割合で、偽札が混じっていることを覚悟しなければならぬ。

当然ながら、その割合は地方に行くほど高くなる。

地方には偽十元札もあると聞くが、手間と経費を考えると、果たして採算が取れるのかと疑問に思う。

噂によると、地方では村ぐるみで偽札を作っているところもあるそうだ。

そんなところにも、沿岸部と内陸部の所得格差の歪が顔を出している気がする。

旅行中に運悪く掴まされたら、上海旅行のお土産を買ったと思って

諦めるしかない。

日本に帰国すれば、きっといい酒の肴になるはずだ。

「じゃあ、二人とも気をつけて帰れよ」

「ああ、また来るよ。峪口もタバコ、早く止めるよ」

「峪口いく、世話かけたな。身体、気いつけるよお」

その日は、上海には珍しい、日本晴れを思わせるような紺碧の空が、虹橋空港の上空に広がっていた。

お終い

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8858x/>

---

半枯れトリオの旅日誌【中国・上海編】

2011年10月30日19時11分発行